南葵音楽文庫紀要

第5号

和歌山県立図書館

目次　CONTENTS

■論文・調査報告

・徳川頼貞による文化貢献の特性──「私性」と「公共性」の輻輳── 7
美山良夫

・南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究（2）
──W. H. カミングスとJ. L. ハットンの歌曲資料をめぐって── 15
佐々木勉

・市販版『薈庭樂話』　その出版、その時代 29
江本英雄

・貴重資料の修復その心と技──南葵音楽文庫を例にして── 39
飯島正行

■資料紹介

・ワーグナー《ローエングリン》　日本初演使用楽譜 54
美山良夫

・ダンディ『セザール・フランク』 58
近藤秀樹

■収蔵資料　目録と紹介

・フリートレンダー文庫　目録と解説 64
林淑姫

・フリートレンダー文庫目録
（旧南葵音楽図書館収蔵「マックス・フリードレンデル文庫」） 68

・南葵音楽文庫　活動の記録　2020（令和2）年度 78

論文・調査報告

徳川頼貞による文化貢献の特性
──「私性」と「公共性」の輻輳──

美山良夫

> 徳川さんは今晩御出立だというのに今頃一体何をしておられるのです、という。そこで、じつはこのようなわけで法王の秘苑を歩いてきたのです、と答えると、同画伯［長谷川路可］は感にたえた様子で、あなたも矢張り立派な芸術家ですね、という。なぜですか、と問い返すと、画伯はそれに答えて、今まで私は随分日本人の送り迎えをしましたが、じゃぁ出発と言う時には皆最後の土壇場までお土産を買って歩いています。あなたのような人に会ったことがない。貴君は生まれながらの芸術家だ、というのである。
>
> 私は、馬鹿なことをいいなさい。私は金が無くなってお土産を買うことができないまでですよ、といって彼の肩をたたいてそこを去った(1)。

徳川頼貞没後、関係者の尽力により刊行された『頼貞隨想』には、著者の晩年の思いが、生涯を振り返った省察が、藩祖の地である和歌山への想念が滲み、10年程前に市販版が上梓された『薈庭樂話』とは、異なる視点や切り口で書かれている。晩節を意識し、経済的な苦難と参議院議員としての政務の多忙のなかで、徳川頼貞は執筆のために少なからず時間を割いていた。みずからの生涯を回顧しながら、新たに稿をおこし、旧稿に筆を加えた。当初は公刊の予定はなく、もっぱら自身のアイデンティティを確認するための営為であったであろう。

上掲の引用は、内容面で最後の章にあたる「第四次外遊」の結尾にあたる。海外における最後の日を、ローマ法王の私的な庭園の散策にあてていたという、何気ないエピソードに読めようが、あえて長谷川路可の言葉を掉尾に引いたのは、頼貞が自らの人生を振りかえり、ある含意を込めたのではないかとも思われる。

長谷川路可（1897-1967）
1951 ～ 57 年、ローマ郊外の教会堂でフレスコ画を制作

2021年3月、紀州徳川400年記念の一環として、徳川頼貞『薈庭樂話』（私家版）の再刊、喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』に加え、『南葵音楽文庫案内』が刊行された。それに先立ち2017年に始まった和歌山県による「南葵音楽文庫調査研究、教育普及、閲覧支援事業」の一環としての『南葵音楽文庫紀要』の年次刊行は、所蔵資料や南葵音楽図書館についての調査研究に些少なりと

(1) 徳川頼貞『頼貞隨想』(河出書房 , 1956), p. 218-219.

も寄与したであろう。

しかし、いずれも音楽に関連した事績が軸であり、徳川頼貞がおこなった活動の全体像が曲がりなりにも明らかになったとは言いがたい。彼をどのように評価するにしても、音楽との繋がりだけからではなく、係わった事業や責務全体を見渡し、さらに彼が生きた時代や環境に投企して考察する必要があろう。そのうえで、徳川頼貞による音楽を柱にすえた文化貢献活動の特性を検討するのが本稿の目的である。

筆者は、南葵音楽文庫の特徴と魅力が、個人文庫でありながら個人文庫を超え、「私性」と「公共性」の相乗にあるとした(2)。今回は、それを実現した徳川頼貞の文化貢献活動もまた、見方によってはいささか特別な、しかし彼が選んだ、選ばざるを得なかった道であり、そこに見られる「私性」と「公共性」が輻輳する姿を素描してみたい(3)。

1. 頼貞の課題と責務

父頼倫が1925（大正14）年5月19日に世を去り、家督をついだ32歳の徳川頼貞には多くの課題や責務が被さってきた。

徳川邸敷地
南葵文庫を残し中華民国公使館、貯金局（未着工）に売却。帝国地理院地図「三田」1928 年版より

まずは、父から承継した南葵育英会総裁として、学生寮の整備や交流機会の提供などに、直ちに取り組む必要があった。南葵育英会会報には、育英会事業のために支援を惜しまず、便宜を供与した頼貞の行動が多数記録されている。その関与は、育成会を設立し、基礎固めのために旧藩領地を巡回して協力を求めた頼倫とは異なり、育英会の組織としての自主性を重んじつつ、在京の奨学生や旧奨学生、育英会賛助会員らとの交流に尽力する形をとることになる。

家督をついだ翌年には、資産税などの納税や邸宅家扶維持等の財務問題に対処するため、財産整理案を策定するなど、紀州徳川家の財務全般にも向きあわざるを得ない立場にあった。すでに頼倫は本邸を代々木に移し、麻布の徳川邸敷地は南葵文庫部分を残して、中華民国公使館（のちに大使館）が、遅れて貯金局が建てられる。

1927年、「華族銀行」とよばれた第十五銀行の経営破綻、1929年の世界恐慌とそれに続く昭和恐慌は、多

(2) 美山良夫「南葵音楽文庫の特徴と魅力―結――個人文庫における『私性』と『公共性』」『南葵音楽文庫紀要』3 号 (2020), p. 7-14.
(3) 徳川頼貞は、自著のなかで紀州徳川家の現状や自身の役職、その業務についてはいっさい語らない。和歌山における調査活動のなかで、喜多村進関連資料（和歌山県立博物館蔵）やその一部の公刊、また南葵育英会会報等を悉に参照できたことが、頼貞の活動を跡づけ、また本稿執筆におおいに役だった。機会があれば年譜として纏め、明らかにしたい。

くの華族の財務に大打撃を与えた。雑誌『講談倶楽部』1931年1月号はその付録に「全国金満家番付」を掲載しているが、2年前の番付から個人の財産のうえに驚くべき変化がもたらされていると報告している。また、毎年刊行されている『人事興信録』との比較対照から、資産上位72名を特定し、資産の変化を調査した研究によれば、そのなかに含まれる旧藩主の家系に連なる華族は6名で徳川頼貞もそのひとりであった(4)。ほとんどが財閥ないし実業家が名を連ねているなかで、頼貞は収益事業を営まずに東京府の高額納税者に名を連ねていた(5)。

この第2の課題は、徳川頼貞や一部の華族に限られたわけではなく、第十五銀行破綻以前にすでに顕在化しており、紀州徳川家が南葵文庫に大礼紀念館（南葵楽堂）を併設した1918年には、近衛公爵、水戸の徳川公爵等の蔵品が東京美術倶楽部で売り立て（入札）にかけられ、その後も蔵品を手放す華族、旧家があいつだ(6)。この状況に危機感を覚えたごく一部の華族は、所蔵する優品を守るための財団設立や設備等の資金を獲得すべく、一部の書画骨董を売り立てに回した(7)。

当主となり襲爵したばかりの頼貞には、おそらく重すぎる課題であったが、家職らの助けで父から受け継いだ事業や徳川家維持のための財産整理に、否応なく取り組むことになった。1927年（東京美術倶楽部）、33、34年（ともに清和園）の都合3回にわたる蔵品売り立て、学術的な標本類やパイプオルガンの寄贈を立て続けにおこなった。この財産整理の具体的、事務的な資料は残されていないが、どのような趣旨、方針で実行されたかについては、本論のテーマである私性と公共性の問題に繋がることになろう。

音楽事業の構築は、言うまでもなく頼貞が最も念願し、心血を注いだ点である。1925年10月に南葵音楽事業部とその附属機関である南葵音楽図書館を設置、あらたに精力的な資料蒐集と整理が始まり、短期間にわが国初の音楽専門図書館としての設備とコレクションを有するようになった(8)。日本の音楽研究を先導する学者、研究者が集い、その活動を推進する組織の先頭に立った頼貞は、

「全國金滿家大番附　附 全國多額納税者一覧」
『講談倶楽部』昭和６年１月号附録
（大日本雄辯會講談社 , 1931）

チウカウカプ
（われわれが縫ったもの）
北海道アイヌ　19 世紀
東京国立博物館。
徳川頼貞が寄贈した厖大なアイヌ文化資料のひとつ。

(4) 増田知子 , 佐野智也「近代日本の『人事興信録』（人事興信所）の研究（6･完）」『名古屋大学法政論集』282 号 (2019), p. 327-367.
(5) 交詢社編『日本紳士録』37 版附録 多額納税者名簿 (交詢社 , 1933), p. 3. 徳川頼貞は東京府第 4 位の多額納税者。ちなみに父頼倫も多額納税者でありつづけた。織田正誠編『貴族院多額納税者名鑑』(太洋堂出版部 , 1926), p. 23.
(6) 国立文化財機構東京文化財研究所が所蔵する売立目録のデータベースには 2,524 件が収録、公開されている。
(7) 徳川侯爵家（尾張徳川家、1921 年、東京美術倶楽部）、前田侯爵家（1924 年、前田侯爵邸）の売り立てがその代表例。
(8)『南葵音樂事業部摘要』第 1 (南葵音楽図書館 , 1929).

欧米の公共図書館の音楽部門、音楽教育機関等における音楽図書館の現状をリサーチし、みずから見聞を広める必要を感じる。南葵音楽事業部の、音楽図書館以外の活動の充実のためにも、それは必要とされた。1929年5月からの長期にわたる旅行の目的のひとつは、南葵音楽事業部の一層の発展のためであり、音楽機関や図書館の見学も欠かしていない(9)。

しかし、1931年3月に帰国した頼貞が見た日本は、半年後の満州事変に始まる15年戦争へと向かう国になっていた。

徳川家財務の一層の逼迫と相俟って、音楽資料のさらなる充実と維持は困難な状況であった。帰国して間もないうちに、契約していた欧米の音楽研究専門誌、定期刊行物の購読を中止し、所蔵資料の寄託先を探すという急務に見舞われている。

南葵音楽事業部の成果や蓄積を維持保全するための諸課題や責務は、前述の第2の課題と同時並行で頼貞にふりかかった。家督を継いでから麻布に残っていた南葵文庫の土地分譲および清和園売り立てにいたるおよそ8年間は、南葵音楽図書館開設から閉館ならびに所蔵資料の慶應義塾図書館寄託、同図書館における公開開始までと重なっている。

2. 文化を通じた国際交流と頼貞の立場

1933年3月、日本は国際連盟を脱退した。それが要因のひとつになって、翌年には、国際連盟の事務局にいたスタッフを事務の中心に据え、国際文化振興会が設立された。役員には海外事情に通じた華族や学者が迎えられ、官民が資金を出捐して設立された財団法人である。主務官庁は外務省と文部省であり、どちらかと言えば前者が主管していた。高松宮宣仁親王を総裁に迎え、会長には近衛文麿が就任した。総裁、会長は名誉職であり、実際の活動は副会長以下が分掌し、主事が事務を管掌していた。

徳川頼貞はその副会長のひとりに迎えられた。文化を通じての国際交流を促進する目的の法人にとって、3回の海外滞在を通じて主にヨーロッパに、音楽家ばかりでなく多くの要人を知り合いにもつ徳川頼貞は欠かせない存在であったろう。

もうひとりの副会長は郷誠之助で、王子製紙等の重役

(9) 頼貞は自著のなかで、米国議会図書館、スウェーデン王立音楽院の図書館訪問を記している。また 1921 年 10 月 21 日づけ喜多村進宛絵はがきでは、カナダの図書館事情に言及している。竹中康彦「喜多村進宛絵葉書　徳川頼貞筆」『和歌山県立博物館研究紀要』27 号 (2021), p. 56.

国際文化振興会設立時の記念写真
最前列中央に高松宮、その右に副会長の徳川頼貞
『KBS 三〇年のあゆみ』(国際文化振興会、1964) より

をつとめ、日本商工会議所会頭、東京証券取引所理事長を務めた財界人であった。また初代の理事長に就任した樺山愛輔は、保険会社等の重役を経て国際会議の随員をつとめ、20年におよぶ在米からルーズベルトらとも親しかった(10)。

同振興会の「寄附行為」によれば、その事業内容は以下の11項に及ぶ。

一、 著述、編纂翻訳及出版
二、 講座ノ設置並ニ講師ノ派遣及交換
三、 講演会、展覧会及演奏会ノ開催
四、 文化資料ノ寄贈及交換
五、 知名外国人ノ招請
六、 外国人ノ東方文化研究ニ対スル便宜供与
七、 学生ノ派遣及交換
八、 関係諸団体又ハ個人トノ連絡
九、 映画ノ作成及其ノ指導援助
十、 会館、図書室又ハ研究室等ノ設置経営
十一、其ノ他理事会ニ於テ適当ト認ムル事業

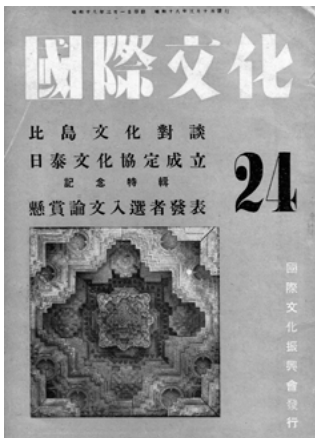
これらの事業の大半は、徳川頼倫、頼貞父子が、南葵文庫、南葵楽堂、南葵音楽図書館を通じて実践してきた事業と重なる(11)。

(10) 芝崎厚士『近代日本と国際文化交流――国際文化振興会の創設と展開』(有信堂 , 1999), p. 79-81. 樺山愛輔は、戦後公職追放になったか、解除された後は国際文化会館の設立に中心的役割を果たした。白洲正子の父。
(11) 芝崎厚士によれば、国際文化振興会の事業内容は柳澤健の構想に酷似しているという。徳川頼貞がこの事業内容策定に関与したかは詳らかではない。芝崎 , 前掲書 , p. 82.

賴貞にとっては、白金三光町ついで森ヶ崎（目黒駅近く）のヴィラ・エリザと名付けた自宅を、民間による国際文化交流に供していた延長上にあり、引き受けに支障はなかったであろう。彼の文化貢献に沿った事業内容だが、実際に個別の事業を主管して活動するよりも、各種の催事における挨拶や、振興会の機関誌『國際文化』に対談が掲載されるといった役割にとどまり、出向してきた役人が主導する事業のすすめかたへの批判も洩らしていた(12)。

国際文化振興会は、1941年夏頃に活動方針が大きく変わり、一部の役員が辞任した(13)。賴貞はその後も副会長にとどまっているものの、積極的に活動の先頭に立つことはなかった。フィリピン滞在後に機関誌『國際文化』24号に黒田清との「比島文化対談」が掲載されたのが目立つ程度であった(14)。

同時期に、貴族院議員としての活動のほか日本赤十字社常議員をはじめ医療福祉関係、国際親善目的の多数の団体に請われ、役職を引き受けてもいる。



『國際文化』第 24 号
国際文化振興会　1933　本号には徳川賴貞と黒田清によるフィリピン文化についての対談が掲載されている。

家督と爵位をついでから戦中まで、33歳から53歳の賴貞の文化貢献活動を、音楽に限らず概観してみた。戦後、参議院議員になってからの、たとえば国立国会図書館設立に向けての関係議員としての尽力については、自身では何も書き残していない。今日彼の発言は、議事、速記が公開されているので、跡づけることは可能である。ユネスコ加盟のための活動については、4回目の渡欧に割いた章の一部として『賴貞隨想』に書きとめられている(15)。

他方、家督を継ぐ前に関しては、『薔庭樂話』に記された音楽関連事項にほぼ限られると思われる。

徳川賴貞による文化貢献の特性を考察するにあたり、彼の意思が発揮された、反映されたであろう20年間について多少煩瑣になることを恐れず概観したのは、この視点から記述した文献が乏しいためである。その20年は、紀州徳川家をはじめとする華族の多くが、財務的には非常に困難な状況に追い込まれてゆく時期にあたり、ついで15年戦争のさなかにあたっていた。欧米文化に

(12) 竹中康彦「喜多村進宛徳川賴貞書簡」『南葵音楽文庫紀要』4 号 (2021), p. 57 に掲載（1935 年 7 月 5 日付）
(13) 酒井健太郎「国際文化振興会の対外文化事業――芸能音楽を用いた事業に注目して」戸ノ下達也他編『総力戦と音楽文化――音と声の戦争』(青弓社 , 2008) に収載）によれば、大東亜共栄圏の振興に貢献する文化事業が、文化宣伝工作が求められるようになった。振興会の活動対象が欧米からアジアに変化した。同書 p. 133.
(14)『國際文化』24 号 (1943), p . 42-54.
(15) 徳川賴貞『賴貞隨想』, p. 210-214

対する見方が強制的な変更を余儀なくされ、1943年1月の「敵性音楽」の指定に至る時代に、その20年は重なってもいた。ちなみに市販版『薈庭樂話』が削除や変更を加えたうえで出版されたのは、この指定の2ヶ月後であった。指定の前に出版許可がおりていたため、かろうじて発行できたとも思われる。

困難な時局にあって、戦乱期を避けつつ東南アジアへ、ヨーロッパから南北アメリカへと旅する頼貞には、世界音楽を自ら確かめ、日本に紹介すべき音楽を、招来すべき音楽家を確認し、主に音楽図書館を通じてこの国に貢献する途を究めようとする含意があったであろう。

この点を検証するためには、音楽に限らずに徳川頼貞の文化貢献の特性、クライテリアを析出する必要がある。

3. 徳川頼貞における「公共」意識

頼貞が残した文章に公共と言う言葉はほとんど出現しない。ところが彼と関係する人々は、頼倫、頼貞の事業について、しばしばその事業に公共を冠して語る。喜多村進は、『徳川頼貞侯の横顔』第4章を「公共事業への第一歩」と名づけ、次のように始める。

> 我紀州徳川侯爵家が、直接関係する公共事業の中、最も世間的に知られ、また最も公衆の裨益を成したるものは、言うまでもなく南葵文庫であった。すなわち民衆はこの公共事業を通して徳川家に感謝し、一面徳川家を公共的に支持していたとも言い得るのである。実に南葵文庫の事業は公衆の中にあって、生命づけられていたのである(16)。

この章は、若い頼貞が主導する南葵楽堂建設を紹介する。だがそれは父頼倫の、民衆、公衆のための公共事業の延長にあると見ている。事業主は、冒頭にあるように紀州徳川家、すなわち侯爵家とはいえ民間人である。

昨今、公共あるいは公共財、公共性、さらには公共空間という概念の再整理が盛んにおこなわれた。一般的に公共性という言葉を使うとき、そこには3つの意味合いがあり、ときにはそれが重なって使われている。第一は、国家や自治体に関係する公的な（official）ものの意で、公共事業とか公教育と同じ意味合いである。第二は、特定の誰かではなく、すべての人々に関係する共通のもの（common）という意味合いで、公共の福祉、公益などが該当する。私権、私利、私心とは逆に、特定の利

(16) 喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』林淑姫校註 (中央公論新社 , 2021), p. 41.

害に偏していないという面をもつ。第三は、誰に対しても開かれている（open）という意味合いであり、公園、情報公開などもそこにつながる[17]。

単に公共というと、公共性とはことなり、一般的には国家や自治体など官をさし、民と対比的に使われる。南葵文庫の事業は、喜多村進の記述を待つまでもなく、common であり、open であるが、主体は民間。だが徳川頼倫には、紀州徳川家という official に準じた名前のもとにおこなわれているとの了解があった。

それでは南葵文庫の誕生を最も間近で見てきた頼貞が、このような公共を、何時から明確に意識したのであろうか。英国留学からの帰途、ニューヨークでオペラを鑑賞した頼貞は、「米国にある多くの美術館、図書館、或は歌劇場、音楽堂など、いろいろな学問芸術上の施設が、総てこれらの資産家の寄附で成立っている事を思って私は大変よい示唆を受けた」と記している[18]。

この感想と、本稿の最初に引用した長谷川路可が頼貞に言った「貴君は生まれながらの芸術家だ」とは、一本の糸で結ばれている。その糸はどのような糸であったのかを、さきに略紹介した20年間の文化貢献をより詳細に検討して、明らかにしたい。　（次号以降に続く）

(17) 齋藤純一『公共性』(岩波書店 , 2000) を参考に要約した。美山 , 前掲論文 , p. 13-14 も参照

(18) 徳川頼貞『薈庭樂話』私家版 (徳川頼貞刊 , 1941), p. 101-102; 復刻版 , 美山良夫校註 (中央公論新社 , 2021), p. 117.

南葵音楽文庫収蔵「カミングス文庫」の研究 (2)
—W. H. カミングスとJ. L. ハットンの歌曲資料をめぐって—

佐々木勉

南葵音楽文庫が収蔵するカミングス文庫において最も大きな部分を占めるのは、印刷楽譜である。その数は、183点（冊）にのぼり、資料数は、複数の作品や作品集が合本として1冊にまとめられて製本されているものが多いことから、402点を数える[1]。これらの資料には、旧蔵者のウィリアム・ヘイマン・カミングス William Hayman Cummings（1831 ～ 1915年）が、自国イギリスの音楽に強い関心をもった研究者であったことから、パーセルやヘンデルといったイギリスの音楽家による作品の楽譜や、年報の形で刊行されたイギリスの大衆的な愛唱歌集などが多数含まれている。また、カミングスは、少年期から青年期を教会で聖歌隊員やオルガン奏者として過ごしており[2]、教会音楽家としての意識が反映されたと考えられる歴史的な聖歌集（賛美歌集）の蒐集も目を引く。

こうした収蔵資料と並んで、カミングス文庫には、もう一つ、特徴的な蒐集がある。それは、歌曲の楽譜資料である。なかでも6巻からなるジョン・リプトロット・ハットン John Liptrot Hatton（1809 ～ 86年）[3]の歌曲資料は注目に値する。これらの歌曲集には、ハットンによるピアノ伴奏付き独唱歌曲187曲をはじめ、重唱曲や無伴奏合唱曲26曲、さらにピアノ曲6曲が含まれ、その曲数は、カミングス文庫に含まれる一人の作曲家による作品の中で最も多い[4]。

本稿では、これらのハットンの歌曲資料について紹介するとともに、それがカミングスの所蔵となった経緯について考えたい。

W. H. カミングスの肖像写真とサイン
出 典 : "Mr. William H. Cummings", *The Musical Times*, vol. 39, no. 660 (Feb, 1898), p. 81-85.

ジョン・リプトロット・ハットン
John Liptrot Hatton（1809-86）
©National Portrait Gallery, London

(1)*Catalogue of the W. H. Cummings' Collection in the Nanki Music Library* (Tokyo: Nanki Music Library, 1925) では、南葵音楽文庫に収蔵された印刷楽譜の数は、238 sets、241 vols と記載されている。しかし、失われた資料もあり、また、複数巻からなる資料や、合本中の資料の数え方により、総数は変わってくる。ここで示した総資料数（402 点）では、基本的に複数巻からなる作品集は 1 点として、また合本中の単独の作品は 1 曲で 1 点、作品集は収録された作品の数に関わらず資料 1 点として数えている。

(2) 佐々木勉「カミングス文庫と W. H. カミングスをめぐって——W. H. カミングスとその生涯」『南葵音楽文庫紀要』2 号 (2019), p. 35-42.

(3)"Hatton, John Liptrot" *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 8 (London: Macmillan, 1980) およびその日本語版『ニューグローヴ世界音楽大事典』(講談社 , 1995) では、ハットンの生年は、1808 年と記述されているが、*The New Grove Dictionary of Music and Musicians* のオンライン版 (2013) では 1809 年とされており、ここではそれに従った。

(4) これらのハットンによる歌曲集には、後述するように、ハットンの歌曲以外に彼のピアノ曲や器楽曲（劇付随音楽）をはじめ、ヨハン・ファン・トリッパー Johann van Tripper によるピアノのためのワルツ集なども、数は少ないが含まれている。

カミングス文庫収蔵のハットンの歌曲資料について

カミングス文庫に収蔵されたハットンの歌曲資料は、下記のN-4/25とN-4/26の2巻からなる歌曲集と、N-7/24、N-7/25、N-7/26、N-7/27の4巻からなる歌曲集、そして単独の作品の自筆楽譜と印刷楽譜のセットN-7/23(1)及び同(2)の3点である（これらの歌曲集に収録された歌曲については、本稿の最後に付した一覧を参照。なお、特に断りのない場合、作品はピアノによる伴奏を伴う）。

N-4/25 **Classical songs. Voice and piano. Hatton, Czapek**, London: R. Addison & Hodson. 35.5×25.5cm, 227p.

表紙裏側（効き紙）にカミングスの蔵書票、見返し（遊び紙）に "W. H. Cummings 1851" というカミングスの自署と年代、"Index to the contents of this volume" と題された収録歌曲の一覧を伴う。独唱歌曲7曲、それぞれ6曲からなる4つの独唱歌曲集を収録(5)。

N-4/26 [**Classical songs. Voice and piano. Hatton**], London: Addison & Hollier, Cramer, Beale etc. 35.5×25.5cm, 333p.

表紙裏側（効き紙）にカミングスの蔵書票、見返し（遊び紙）に自署と "Index" を伴う。独唱歌曲31曲、19曲からなる1つの独唱歌曲集、2重唱曲1曲、合唱を伴う独唱歌曲1曲を収録。

N-7/23(1) **Aminta and Amarillis, Pastral**. 36.4×26.5cm, 32p.
N-7/23(2) **Aminta and Amarillis, Pastral, A Pastral, John L.Hatton**. London: Hutchings & Co., [1888]. 26.8×17.8cm, 26p.

ハットンの自筆楽譜N-7/23(1)(6)とカミングスが校訂を行った印刷楽譜N-7/23(2)のセット。N-7/23(1)

(5)N-4/25 に収録された 4 つの曲集のうち、3 つの曲集（N-4/25([8]、[9]、[10]）の作曲者として記載されている "Czapek" は、ハットン "Hatton" のペンネームである。"Czapek" はハンガリー語で「帽子をかぶった」の意味で、"Hatton" を "hat on" と解し、もじっている。また 1 つの曲集（N-4/25 [11]）は「By native Composer イギリス人作曲家による」歌曲集とされ、個々の作品に作曲者の名は明記されていない。しかし 6 曲中 4 曲（no. 1、2、4、6）には、ハットンの作とする鉛筆による書き込みがある。1 曲（no.5）には "Charles Lucas"（チャールズ・ルーカス、1808 ～ 69 年）を作曲者とする、おそらくハットンによる書き込みがある。

(6)N-7/23（1）は、1917 年 5 月に行われたカミングスの旧蔵書の競売に、ロット番号 845 として出品されている。*Catalogue of the Famous Musical Library of Manuscripts, Autograph Letters and Printed Books, The Property of the Late W. H. Cummings, Mus. Doc. of Sydcote, Dulwich, S.E.* (London: Sotheby, Wilkinson & Hodge, 1917), p. 81.

の表紙裏側にカミングスの蔵書票、見返しに “Hatton's Autograph, not pub[lish]. my copyright William H. Cummings”（「ハットン自筆、出版禁止、ウィリアム・H.カミングスが著作権［所有］」）の書き込み、楽譜冒頭にカミングスの自署（青鉛筆）。N-7/23(2)の表紙に赤鉛筆で “W. H. C. Proof”（「W.H.カミングス、校正刷り」）の書き込み。

N-7/24 **Vocal music, A to H, Hatton**. London: Addison & Hodson, etc. 37.0×28.0cm, 285p.
　表紙裏側にカミングスの蔵書票。独唱歌曲31曲、2重唱曲2曲、3重唱曲2曲、合唱を伴う独唱歌曲2曲を収録。

N-7/25 **Vocal music, H to P. Hatton**. London: Addison & Hodson, etc. 37.0×28.0cm, 305p.
　表紙裏側にカミングスの蔵書票。独唱歌曲32曲、4重唱曲2曲、合唱を伴う独唱歌曲2曲を収録。

N-7/26 **Vocal music, P to Z, Hatton**. London: Addison & Hodson, etc. 37.0×28.0cm, 444p.
　表紙裏側にカミングスの蔵書票。独唱歌曲42曲、2重唱曲2曲、3重唱曲4曲、合唱を伴う独唱歌曲1曲、トランペットのオブリガート付き独唱歌曲1曲を収録。

N-7/27 **Sacred vocal. H. 8th P[iano].F[orte]. Hatton**. London: Addison & Hodson, etc. 37.0×28.0cm, 248p.
　表紙裏側にカミングスの蔵書票。　宗教的重唱曲1曲、チャールズ・ホール Charles Hall の《十戒》による聖詩集（独唱歌曲10曲セット）、グラドゥアーレ（無伴奏4声合唱曲）1曲、オッフェルトリム（オルガン伴奏付き4声合唱曲）1曲、ミサ曲（オルガン伴奏付き4声合唱曲）、シャイクスピアノの劇《ヘンリー 8世》への付随音楽集（ピアノ曲6曲、ピアノ伴奏付き2重唱1曲）、ピアノ曲4曲、ヨハン・ファン・トリッパー Johann van Tripper によるピアノのためのワルツ集(7)を収録。

　これらのハットンの歌曲資料は、カミングスがばらばらの状態で所蔵していた、それぞれ6ページから8ページ程度の歌曲のピース楽譜や、それらが6曲まとめられた歌曲集（ピース楽譜集）を30点から40点ずつまとめ

(7)N-7/27 の最後に綴じられた Johann van Tripper ヨハン・ファン・トリッパーによるピアノのためのワルツ集には、書き込みを行った人物や意図は不明であるが、括弧に入れて鉛筆書きでハットンの名が記されている。

て現在の形に製本したものと考えられる。それは、製本時に付けられた表紙の裏側（効き紙）以外にも、綴じられたピース楽譜の表紙にカミングスの自署が入った楽譜を確認することができるからである(8)。カミングスは、他の収蔵資料から明らかなことであるが、資料を入手すると表紙の裏側に蔵書票を貼り、多くの場合に行ったように自署することを習慣としており、入手した資料が複数の資料をひとまとめに製本した合本であった場合にも、製本時に付された表紙の裏側だけに蔵書票を貼り、自署しているからである。なお、ハットンの歌曲のピース楽譜では、しばしば表紙の裏側から楽譜が印刷されており、カミングスは表紙の表側に自署するだけで、表紙裏が空白の場合にも蔵書票を貼ることはなかった。

製本の時期については、N-4/25の1巻を除いて不明である。その見返しには、カミングス自身が、自署とともに“1851”と書いていることから、この巻が製本されたのは1851年であろう。綴じられたピース楽譜の刊行年は、1840年代の終りから50年代の初めであり、この製本の時期と矛盾しない。そして他の巻に綴じられたピース楽譜の刊行年から、これが最初に製本された巻と推察される。続いて製本されたのは、1850年代に刊行されたピース楽譜が収録されたN-4/26で、1850年代中頃以降に製本されたと考えられる。これら2巻の歌曲集は、同じサイズに製本され、装幀のデザインや表紙の見返しに使用されたマーブルペーパーが共通する。

一方、N-7/24、N-7/25、N-7/26、N-7/27の4巻からなる歌曲集では、宗教的合唱曲とピアノ曲を主に集めたN-7/27を除いて、綴じられたピース楽譜は、ほぼ表題のアルファベット順に並べられており、したがって巻ごとに刊行年に統一性はなく、1870年代に刊行された楽譜も含まれていることから、それ以降の年代にまとめられ、製本されたと推察される。これら4巻の歌曲集もまた同じサイズに製本され、装幀のデザインや表紙の見返しに使用されたマーブルペーパーも共通する。

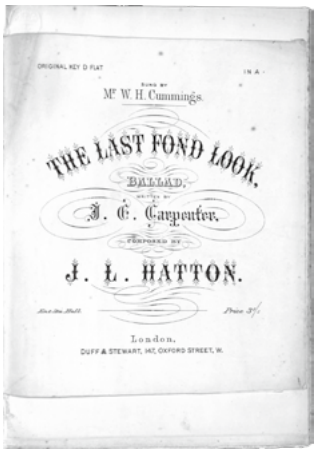
W. H. カミングスとJ. L. ハットンの歌曲資料

なぜ、カミングス文庫、すなわちカミングスの旧蔵書には、これほど多くのハットンの歌曲の楽譜が含まれているのであろうか。ハットン自身からカミングスに贈られた楽譜をはじめ、カミングス文庫のハットンの歌曲資料は、カミングスとハットンに接点があったことを示している。

(8) ピース楽譜ごとのカミングスの自署の有無や書き込みについては、本稿の最後に付したカミングス文庫所蔵のハットンの歌曲資料一覧に記載。

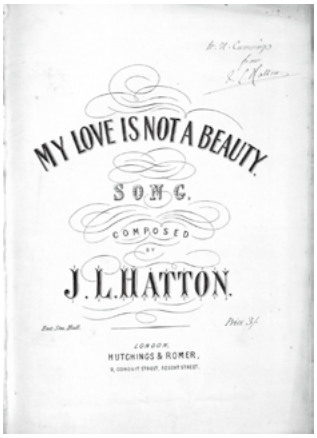
ハットンは、19世紀中頃にロンドンを中心に、アメリカやドイツでも活躍した音楽家であった(9)。ピアノ奏者、歌手、作曲家として多彩な才能を発揮し、「生涯を通じてピアニストとして、またコミック歌手として常に演奏活動を行い、語り、ピアノを演奏し、歌うという大衆的なワンマン・ショーの創始者であるか、少なくとも初期の代表者の一人であった」とされる(10)。歌曲は、通俗的であるということを理由にあまり評価されない傾向にあるが、人気を得た作品もあり、早くも1840年代から出版され、晩年までにその数は300曲を超えたとされる(11)。

カミングスは、1855年頃ウォルサム・アビイの教会音楽家としての職を辞し、テナー歌手として活躍を始める(12)。当初は、テンプル教会やウェストミンスター・アビイなどの聖歌隊で「代理歌手」として歌い、やがて王室礼拝堂のジェントルマン（聖歌隊員）に指名され、さらに1860年代にはオラトリオやオペラの歌手として活動の場を広げていった。この頃、経緯は不明であるが、カミングスは、ハットンが作曲したバラッド《*The Last Fond Look*》（1868年刊行、N-7/25[21]）を歌ったことがあった。そのタイトルページには、「W. H. カミングス氏によって歌われた Sung by Mr. W. H. Cummings」という断り書きが印刷されている。また、刊行年は明らかではないが、同様にハットンの歌曲《Ella》（N-7/24[30]）のタイトルページでも、同歌曲を歌った歌手の一人としてカミングスの名が記載されている。



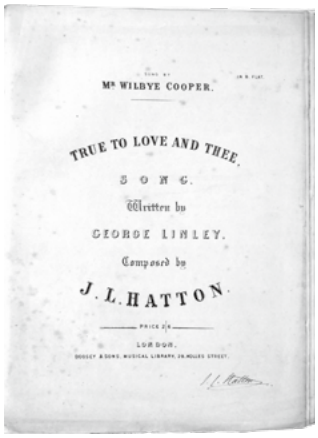
バラッド《*The Last Fond Look*》（1868年刊行、N-7/25[21]）表紙
"Sung by W. H. Cummings"（上部）と印刷されている。

二人が既知の間柄であったことを示すものとして、ハットンがカミングスに楽譜を寄贈した際の献辞がある。歌曲《*In her Garden*》（1874年刊、N-7/25[14]）、《*My Love is not a Beauty*》（1871年刊、N-7/25[27]）、《*Night and Morning*》（1859年刊、N-7/25[29]）には、それぞれ「J. L. ハットンからW. H. カミングスへ W. H. Cummings from J. L. Hatton」という献辞が、ピアノ曲の《*Prelude and Fugue*》（1859年刊、N-7/27[8]）には「W. H. カミングス、作曲者謹呈 W. H. Cummings, with the Author's Compliments」という献辞を確認できる。カミングス

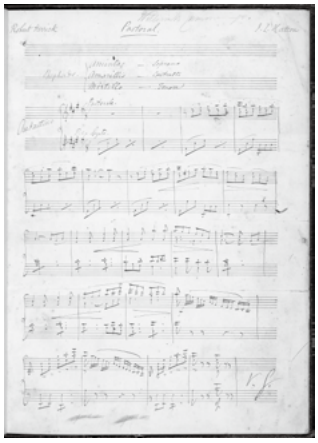


歌曲《*My Love is not a Beauty*》（1871年刊、N-7/25[27]）表紙
"W. H. Cummings from J. L. Hatton" という献辞（右上）がある。

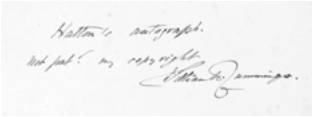
(9) ハットンの経歴については、"Hatton, John Liptrot", Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/John_Liptrot_Hatton（10, Jan. 2022 閲覧）に詳しい。
(10)"Hatton, John Liptrot," *The New Grove Dictionary of Music and Musicians* オンライン版（16, Oct. 2013 改訂、8, Oct. 2021 閲覧）
(11)"Hatton, John Liptrot", *Encyclopedia Britannica*, vol. 13 (1911) オンライン版（20, Dec. 2021 閲覧）
(12) 佐々木 , 前掲書 , p.38.



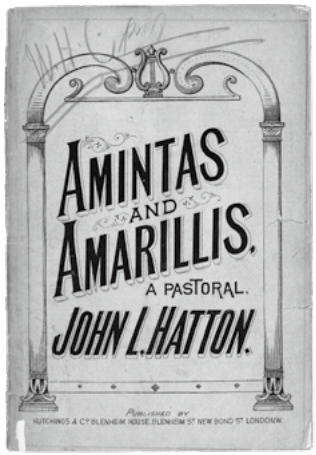
歌曲《*True to Love and Thee*》（1856年刊、N-7/26[30]）表紙
右下にハットンの自署。



パストラル《アミンタスとアマリリス *Amintas and Amarillis*》自筆楽譜（N-7/23 [1]）の冒頭
右上にハットンの自署、最上部に青鉛筆でカミングスの自署が確認できる。



同、見返しにあるカミングスの書き込み
"Hatton's Autograph. not pub[lish]. my copyright"



同、校正用楽譜（N-7/23 [2]）表紙
カミングスによる赤鉛筆 "W. H. C. proof" の書き込み。

の名に敬称が付けられていないことも注目される。

また、歌曲《*True to Love and Thee*》（1856年刊、N-7/26[30]）をはじめ、15曲の楽譜のタイトルページや楽譜の冒頭には、ハットンの自署、あるいは頭文字を見出すことができる。

ハットンのパストラル《アミンタスとアマリリス *Amintas and Amarillis*》の自筆楽譜とカミングスが校正に用いた楽譜のセット（N-7/23[1]及び[2]、楽譜の刊行は1888年）も、両者の関係を物語るものであろう。自筆楽譜には、カミングスの自署と共に著作権がハットンから譲渡されたことを示すために「ハットンの自筆楽譜。出版禁止、著作権所有 Hatton's Autograph. not pub[lish]. my copyright」と書き込まれた。一方、校正用楽譜には、カミングスが校正を担当し、使用した楽譜であることが "W. H. C. proof" と赤鉛筆で記され、数カ所にわたって印刷の間違いが訂正されている。

校正用の楽譜は、もう1点確認することができる。バラッド《*The Sailor's Child*》（N-7/26[15]）には、それを示す "Presentation Copy"（「校正用」）というスタンプが押されている。ただし、この楽譜には、実際に校正に用いられたことを示す書き込みや痕跡は見当たらない。

カミングス文庫が収蔵するハットンの歌曲資料は、これらの手がかりから、カミングスが購入した楽譜も含まれているとは思われるが、大部分がハットンから寄贈されたものであった可能性が高い。すでに述べたように、カミングスは楽譜や書籍を購入すると蔵書票を貼り付けたり、自署することを習慣にしていた。ところが、これらのハットンの歌曲資料では、カミングスの自署は、わずかに20点の楽譜にしか見出だせず、むしろそれは、ハットンの自署と献辞の回数とほぼ同数である。さらに、販売用ではない校正用の楽譜（《*The Sailor's Child*》N-7/26[15]）が含まれている点も、購入したものではないことを示唆している。

カミングス文庫収蔵ハットン歌曲資料一覧

南葵音楽文庫のカミングス文庫が収蔵するハットンの歌曲資料（一部にピアノ作品も含む）の一覧である。南葵音楽文庫における整理番号、タイトルページの記載内容、出版社、刊年、自署の有無などについての注記事項の順に記載した。

カミングス文庫収蔵『ハットン歌曲資料一覧』

	整理番号	表題	出版地：出版社／者（PN番号）	刊年	注記、編成（記載がない限り、独唱とピアノ伴奏）
1	N-4/25(1)	I then will breathe my vow. F.W.N.Bayley. J.L.Hatton. [Begins: When the morning gems are pearly]		n.d.	Sign of W.H.Cummings
2	N-4/25(2)	The linden tree, Der Lindenbaum. Song, sung by Mr.Lockey. With English and German words. The English version by Harry A.Ewer. The music composed and dedicated to Henry Hime Esqr. by John L.Hatton. [Begins: A Linden tree is standing beside this murm'ring stream]]	London: published for the proprietor by R.Addison & Hodson	[1848]	
3	N-4/25(3)	Streamlet gently flowing. Song, the poetry by Thos. Oliphant Esqr. The music by John L.Hatton. [Begins: Streamlet gently flowing o'er thy rocky bed]	London: Addison & Hodson	[1848]	
4	N-4/25(4)	Cloris, now thou'rt fled away. (Amintor's welladay.) A ditty of the 17th centry. Written by Dr. Henry Hughes, set to music by John L.Hatton. (Copyright of Thos. Oliphant, Esqr.) [Begins: Cloris, now thou'rt fled away]	London: R.Addison & Co.	[1853]	
5	N-4/25(5)	Tis midnight! on the globe dead slumber sits! (To may taper.) The poetry written by H.Kirke White and Thos. Oliphant. The music by John L.Hatton. (Copyright of Thos. Oliphant.) [Begins: 'Tis midnight on the globe dead slumber sits]	London: R.Addison & Co.	[1853]	Traces of use
6	N-4/25(6)	Letanie to the Holy Spirite, written by Robert Herrick. Set to music by John J.Hatton. (Copyright of Thos. Oliphant Esqr.) [Begins: In the hour of my distress]	London: R.Addison & Co.	[1850?]	
7	N-4/25(7)	This song is the property of Thos. Oliphant Esqr. Fair daffodils we weep to see. The words from Herrick's Hesperides, the music by John L.Hatton. [Begins: Fair Daffodils, we weep to see you haste away so soon]	London: R.Addison & Co.	[1848]	
8	N-4/25(8)	Six songs, with German and English words. The music composed by P.B.Czapek, the English version by Thos. Oliphant Esqr. No.1 The mysterious serenade (Himmels-Ständchen) [Begins: What music strange awakens me]; No.2 The chapel (Die Kapelle) [Begins: Sings a merry shepherd swain]; No.3 The window curtain (Der Vorhang) [Begins: My neigh bour's curtain o'er the way]; No.4 The mother and daugther (Mutter und Tochter) [Begins: Oh! do not weep my daughter dear]; No.5 The greenwood concert (Waldkonzert) [Begins: Fair Flora in her greenwood hall]; No.6 The dying swan (Das Schwanelied) [Begins: The King was sitting down to dine] NB. These songs were composed expressly by order of Mr. Oliphant and are his exclusive property.	London: Addison & Hodson	[1845, 1846]	Sign of W.H.Cummings Published under a pseudonym of John Liptrot Hatton "Czapek, P.B."
9	N-4/25(9)	Second series. Six songs with German and English words. The music composed by P.B.Czapek, the English version by Thos. Oliphant Esqr. No.7 The gardener's song (Lied des Gärtners) [Begins: Purple violet, yield thy blossom Crimson rose and lily fair]; No.8 The king's daugther (Das Königstöchterlein) [Begins: A shepherd kept his sheep hard by the lordly palace of the King]; No.9 Repose (Rune) [Begins: Underneath a royal Palmtree]; No.10 The violet (Das Veilchen) [Begins: There bloom'd upon the village green]; No.11 The youth by the Brook (Der Jüngling Bach) [Begins: On a bank, a youth reclining Cull'd sweet flowers]; No.12 King Sofrid (König Sifrid) [Begins: In his lofty hall, sat Sifrid the King] NB. These songs were composed expressly by order of Mr. Oliphant and are his exclusive property.	London: Addison & Hodson	[1845, 1846]	Published under a pseudonym of John Liptrot Hatton "Czapek, P.B."
10	N-4/25(10)	Third series. Six songs with German and English words. The music composed by P.B.Czapek. The English version by Thos. Oliphant Esqr. No.13 The Robber (Der Raüber) [Begins: Once upon a springtide morning step a robber from the wood]; No.14 The Roe (Das Reh) [Begins: A hunter chased the fleet roe deer]; No.15 The shepherd's winter song (Des hirten Winterlied) [Begins: O winter, dreary winter!]; No.16 The poet's grave (Des Dichters Grab) [Begins: Oh! lay me not in the dreary tomb]; No.17 The mountain sheoherd boy (Der Hirtennab vom Berge) [Begins: I am the mountain Shepherd-boy]; No.18 The night journey (Nachtreise) [Begins: Alone thro' midnight gloom I stray] NB. These songs were composed expressly by order of Mr. Oliphant and are his exclusive property.	London: Addison & Hodson	[1845, 1846]	Published under a pseudonym of John Liptrot Hatton "Czapek, P.B."
11	N-4/25(11)	Six English songs. By native composers. The poetry written and the whole edited by Thos. Oliphant Esqr. No.1 Twilight [Begins: 'Tis sweet at eventide to view the dimly fading light]; No.2 Hope [Begins: We dream and we talk, and we talk and we dream]; No.3 The nun & the rose [Begins: And angry guests foretold the tempest]; No.4 Autumn reflections [Begins: All is still o'er valley and hill]; No.5 The poet's consolation [Begins: Tho' no maiden's tears are falling o'er my clay cold bed]; No.6 Meeting & parting [Begins: Whene'ef she came, her sunny smile was like the dawn of day] It being too often the case that the name of a living English composer on the title page of a song, is injurious to its success. The editor has published the above anonymously, preferring that they should stand of fall by their own merits.	London: Addison & Hodson	[1847]	No.1, writing of "J.L.Hatton" by unknown hand; No.2&4, writing of "Music by J.L.Hatton" by unknown hand; No.5, pencil writing of "This song was composed by Charles Lucas" by J.L.Hatton; No.6, sign of W.H.Cummings and J.L.Hatton, pencil writing of "This song was composed by John L.Hatton" by the composer himself. Sign of J.L.Hatton
12	N-4/26(1)	The Garland. Translated from the Latin of Hier. Angerianus by Thos. Oliphant Esqr. The musica composed and dedicated to Charles Lockey Esqr. by John L.Hatton. [Begins: Fair Garland wet morning dew]	London: Addison & Hollier	[1852]	

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
13	N-4/26(2)	Weep no more thou sorry boy. Song. The words taken from an old part song book. A.D.1622. The music composed by John L.Hatton. (Property of Thos. Oliphant Esqr.) [Begins: Weep no more, thou sorry]	London: Addison & Hollier	[1852]	
14	N-4/26(3)	The song of the bell, written by H.W.Longfellow. The music by John L.Hatton. [Begins: Bell! thou soundest merrily]	London: Addison & Hollier (PN 1632)	[c1855]	
15	N-4/26(4)	Revenge. Song. Sung by Herr Staudicl, in the opera Pascal Bruno, as performed at the Imperial Grand Theatre Vienna. Written by W.Fitzball Esqr. Composed by J.L.Hatton. [Begins: The frozen serpent in my breast]	London: published by Cramer, Beale & Co. (PN 3426)	[1844]	
16	N-4/26(5)	The messenger. (Der Eilbote.) The German words by Heinrich Fick, Ph.Dr. The English words by W.H.Bellamy Esqr. Sung by Herr Pischek. The music composed by J.L.Hatton. Composer of Pascal Brune, a garnd opera performed at the Imperial Grand Theatre at Vienna. Queen of the Thames, Revenge &c. [begins: Away! away! o'er wild and waste]	London: published by Cramer, Beale & Co. (PN 3815)	[1845]	
17	N-4/26(6)	Ocean. A descriptive scena, for a bass voice, dedicated to Joseph Staudigt, by J.L.Hatton. [Begins: The bight is dark the thunder crashes]	London: J. Alfred Novello (PN 2151)	[1847]	
18	N-4/26(7)	The sailor's rest, written by John Cross Buchanan, composed by John L. Hatton. [Begins: Why search the deeps for him who sleeps beneath the heaving billow?]	London: Addison & Hollier	[1856]	
19	N-4/26(8)	Oh give me back those joyous hours. (Absence.) Written by Houghton Perkins Esqr. F.L.S. Music composed byJ.L.Hatton. [Begins: O give me back those joyous hours]	London: Addison & Hollier (PN 1569)	[1855?]	
20	N-4/26(9)	"My days have been so wond'rous free." A ballard. The poetry by Dr. Parnell and Thos. Oliphant. Esqr. The music by John L.Hatton. (This song is the property of Mr. Oliphant) [Begins: My days have been so wond'rous free]	London: Addison & Hollier	[1853]	
21	N-4/26(10)	Twilight by the sea, written by H.W.Longfellow. The music composed by J.L.Hatton. Inscribed to W.T.Wrichton, Esqr. [Begins: The twilight is sad and cloudy]	London: Addison & Hollier (PN 1746)	[1852]	
22	N-4/26(11)	Day and night ! Day and night !, A reverie, the poetry by J.W.Roe, Esqr. The music composed and dedicated to Miss Dolby by John L.Hatton. This song is the property of Thos. Oliphant, Esqr. [Begins: Day and night, day and night, dawn and darkness]	London: Addison & Hodson	[1847]	
23	N-4/26(12)	Curfew. Poetry by H.W.Longfellow. Music by J.L.Hatton. [Begins: Solemnly, mournfully, dealing its dole]	London: Addison & Hodson (PN 1807)	[1852]	
24	N-4/26(13)	Dedicated (by permission) to Miss Isabella Browne, of Elm Villa, Hampton, near Bath. And do I meet thee once again. (Song of friendship.) Written by L.M. Thornton, Esqr. Music by J.L.Hatton. [Begins: And do I meetthee once again]	London: Addison & Hollier (PN 3096)	[1854]	
25	N-4/26(14)	The student's serenade. Poetry by H.W.Longfellow. Music by J.L.Hatton. [Begins: Stars of the summer night!]	London: Addison & Hollier (PN 1810)	[1852]	Sign of W.H.Cummings
26	N-4/26(15)	The clown's song. The words by Shakespeare. The music by J.L.Hatton. This song gained the prize given by HRH the Duke of Cambridge, at the Melodists Club, May. 30th 1848. [Begins: When that I was a tiny boy]	London: R.Addison & Co. (PN. 1447)	[1852]	Solo voice, chorus & pf.
27	N-4/26(16)	The wreck of the Hesperus, a descriptive ballad, written by H.W.Longfellow. Set to music by John L.Hatton. The property of Thos. Oliphant, Esqr. [Begins: It was the schooner Hesperus]	London: Addison & Hollir	[1853]	
28	N-4/26(17)	Homeward bound, from Jullien's Album for 1849, written by Mrs. Crawford, composed by I.L.Hatton. [Begins: Our gallant ship was homeward bound for England's happy shore]	London: Jullien & Co. (PN 1014)	[c1855]	
29	N-4/26(18)	Songs by Barry Cornwall, no.1, Song should breathe of scents and flowers, composed for and sung by Mr. Benson and sung by Mr. Lockey and by him respectfully dedicated to Mrs. Proctor. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: Song should breathe of scents and flowers]	London: Addison & Hollir	[1856?]	Sign of J.L.Hatton
30	N-4/26(19)	I will sing no more of sorrow. The words by Mark Lemon. The music composed expressly for this publication by I.L.Hatton. [Begins: I will sing no more of sorrow]	London: published at the Office of The Music Book	[1847]	Sign of W.H.Cummings
31	N-4/26(20)	To Waler Stewart Broadwood, Esqr. I love all things the seasons bring. Sung by Mr. Benson, composed by J.L.Hatton. [Begins: I love all things the seasons bring]	London: Leader & Cock (PN L&C.1962)	[1856?]	Sign of J.L.Hatton
32	N-4/26(21)	Songs &c. from the White Slave. No.1 The salve girl's vow, words by J.E.Carpenter, music by J.L.Hatton. [Begins: By yhose broad and mighty rivers]	London: Addison & Hollier (PN 2456)	[1853]	Sign of W.H.Cummings
33	N-4/26(22)	Songs &c. from the White Slave. No.5 The separation. Duet, words by J.E.Carpenter, music by J.L.Hatton. [Begins: Sit closer by my side]	London: Addison & Hollier (PN 2462)	[1853]	2 voices & pf.
34	N-4/26(23)	Songs &c. from the White Slave. No.6 Farewell my country, words by J.E.Carpenter, music by J.L.Hatton. (Begins: Farewell my country! little thanks I owe thee)	London: Addison & Hollier	[1853]	
35	N-4/26(24)	"The rainy day." Song written by H.W.Longfellow. The music composed and dedicated to Thomas Oliphant Esqr. by John L.Hatton. [Begins: The day is cold and dark, and dreary]	London: Addison & Hollier (PN 1552)	[1853?]	Sign of W.H.Cummings
36	N-4/26(25)	(This song is the property of Thos. Oliphant.) The goldsmith's daughter. A song. The poetry translated from the German, by Thos. Oliphant Esqr. The music by John L.Hatton. [Begins: Within her father's workshop stood]	London: Addison & Hollier	[1852]	

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
37	N-4/26(26)	Copyright of Thos. Oliphant, Esqr. Dream, baby, dream. Cradle song. The poetry by Barry Cornwall, composed and dedicated to Mr. James Oliphant by John L.Hatton. [Begins: Dream, baby, dream! The stars are glowing]	London: Addison & Hollier	[1856]	
38	N-4/26(27)	To W.B. Parkes.M.D.F.R.G.S. "The Witnesses." No.2 of Two songs, written by H.W.Longfellow. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: In ocean's wide domains]	London: Addison & Hollier	[1853?]	
39	N-4/26(28)	Bird of the wilderness. Words by The Ettrick Shepherd. The music composed for & sung by Mr. Lockey, by J.L.Hatton. [Begins: Bird of the wilderness]	London: R.Addison (PN 1467)	[1850]	
40	N-4/26(29)	The reaper and the flowers. Written by H.W.Longfellow, composed & dedicated to Mrs. Francis J.Scott, by John L.Hatton. (Property of Thos. Oliphant, Esqr.) [Begins: There is a reaper whose name is Death]	London: Addison & Hollier	[1856]	
41	N-4/26(30)	The old clock on the stairs. The poetry by H.W.Longfellow. The music composed and dedicated to Mrs. Oliphant, (of condie) by John L.Hatton. (The song is the property of T.Oliphant. Esqrs.) [Begins: Somewhat back from the village street]	London: Addison, Hollier & Lucas	[1856]	
42	N-4/26(31)	Whither? Song. Translated from the German of Miller by H. W. Longfellow. Music by J.L.Hatton. [Begins: I heard a brooklet gushing]	London: Addison & Hollier (PN 1809)	[1852]	
43	N-4/26(32)	The slave's dream. No.1 of Two songs, written by Henry Wadsworth Longfellow. The music by J.L.Hatton. To Robert Addison, Junr. Esqr. [Begins: Beside th'ungather'd rice he lay]	London: Addison & Hollier (PN 2638)	[1853]	Sign of W.H.Cummings Traces of use
44	N-4/26(33)	Vogelweid the minnesinger. Ballad. Founded on the legend of Walter von der Vogelweid. Written by H.W. Longfellow, set to music by John L.Hatton. [Begins: Vogelweid' the Minnesinger]	London: Addison & Hollier	[1853]	
45	N-4/26(34)	Songs, and other poems by Herrick, Ben Johnson, and Sedley. Set to music by J.L.Hatton. To musique, to becalme his fever. Herrick. [Begins: Charm me asleep]; The Hag. Herrick. [Begins: The Hag is a stride]; The deluge. Herrick. [Begins: Drowning, drowning, I espie]; To Anthea, who may command him anything. Herrick. [Begins: Bid me to live, and I will live]; Ceremonies for candlemasse day. Herrick. [Begins: Kindle the Christmas Brand and then till Sunneset]; Song. Herrick. [Begins: Gather ye Rosehuds while ye may]; Song. From "The Foxe" Ben Johnson. [Begins: Come, my Celia, let us prove]; To a bed of tulips. Herrick. [Begins: Bright tulips, we do know]; To Julia. Herrick. [Begins: Her eyes the glow worme lend thee]; To meddowes. Herrick. [Begins: Ye have been fresh and green]; To the rose. Herrick. [Begins: Goe happy Rose]; To daisies. Herrick. [Begins: Shut not so soon]; Song. Sedley. [Begins: Phillis, men say that all my vows]; To the willow tree. Herrick. [Begins: Thou art to all lost love the best]; To blossoms. Herrick. [Begins: Faire pledges of a fruitfull tree]; The rock of rubies. Herrick. [Begins: Some ask'd me where the rubies grew]; To oenone. Herrick. [Begins: What conscience, say, is it in thee]; The teare. Herrick. [Begins: Glide, gentle the streams, and beare]; Grace for a child. Herrick. [Begins: Here a little child I stand]	London: D'Almaine & Co. (PN 12687)	1850	Sign of W.H.Cummings Sign of J.L.Hatton Traces of use on the song "Grace for a child"
46	N-7/23(1)	Pastral. [composed by] J.L.Hatton		n.d.	Exlibris of W.H.Cummings "Hatton Autograph. not pub [-lish] ! my copy right" written by W.H.Cummings Sign of W.H.Cummings with blue pencil on the first page
47	N-7/23(2)	Amintas and Amarillis, a pastral, by Robert Herrick, the music composed for soprano, contralto and tenor soli, with S.A.T.B, chorus and pianoforte accompaniment by John L.Hatton.	London: published by Hutchings & Co. (PN H.681)	[1888]	Set with N-7/23(1), autograph manuscript of "Aminta and Amarillis." "W.H.C. proof" written in red pencil on the front cover
48	N-7/24(1)	4 Songs, no.4 Autumn, for tenor. Written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. (Begins: Here,'mid the stillness of these Autumn woods)	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5682)	[1860]	
49	N-7/24(2)	Albert !, Hail !, consort or our Queen. Trio, sung with rapturous applause at the Metropolitan festival. By Messrs. Hawkins, Hobbs & Chapman, Written by Mrs. Gent, composed by J.L.Hatton. [Beigins: Hail! Albert! Hail blending with her's to heav'n ascending]	London: published by Addison & Hodson	n.d.	Sign of "Hobbs" 3 voices & pf. Traces of use
50	N-7/24(3)	The beacon that lights me home. Ballad, written by W.S.Passmore, composed by J.L.Hatton. [Begins: A light in the window gleameth]	London: Boosey & Co.	n.d.	
51	N-7/24(4)	The blind boy. A pathetic ballad, written by Colley Cibber. The music composed by John L.Hatton. [Begins: O say what is that thing call'd light]	London: Addison & Hollier	[1853]	Sign of W.H.Cummings Traces of use
52	N-7/24(5)	A bird song in a hawthorn tree. Song, written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: A bird sang in a hawthorn tree]	London: Duff & Stewart (PN D.&S. 3675)	n.d.	
53	N-7/24(6)	Beating for thee. Song, the words by B.S.Montgomery. The music by J.L.Hatton. [Begins: Sparkling with dew Bright roses are sleeping!]	London: Lamborn Cock (PN L.C.153)	[1874]	Sign of "J.L.Hatton"

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
54	N-7/24(7)	The Bells. Of peace on earth, good-will to men. Sung by Mr. Santley. Poetry by H.W.Longfellow. Music by J.L.Hatton. [Begins: I heard the bells on Christmas day]	London: Boosey & Co.	n.d.	
55	N-7/24(8)	Blossoms. Song, written by Beatrice Abercromble, music by J.L.Hatton. [Begins: Blossoms sweet, and blossoms fair]	London: Duff & Stewart (PN D&S.3677)	[1873?]	
56	N-7/24(9)	The boy and the brook, song written by H.W.Longfellow, the music composed and inscribed to Miss Jane Young, by J.L.Hatton. [Begins: Down from you distany mountain height]	London: Ransford & Son (PN R&S.1096)	[1874]	
57	N-7/24(10)	The British tar, song by J.V.Bridgeman, the music composed expressly for Mr.Stanley, by J.L.Hatton. [Begins: Come, cheer thee, gentle maid en mine]	London: Boosey & Co.	[1873]	
58	N-7/24(11)	The blacksmith's son, song, written by Mrs.Valentine Roberts, composed by J.L.Hatton. [Begins: A stalwart lad is the balcksmith's son]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5709)	[1866]	
59	N-7/24(12)	The colleen bawn, song words by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: Among the boats on the shingle]	London: H.W.Wickins	[1880]	
60	N-7/24(13)	The change of twenty years, song sung by Mr.Winn, written by Godfrey Turner. Set to music by J.L.Hatton. [Begins: She nears the land the boat that brings]	London: Joseph Williams (PN LC.A&Co.3904)	n.d.	
61	N-7/24(14)	The Chamois hunters, duet, written by J.V.Bridgeman, the music composed expressly for Mr. Sims Reeves, & Mr. Santley, by J.L.Hatton. [Begins: No more when I the Chamois track]	London: Boosey & Co.	[1873]	Sign of J.L.Hatton 2 voices & pf.
62	N-7/24(15)	The Calm, descriptive song, the words by J.E.Carpenter. The music by J.L.Hatton. [Begins: All day all night again all day]	London: Metzler & Co.	[1862]	
63	N-7/24(16)	Come back Annie, ballad, written by John Oxenford, composed expressly for Mr. J.W.Raynor, of the Christy's Minstrels, by J.L.Hatton. [Begins: Come back, Annie come back dear]	London: Boosey & Sons	n.d.	Solo voice , chorus & pf.
64	N-7/24(17)	Chamber trio. Come, follow, follow me, composed by J.L.Hatton. [Begins: Come, follow, follow me, You fairy elves]	London: published by Leader & Cock (PN L&C2230)	[1844]	3 voices & pf.
65	N-7/24(18)	Come live with me and be my love. Sung by Signor Mario, composed by J.L.Hatton. [Begins: Come live with me and be my love]	London: Cramer, Beale & Challell (PN 6544)	n.d.	Sign of W.H.Cummings
66	N-7/24(19)	The Carpenter. The words by permission from All the Year Round. The music by J.L.Hatton. [Begins: You know our friend the Carpenter]	London: Brewer & Co.	[1861]	
67	N-7/24(20)	Dame Margery, song, written by W.H.Bellamy, Esqr. Music by J.L.Hatton. [Begins: Dame Margery once, had a cheek like the rose]	London: Addison & Hollier (PN 2768)	[1853]	
68	N-7/24(21)	Down in your dell, Ballad, sung by Mr. H.Phillips, in the operetta Queen of the Thames, or The Anglers, at the Theatre Royale Drury Lane, the poetry by Edward Fitz Ball. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: Down in yon dell, where the green willow creeps]	London: D'almaine & Co.	[1844]	
69	N-7/24(22)	Distance cannot true love sever, the words by J.E.Carpenter. The music by J.L.Hatton. [Begins: Distance cannot true love sever]	London: Brewer & Co.	[1862]	
70	N-7/24(23)	Dick Whittington, song, written and inscribed to John Wilson Esqr. and the citizens of London, by John Martin, the music by J.L.Hatton. [Begins: The great Sir Richard Whittington]	London: Addison & Hollier (PN 2021)	[1852]	
71	N-7/24(24)	A Dreamer's song, written by Barry Cornwell, Esqr. composed by J.L.Hatton. [Begins: I dream of thee at morn]	London: Leader & Cock (PN L&C.2359)	[1860]	
72	N-7/24(25)	Delhi, Recitavite and air, composed by J.L.Hatton. [Begins: Mourn we for women, mourn for children slain]	London: Duff & Hodgson (PN D&H 2074)	[1857]	
73	N-7/24(26)	Ere I was sent to sea, song written by Benjamin Banks. The music composed and dedicated to Thomas Meesen, Esqr. Captain of the Royal Thames Yacht Club, by J.L.Hatton. [Begins: Young Sue my fancy hath delighted]	London: Leader & Cock (PN L&C 294)	[1845]	Dedication signature "I.W.Hobbs Esq. from the composer"
74	N-7/24(27)	Excelsior, scena, as sung by Mr. Sims Reeves, arranged by J.L.Hatton. [Begins: The shades of night were falling fast]	London: Chappell & Co. (PN 10422)	[1859]	Sign of J.L.Hatton
75	N-7/24(28)	Excelsior, written by H.W.Longfellow, sung by Mr. Sims Reeves, also Mr. W.T.Wrichton. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: The shades of night were falling fast]	London: Addison & Hollier (PN 3100)	[1854]	
76	N-7/24(29)	Evermore, song, the poetry taken from the "Psalms of Life," by J.S.Adams. Set to music by J.I.Hatton. [Begins: I beheld a golden portal in the visions of my slumber]	London: Ransford & Son. (PN R&S.921)	[1869]	
77	N-7/24(30)	Dedicated to G.E.Merrill. Esq. sung by M.Capoul, (Royal Italian Opera), Mr. W.H.Cummings, Mr. W.Shakespeare, Mr. Stedman, Mr.Vernon Rigby, &c. &c. Ella, song written by James Couper, composed by J.L.Hatton. [Begins: A darling girl I know]	London: John King (PN J.K.30)	n.d.	
78	N-7/24(31)	The enchantress, song, written expressly for Made. Viargot Garcia. The words by H.F.Chorley, the music by J.L.Hatton. [Begins: By the lore of ages far]	Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5581)	[1859]	
79	N-7/24(32)	Fancy, song written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: Light and free as summer wind]	London: Augener & Co. (PN A&Co.3379)	n.d.	
80	N-7/24(33)	The fair maid of Denmark, song, written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: The fair maid of Denmark comes over the sea]	London: Brewer & Co.	n.d.	

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
81	N-7/24(34)	The future flower, song. The poetry by Cowper, the music by J.L.Hatton. [Begins: Go mark the matchless workings of the pow'r]	London: Ransford & son (PN R&S.657)	[1861]	
82	N-7/24(35)	The gallant tars of England. National song written by J.E. Carpenter, the music composed by J.L.Hatton. Author of "The soldiers of our Land" and "Our Dear Old Church of England." [Begins: The gallant tars of England, who brave the stormy sea]	London: Robert Cocks & Co. (PN 15084)	[1868]	Solo voice, chorus & pf.
83	N-7/24(36)	Good morning sweet to thee, ballad. Music composed by John L.Hatton. [Begins: The lark is singing in the air]	London: Hutchings & Romer (PN H&R.1062)	n.d.	
84	N-7/24(37)	How sweetly gleams the light of love, duet, sung by Mr. and Mrs. Sims Reeves. Written by George Hodder. Composed by John L.Hatton. [Begins: How sweetly gleams like of love]	London: Boosey & sons	n.d.	Sign of W.H.Cummings Sign of J.L.Hatton 2 voices & pf.
85	N-7/25(1)	Third editon, sung by Mrs. Sunderland, Miss Helena Walker, Miss Whitham, &c. "Her heart was in the song," written by Barry Corn wall, Esqre. The music composed & dedicated to Mrs. Martin Cawood (Leeds), by J.L.Hatton. [Begins: Thou'lt take me with thee, my love]	London: Addison & Hollier	n.d.	
86	N-7/25(2)	Hope, song written by Beatrice Abercrombie. Music by J.L.Hatton. (Begins: Hope, fair hope! First flow'r to ope)	London: Augener & Co. (PN A&Co.3383)	n.d.	
87	N-7/25(3)	To W. & W.Vaux, Esqr. Ho! fill me a tankard, a cavalier song. Written by W.H.Bellamy, composed by John L.Hatton. [Begins: Ho! fill me a tankard, good mine host!]	London: Campbell, Ransford & Co. (PN C.R&Co.504)	[1854]	
88	N-7/25(4)	Hurrah for our riflemen. Dedicated to the riflemen of the United Kingdom. Words by Eliza Cook. Music by J.L.Hatton. [Begins: Hurrah for our Riflemen, men of the land!]	London: Musical Bouquet Office; No.2163 & 2164, Musical Bouquet	[1864]	Sign of J.L.Hatton Sign of Eliza Cook Solo voice, chorus & pf.
89	N-7/25(5)	"In the good old time love ruled the heart." ("Au bon vieux temps au frain d'amour regnoit.") Translated from the French of Clement Marot (1536.) by W. Prideaux, Esq. set to music for four voices, soprano, alto, tenore e basso, by J.L.Hatton. [Begins: In the good old time Love rul'd the heart]	London: D'Almain & Co. (PN 14413)	[1861]	4 voices & pf.
90	N-7/25(6)	In that sweet Summer time, ballad, written by W.H.Bellamy. The music composed expressly for Miss Poole, by J.L.Hatton. [Begins: Oh! 'twas a bright and happy time]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.145)	[1859]	
91	N-7/25(7)	It was fifty years ago, song by Longfwllow. Composed and dedicated to John Boosey by J.L.Hatton. [Begins: It was fifty years ago in the pleasant month of May]	London: Boosey & Sons	n.d.	
92	N-7/25(8)	In vain you tell your parting lover. Four part song by J.L.Hatton. (Begins: Fair winds blow)	London: Boosey & Co.	n.d.	4 voices & pf.
93	N-7/25(9)	If my mistress hide her face, ballad. Written by Beatrice Abercrombie. The music composed expressly for Mr. Sims Reeves, by J.L.Hatton. (Begins: If my dear mistress hide her face)	London: Boosey & Co.	[1873]	Sign of J.L.Hatton
94	N-7/25(10)	I wander by my dear one's door each night, song, written by B.S.Montgomery. Esq. The music composed expressly for Mr. Sims Reeves, by J.L.Hatton [Begins: I wander by my dear one's door each night]	London: Boosey & Sons.	n.d.	Sign of J.L.Hatton
95	N-7/25(11)	I'm very fond of water. A new temperance song (adapted from the Platt Deutsch). Words from Blackwood's Magazine (published by permission of W.Blackwood & Sons.) set to music by J.L.Hatton. [Begins: I'm very fond of water]	London: Brewer & Co.	[1861]	
96	N-7/25(12)	As I've something else to do, sequel to the favorite ballad "As I'd nothing else to do" written by Herbert Fry, sung by Montem Smith, composed by J.L.Hatton. (Begins: After waiting long and wond'ring whether married life is best.)	London: Brewer & Co.	[1861]	
97	N-7/25(13)	I hadn't a moment to spare, song, composed by J.L.Hatton. [Words written by Charles J.Rowe, begins: 'T was really provoking]	London: Metzler & Co. (PN M.2761)	n.d.	
98	N-7/25(14)	In her garden, song composed by J.L.Hatton. [Begins: Among her flowersmoveth she]	London: Metzler & Co. (PN M.3699)	[1874]	Dedication signature "W.H. Cummings from J.L.Hatton"
99	N-7/25(15)	I stood on the beach, reverie, written by W.T.Matson, Esqr. and sung by Miss. Dolby. The music composed and dedicated to James Canper, Esq. by John L.Hatton. [Begins: I stood the beach by the waters]	London: Boosey & Sons	[1858]	
100	N-7/25(16)	"It is not always May.""No hay pajaros en los nidos de antano." Spanish Proverb. Song written by H.W.Longfellow. Composed by J.L.Hatton. [Begins: The sun is bright, the air is clear]	London: Joseph Williams	[1863]	
101	N-7/25(17)	I dream of thee, ballad, written by Barry Cornwall. Esqrw. composed by J.L.Hattonn. [Begins: I dream of thee at morn]	London: Leader & Cock (PN L&C.2359)	[1856]	
102	N-7/25(18)	I had a fairly garden, wors by Fides, music by J.L.Hatton. [Begins: I had a fairy garden, so full of magic flow'rs]	London: Robert Cocks & Co. (PN 1136)	n.d.	Writing of "...W.H.Cummings... Fides 1873" Unreadable sign
103	N-7/25(19)	In that sweet summer time, ballad. Written by W.H.Bellamy, the music composed expressly for Miss Poole, by J.L.Hatton. [Begins: Oh! 'twas a bright and happy time]	London: Joseph Williams	[1859]	
104	N-7/25(20)	Kit the cobbler, by one of the trade. [Begins: Kit the Cobbler, has built him a stall]	London: Addison & Hollier (PN 3307)	[1866]	Sign of W.H.Cummings
105	N-7/25(21)	Sung by Mr. W.H.Cummings. The last fond look, ballad. Written by J.E.Carpenter, composed by J.L.Hatton. [Begins: He stood upon the busy deck]	London: Duff & Stewart (PN D&S.2890)	[1868]	

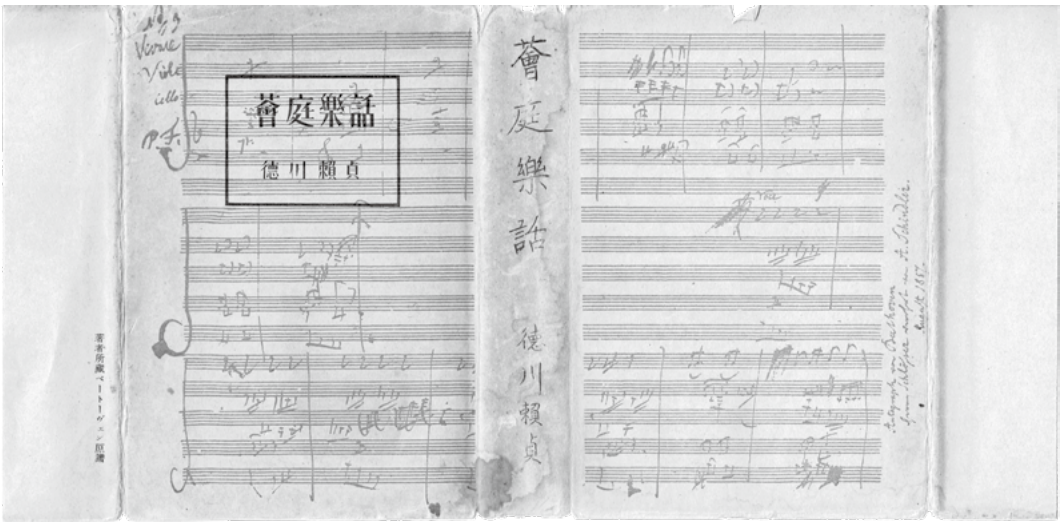
	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
106	N-7/25(22)	Lady Maud & Mabel Lindsay, ballad, written by B.S.Montgomery, composed by J.L.Hatton. [Begins: In Linwood Hall where the moonbeams hover]	London: Ashdown & Parry (PN A&P. 5310)	[1869]	
107	N-7/25(23)	Lass of Watertown, ballad, by Edward Capern (the poet postman), by J.L.Hatton. [Begins: O the bonnie, bonnie Yeo!]	London: Boosey & Sons	[1859]	
108	N-7/25(24)	Look out a-head, song with chorus ad.lib. The words by J.E.Carpenter. The music by J.L.Hatton. [Begins: Oh! the world is a sea full of trouble and care.]	London: Metzler & Co.	[1866]	Solo voice, chorus & pf.
109	N-7/25(25)	The maid I love hath many a grace, song written by Augustus Greville. Composed by J.L.Hatton. [Ballad from the Spanish "Muy gracious es la donella como es hermosa y bella] [Begins: The Maid I love hath many a grace]	London: Boosey & Sons	n.d.	Sign of W.H.Cummings
110	N-7/25(26)	Sung by Mr. Wilbye Cooper. My trusting haert was true to thee, or My fondest hopes are blighted, ballad, composed by John L.Hatton. [Begins: My trusting heart was true to thee]	London: Duff & Hodgson (PN D&H.1894)	[1855?]	
111	N-7/25(27)	My love is not a beauty, song, composed by J.L.Hatton. [Begins: My love is not a beauty]	London: Hutchings & Romer (PN H&R.4558)	[1871]	Dedication signature "W.H. Cummings from J.L.Hatton"
112	N-7/25(28)	Mary, the milkmaid [Written by Wm.H.Bellamy Esq. Composed by J.L.Hatton. Begins: Mary the milkmaid'just eighteen]	London: published by Leader & Cock (PN L&C.1291)	[1857]	
113	N-7/25(29)	Night and morning, song. Written by B.S.Montgomery, Esqr. composed by J.L.Hatton. [Begins: Two sweet young maidens pass my door each day]	London: Addison , Hollier & Lucas (PN A.H.L.5351)	[1859]	Dedication signature "W.H. Cummings from J.L.Hatton"
114	N-7/25(30)	Not lonely, ballad, written by Mrs. Harriet Power., the music composed by J.L.Hatton. [Begins: I am not lonely though thy voice]	London: Lamborn Cock (PN L.C.144)	[1874]	Sign of J.L.Hatton
115	N-7/25(31)	The night is calm and cloudless, poetry from Longfellow's Golden Legend. The music composed and dedicated to (by permission) to her grace The Duchess of Northumberland, by J.L.Hatton. [Begins: The night is calm and cloudless]	London: published by the composer (PN 1122 X)	n.d.	Sign of J.L.Hatton in red ink
116	N-7/25(32)	Once more old England's warriors, song, words written by W.H.Bellamy. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: Once more old England's warriors have girt their good swords on]	London: Addison & Hollier (PN 3046)	n.d.	
117	N-7/25(33)	The orphan boy, written by Charles Swaim. Music by J.L.Hatton. [Begins: The room is old the nightis cold]	London: Addiosn & Lucas (PN A&L.6052)	[1864]	
118	N-7/25(34)	Old Cyril the Sexton, written by W.H.Bellamy. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: Old Cyrol the Sexton he lives on the hill]	London: Addison & Hollier (PN 1677)	[1866]	
119	N-7/25(35)	Our song shall be of home, ballad. The words by J.E.Carpenter. The music by J.L.Hatton. [Begins: When far away from those we love upon the raging sea]	London: Metzler & Co.	[1862]	
120	N-7/25(36)	Phoebe, dearest, tell oh tell me, words by W.H.Bellamy, music by J.L.Hatton. [Begins: Phoebe, dearest, tell, oh! tell me]		[1858?]	Sign of W.H.Cummings
121	N-7/26(1)	Persevere! Song, written by William White, and dedicated (by permission) toThe Lady Mildred Beresford Hope. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: Now listen, ye that stand dismay'd on life's uneven way]	London: Ransford & Son (PN R&S.920)	[1868]	
122	N-7/26(2)	The Queen and our Squadron & brave Commodore, the song of the Royal Thames Yacht Club. Dedicated by permission to W.H.Harrison, Esqr. Commodore. To Meeson Esqr, captain. and the members of the Royal Thames Yacht Club. The words by Lord William Lennox, the music by John L.Hatton. As sung by him with enthusiastic applause at the banquet given in honor of W.H.Harrison Esqr. Commodore of the Royal Thames Yacht Club. [Begins: The Goblet now fill, while I give you a toast]	London: pubrished by Leader & Cock (PN L&C.313)	[1845]	
123	N-7/26(3)	To Miss Elizabeth Young. Rippling Waves, song, written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatto. [Begins: The waves they come and the waves they go]	London: Duff & Stewart (PN D&S.3673)	n.d.	
124	N-7/26(4)	The adventures of Robinson Cruso [Begins: The sea was calm and the wind was still] Music partly purloined from various composers.	London: Addison & Hodson (PN 1688)	[1845?]	Writing of "Music arranged by J.L.Hatton" by unknown hand
125	N-7/26(5)	Simon the cellarer, the words by W.H.Bellamy, Esqr. The music by J.L.Hatton. This song is the property of Mr. Tho. Oliphant. [Begins: Old Simon the cellarer keeps a rare store]	London: Addison & Hodson	[1851?]	
126	N-7/26(6)	Dedicated to H.J.Barrett, Esqr. Sing! who mingles with my lays! sung by Mr. Benson, written by Barry Cornwall, composed by J.L.Hatton. [Begins: Sing! who mingles with my lays?]	London: Leader & Cock (PN L&C.2471)	[1856]	Dedicational signature to "W.H. Cummings Esqr. with S.Benson's kind regards" Traces of use
127	N-7/26(7)	The soldiers of our land, national song with chorus. The words by J.E.Carpenter. The music by J.L.Hatton. Author of "Our dear old Church of England," "The gallant tars of England" &c. [Begins: Up! gallant hearts of England!]	London: Robert Cocks & Co. (PN 15093)	[1868]	Solo voice, chorus & pf.
128	N-7/2608)	Sweet wife of mine, song, the words by Jessica Rankin, the music by J.L.Hatton. [Begins: Life has too happy with thee sweet wife of mine]	London: Joseph William (PN LC.A&Co.3911)	[1866]	
129	N-7/26(9)	Song for the saesons, written by Barry Cornwall, composed by J.L.Hatton. [Begins: When the merry lark doth gild]	London: Joseph Williams (PN 4676)	[1864]	
130	N-7/26(10)	The snow white plume. Poetry by W.H.Bellamy. Music by J.L.Hatton. [Begins: The sun went down on Crecy's plain] (The Prince of Wales' Wedding Music, No.3)	London: Cramer Beale & Wood (PN 8334)	n.d.	

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
131	N-7/26(11)	Sweet love, good night, song. Written by Edwin Ramsford, set to music by John L.Hatton. [Begins: The silv'ry moon is shining bright]	London: Campbell, Ransford & Co. (PN 546)	n.d.	Sign of W.H.Cummings
132	N-7/26(12)	Sweet love, good night thee, ballad. Words by John Duff. Music by J.L.Hatton. [Begins: The exile leaves his native land]	London: Duff & Hodgson (PN D&H.2243)	[1860]	
133	N-7/26(13)	The old soldier's daughter, ballad. Written by W.H.Bellamey, composed by J.L.Hatton. [Begins: Oh do you remember the Old Soldier's Daughter?]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5352)	[1866]	
134	N-7/26(14)	Sung by Miss Palmer. The sailor's wife, the poetry by C.Mackay, L.L.D. The music by J.L.Hatton. [Begins: I've a letter from thy sire]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5675)	[1840]	Sign of J.L.Hatton
135	N-7/26(15)	The sailor's child, ballad. Words by Barry Cornwall, Esqr. Music by J.L.Hatton. [Begins: Hush! my boy! hush! my blessing!]	London: Enoch & Sons (PN E&S 60)	[1873]	Stamp of "Presentation copy"
136	N-7/26(16)	The secret of the sea, ballad, written by H.W.Longfellow, musiv by J.L.Hatton. [Begins: Ah! what pleasant visions haunt me]	London: Joseph Williams (PN 5851)	[1870]	
137	N-7/26(17)	Dedicated to Clara and Jessy. The stars, "Without haste, without rest." Sung by Mr. Benson, written by Barry Corn wall, composed by J.L.Hatton. [Begins: They glide upon their endless way]	London: Leader & Cock (PN L&C.2146)	[1855]	Sign of J.L.Hatton
138	N-7/26(18)	The stream (A reverie), written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: Stream through the meadow grass quietly flowing]	London: Duff & Stewart (PN D&S.3674)	n.d.	
139	N-7/26(19)	She was my boyhood's dream, ballad, written by J.E. Carpenter, the music composed and dedicated to James H.Davidson. Esqr. by J.L.Hatton. [Begins: She was my boyhood's dream]	London: Robert Cocks & Co. (PN 15238)	[1869]	Sign of W.H.Cummings
140	N-7/26(20)	The snow flakes, song. The words by B.S.Montgomery, the music by J.L.Hatton. [Begins: The snow flakes, the snow flakes]	London: Augener & Co. (PN 3378)	n.d.	
141	N-7/26(21)	"Save father on the sea," song written by A.Matthison, set to music for Miss Palmer, by J.L.Hatton. [Begins: The storm winds howl, the waters rage]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5834)	[1867?]	
142	N-7/26(22)	Sing, nor let one note of sadness, song, written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: Sing, nor let one note of sadness]	London: Duff & Stewart (PN D.&S.3676)	n.d.	
143	N-7/26(23)	4 Songs, no.2 Summer, for contralto. Written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: The sun is high in the welkin now]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.J.5682)	[1860]	see N-7/24(1), N-7/26 (24) & (38)
144	N-7/26(24)	4 Songs, no.1 Spring, for soprano. Written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: Again the Spring is coming]]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5682)	[1860]	see N-7/24(1), N-7/26 (23) & (38)
145	N-7/26(25)	Chamber Trio [no.32]. The Savoyard's Return, composed by J.L.Hatton. [Begins: Oh! yonder is the wellknown spot]	London: published by Leader & Cock (PN L&C.2229)	[1844]	3 voices & pf.
146	N-7/26(26)	"So the story goes," words by Dr. J.F.Waller, reproduced from Cassell's Magazine, by permission of Messrs. Cassell Petter & Calpin. Music composed by J.L.Hatton. [Begins: 'Twas once upon a summer day]	London: Lamborn Cock & Co... and J.B.Cramer & Co.	n.d.	
147	N-7/26(27)	The silver moon is keeping watch, serenade, the poetry by Thos. Oliphant Esqr. composed by John L.Hatton. [Begins: The silver moon is keeping silent watch in the clear blue sky]	London: Addison & Hodson	[1848]	
148	N-7/26(28)	A sea song, written by W.C.Bennett, sung by Made. Sainton-Dolby, composed by J.L.Hatton. [Begins: The windows rattle in their frames]	London: Boosey & Sons	[1861]	Sign of J.L.Hatton
149	N-7/26(29)	The true heart's constancy, song, written by W.H.Bellamy. Composed and dedicated to C.Lockey, by J.L.Hatton. [Begins: A Rover I've been, in realm a far]	London: Cramer, Beale & Chappell (PN 6855)	[1858]	
150	N-7/26(30)	Sung by Mr. Wilbye Cooper. True to love and thee, song, written by George Linley, composed by J.L.Hatton. [Begins: As if to welcome eyes so dear]	London: Boosey & Sons	[1861]	Sign of J.L.Hatton
151	N-7/26(31)	To Mrs. Hall Hall. Watergate House, near Chichester. This life, song, words by Gustavus Neboyne Esqr. music by F.Hatton. [Begins: This life is wearing fast away]	London: Foster & Co. (PN F.&Co.599)	[1866]	Sign of J.L.Hatton
152	N-7/26(32)	The trumpet on the Rhone, song. (with trumpet obligato.) Written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: The shadows of a summer night]	London: Addison, Hollier & Lucas (PN A.H.L.5732)	[1871]	Sign of J.L.Hatton Solo voice, trumpet & pf.
153	N-7/26(33)	"Under the greenwood tree," ballad, sung by Mr. Sims Reeves, in the cantata of Robin Hood, written by George Linley, composed by John L.Hatton. [Begins: Under the greenwood tree]	London: Cramer, Beale & Chappell (PN 6333)	[1856]	
154	N-7/26(34)	Sung by Madame Weiss. Under the cliffs by the sea, ballad, written by Mortimer Collins, Esqr. composed by J.L.Hatton. [Begins: White throated maiden]	London: Foster & King (PN F&K.696)	[1863]	
155	N-7/26(35)	Uncle Jack, song, written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: Uncle Jack had been a sailor]	London: Metzler & Co.	[1862]	Sign of W.H.Cummings
156	N-7/26(36)	The village church, song written by Beatrice Abercrombie, music by J.L.Hatton. [Begins: The old village church 'neath the elm tree stands]	London: Duff & Stewart (PN D&S.3672)	n.d.	
157	N-7/26(37)	Dedicated to Mrs. Broadhurst. When day is bright, chansonette, sung by Mr. Benson, written by T. Hood, composed by J.L.Hatton. [Begins: When day is bright with sunny light]	London: Lamborn Cock. Hutchings & Co. (late Leader & Cock) (PN L6C.2911)	[1862]	
158	N-7/26(38)	4 Songs, no.4 Winter, for baritone. Written by W.H.Bellamy, composed by J.L.Hatton. [Begins: Summer is o'er, with her fragrant store]	London: Addison & Hollier & Lucas (PN A.H.L.5682)	[1860]	See N-7/24(1), N-7/26 (23) & (24)

	整理番号	表題	出版地:出版社/者(PN番号)	刊年	注記、編成 (記載がない限り、独唱とピアノ伴奏)
159	N-7/26(39)	While there is life there is hope, song, written by B.S.Montgomery, the music by J.L.Hatton. [Begins: There are times when the heart in its gladness]	London: Joseph Williams (PN 4565)	n.d.	
160	N-7/26(40)	"The wreck," descriptive song, written by B.S.Montgomery, the music by J.L.Hatton. [Begins: The sea sends forth an angry roar]	London: Joseph Williams (PN 4559)	n.d.	
161	N-7/26(41)	Walter the woodman, dung by Mr. Machin, the word by W.H.Bellamy Esqr. the music by John L.Hatton. (This song is the property of Tho. Oliphant, Esqr.) [Begins: Walter the woodman is hale and strong]	London: Addison & Hodson	[1847]	
162	N-7/26(42)	Chamber trio. What say the clouds on the hill and plain? composed by J.L.Hatton. The words by Barry Cornwall, Esqr. Number forty five, of a selection of trios, with English words and an accompaniment for the piano forte. [Begins: What say the clouds on the hill and plain?]	London: published by Leader & Cock (PN L&C.2511)	[1844]	3 voices & pf.
163	N-7/26(43)	Chamber trio. The wood-thrush, composed by J.L.Hatton. Number forty four, of a selection of trios, with English words and an accompaniment for the piano forte. [Begins: Whither hath the wood-thrush flown]	London: published by Leader & Cock (PN L&C.2510)	[1844]	3 voices & pf.
164	N-7/26(44)	Chamber trio. Who will to the greenwood hie? composed by J.L.Hatton. Number forty, of a selection of trios, with English words and an accompaniment for the piano forte. [Begins: When the moon is sailing high]	London: published by Leader & Cock (PN L&C.2368)	[1844]	3 voices & pf.
165	N-7/26(45)	We are two merry gay laughing fairies, duet, sung with greatest success by Miss. A.Williams & Miss. M.Williams at the Nobility's Concerts Musical Festivals. &c. &c. &c. Written by Hercourt Rusell. Esqr. The music composed by J.L.Hatton. [Begins: We are two merry gay laughing fairies]	London: Lamborn Cock, Hutchings & Co. (late Leader & Cock) (PN L&C.316)	[1845]	2 voices & pf.
166	N-7/26(46)	Warbling birds, duet, for Two Treble voices, composed by J.L.Hatton. [Begins: The merry song of warbling birds]	London: Ransford & Son (PN R&S.670)	n.d.	2 voices & pf.
168	N-7/26(47)	Whither? Song, translated from German or Müller, by H.W.Longfellow, music by J.L.Hatton. [Begins: I heard a brooklet gushing]	London: Addison & Hollier (PN 1809)	[1852]	
168	N-7/26(48)	When lovers say "good night." Serenade, by J.L.Hatton. [Begins: The hour is come, my own true heart]	London: Augener & Co. (PN A&Co.1761)	n.d.	
169	N-7/26(49)	You will not change. Ballad composed by J.L.Hatton. [Begins: You will not change I know your heart]	London: Charles Lockey, Hastings, Duff & Hodgson	n.d.	Traces of use
170	N-7/26(50)	Zachary bell, the words by an old stager. The music by J.L.Hatton. [Begins: Did you never hear tell of old Zachary Bell]	London: Addison. Hollier & Lucas (PN A.H.L.5271)	[1866]	
171	N-7/27(1)	"God is love." A sacred song, written by J.W.Roe. The music composed and dedicated to Edmund Crundy. Esqre. (The Wylde, Bury, Lancastershire) by John L.Hatton. [Begins: Should darkness cloud life's troubled air]	London: Addison & Hollier	[1854]	Solo voice, chorus & pf.
172	N-7/27(2)	Sacred lays, on the Commandments. Written by Charles Hall. Esqre. The music composed by J.L.Hatton.	London: Addison & Hollier (PN 1805)	[1840?]	
173	N-7/27(3)	Benedicta es tu, Virgo Maria, a Domino Deo ecelsa prae omnibus mulieribus. (Tu gloria Jerusalem, tu laetitia Jsrael, tu honorisicentia populi nostri,) Alleluia, Allelia. (Tota pluchtra es, Maria, et macula originalis non est in te.) Alleluia. Graduale for voices alone composed by J.L.Hatton.	London: Augener & Co. (PN 1976)	n.d.	4 voices without accomp.
174	N-7/27(4)	Exaltato te Domine, quoniam suscepisti me, nec delectasti inimicos meos super me, Domine clamavi ad te, et sanasti me. Offertorium for four voices, soprano, contralto, tenor & bass, organ accompt. composed by J.L.Hatton.	London: Augener & Co. (PN 1975)	[1860?]	4 voices & organ
175	N-7/27(5)	Mass for four voices, soprano, contralto, tenor & bass, composed by J.L.Hatton. No.1.	London: Augener & Co. (PN 1966)	[1860?]	4 voices & organ
176	N-7/27(6)	To Mrs.Charles Kean. Overture and music incidental to Shakespeare's play of King Henry the Eighth, as performed at The Royal Princesses Theatre, composed by John L.Hatton. No.1, Overture No. 2, 1st Entr'act No.3, Shakespere's favorite tune and old dances No.4, 2nd Entr'act prelude & air yaried N0.5, 3rd Entr'act Grand march No.6, 4th Entr'act No.7, Duett Orpheus with his lute, soprano & contralto.	London: Campbell, Ransford & Co. (PNs C.R.&Co.509, 514, 515, 520, 526, 550, 652)	[1855]	Piano solo except no.7 for 2 voices & pf.
177	N-7/27(7)	Trois caprices pour le pianoforte, composées par John L.Hatton.	London: Addison & Hollier	n.d.	Piano solo
178	N-7/27(8)	Prelude and fugue (in G minor) by J.L.Hatton.	London: Addison & Hollier	[1857]	Dedication signature to "W.H. Cummings with Mr. Hattons compliment" Piano solo
179	N-7/27(9)	Tranquillity. An impromptu, for the piano forte, composed and dedicated to Mrs. I.W.Collard, by J.L.Hatton.	London: Addison & Hodson (PN 1680)	[1866]	Piano solo
180	N-7/27(10)	Capricio, on the favorite melody, Pestal, for the pianoforte composed by J.L.Hatton.	London: Leader & Cock (PN L&C.162)	[1847]	Piano solo
181	N-7/27(11)	Phantasmagoria. A set of Walzes, composed and dedicated to the Brilliant by Johann van Tripper.	London: Boosey & Sons	[1861]	Writing of "John L.Hatton" Piano solo

市販版『薈庭樂話』 その出版、その時代

江本英雄



市販版カバー
筆者は市販版『薈庭楽話』に掛けられたカバーが私家版にも付されていたと想像していたが、発行時の原態を残す新出資料によって否定された。通報されたのは国会図書館の工藤哲朗氏で、東京藝術大学音楽学部大学史史料室所蔵の上野直昭（元京都博物館館長）の旧蔵書で、「紙製の外箱と（中略）パラフィンが付属している（下略）」（工藤氏）という。これは古書業界用語でいう「機械函入、元パラ付」の状態のようである。函に印刷はなく、背に短冊様の紙片（背題簽）が貼ってある、という。

1. 著者序の追記をめぐって

『薈庭樂話』市販版は昭和 18 年 3 月 30 日に春陽堂書店より発行、1,500 部発売されたことが奥付によって読み取れる。印記されたページ数は 337 ページで、これは私家版に較べ 42 ページすくない [1]。よく知られているように、記述の一部を削除したためである。削除のほかに人名をイニシャルに変更したり、わずか数字を削っている例もみられる。それらの異同を逐一検討する必要があるが、紙数の都合もあり、残念ながら別の機会にゆずる。

削除を余儀なくされた事情については、著者が信頼をおいた盟友、喜多村進に宛てた昭和 17 年 2 月 7 日付の書簡（喜多村進宛 8 号書簡）[2] で、後述するように、その一端が明かされている。

市販版の著者序には 14 行にわたる「追記」が加えられていて、刊行にあたって逡巡のあったことを明らかにしている。彼は先輩友人たちに諮り、彼らの後押しによって刊行を決意した。すこし長いが、全文を引用する。

---

(1) 徳川頼貞『薈庭樂話』市販版 (春陽堂書店 , 1943); 私家版 (徳川頼貞刊 , 1941); 復刻版 (中央公論新社 , 2021).『薈庭樂話』に市販版のほかに私家版があることを読書界に広く知らしめたのは、村上紀史郎『音楽の殿様・徳川頼貞──五〇〇億円の〈ノーブレス・オブリージュ〉』（藤原書店 , 2013.1.30）であろう。私家版は 1982 年に南葵育英会の刊行になる新組の再版 200 部があるが、ほとんど世に知られていない。この度和歌山県教育委員会の英断によって、私家版が再刊されるにいたったのは幸いであった。

(2) 竹中康彦「喜多村進宛徳川頼貞書簡」『南葵音楽文庫紀要』4 号 (2021. 3.31), p. 60-61. 以降の喜多村進宛書簡の引用も同書簡集より。これらの書簡は喜多村進の遺族によって和歌山県立博物館に寄贈されていたが、今日ようやく活字化されるに至ったもので、その意義ははかりしれない。

追　記

本書が愈々印刷に附されやうとする時、私は大東亜戦争の詔勅を拝した。続いて真珠湾頭の驚くべき大戦果とマレー沖海戦の忠烈無比なる皇軍の武勲を耳にして、真に心の奥底から湧き起る感動を押へることが出来なかった。

想へば今次の大東亜戦争は嘗て在った如何なる戦争にも異る重大意義をもってゐる。それは大東亜建設のための戦ひである。米英の桎梏より東亜の諸民族を開放する聖戦である。私は斯く考へて豁然と我々の進むべき道の明示せられたことを悟った。私達は過去の一切を清算して、新しき指導理念の下に粉骨砕身祖国の為めに働くべき時が来たのである。かく思ひかく考へて、自らを反省した時、私は今や上梓されようとするこの書に想ひ到って、果してこの如き閑文字を公刊すべきや否やに迷った。私は先輩友人に諮った。友人達は育てた苗は稔らせよと私に教へた。それで私はこの書を初期の如く刊行することに決心した。

大東亜戦争はあらゆるものを必要とする。それは新文化建設の聖戦である。この小著の如き、それは文化といふ広野に咲く一莖の小さき花に過ぎないものではあるが、知己あって摘みとってくれるならば、著者にとって此上ない喜びである。

昭和十七年一月 (3)

これは本来の「著者序」の末尾の日付と署名のあとの余白を埋め（6 行）、次のページ（裏白）に 9 行が加えられた。先の序の日付は昭和 16 年 11 月。この間に日米が開戦した。ちなみに私家版には「尚、この書は限定版として、極く小数の人々に残したいために特に公刊に先立って印刷に附したものであることをお断りしておく」(4) と書かれていたが、削除されている。私家版・市販版に共通する 4 名の序文の日付は斉しく「十一月」に揃っており、市販版の序文の日付までの約 2 カ月の間にことが進んだようにみえるが、そのようにスムーズに運んだのではない。私家版の奥付には、ごく簡略に「昭和十六年十一月・東京市神田区小川町・宮本印刷所・印刷」としてあるが、事実を反映してはいまい。なぜなら私家版の完成は昭和 17 年 1 月いっぱいかかったとみられ（喜多村宛 8 号書簡）、市販版はこの時点からさらに約 1 年の間印刷・製本作業は進行しなかった。つまり市

(3) 徳川『薈庭樂話』市販版 , p. 13-14. 引用の旧字は新字に改めた。以下同様。
(4) 徳川『薈庭樂話』私家版 , p. 13; 復刻版 , p. 26-27.

販版の追記も現実の作業工程と合致していない。

著者は私家版を喜多村進に贈呈するにあたり、私家版が削ぎ落とされて市販版になった事情を述べている。「記事中殿下方の事項が多い事」「小生の住居 Villa Elisa とか Villa del Sol とかの名称は、欧米崇拝の念を起させる」という指摘が「宮内当局」から著者に意思表示されたからと言明している（喜多村宛８号書簡）。前の部分は首肯できるが、後者は検閲官でもない宮内省が言い出すことでは無いようでもある。宮内省に不敬に渉る文言の検閲の担当者がいたのだろうが、とくに不敬にはあたらないだろう文言の削除を著者は受け入れ、指摘のあった部分が削られた。「極く小数の人々に残したいために」意を決して完全版を刷ったのは、序の追記に日付をうってから１カ月後である。その後組版から問題にされた部分の活字を抜き去り、ページ（ノンブル）を整えて市販版を刷り出したのは工程から考えると昭和 18 年に入ってからであろう。私家版出版の意志を決め、削除した市販版の刊行をも決意し、序に追記を認めるまで、約１カ月。しかしその後作業は滞ったままであった。市販版が出来上がるまでにはさらに空白の時間が過ぎる。

当初の序文の年次は昭和 16 年であり、市販版の発行日は昭和 18 年となっているので、まるで３年もの歳月が経っているように思えるが、実際は１年４カ月のへだたりである。その間慎重に削除する部分を決め、市販版の出版にこぎつけるための時間は、１年余りである。けっして短いとは言えない。どうしたことだろうか。

著者が『薈庭樂話』の執筆を思い立ったのがいつであったか明証はないが、喜多村宛の書簡群にみえるかぎりでは昭和 10 年（1935）７月５日付け（１号書簡）に、「昨年高麗園に来てから、時にふれ、折りにふれ、今日までの自分の音楽回想＝或は随想？＝をつゞってみたがどうもうまくゆかぬ」とあって、昭和９年のいつの頃からか、『薈庭樂話』に結実する執筆にとりかかったことが知られる。文体（スタイル）について悩むところがあったようで、その問題に一応の決着をみたのが、書簡中でも言及されているように林権助の『わが七十年を語る』に接してのちのことという（同書は昭和 10 年３月刊）(5)。

『薈庭樂話』の文末は「アルペン・ジュンフォニー」（リヒャルト・シュトラウス作曲）のプラーゲによるクレームの顛末で、昭和9年から10年にかけての出来事である。著者の筆はこれ以後の出来事に踏み込んでいない。

(5) 林権助『わが七十年を語る』（第一書房 , 1935.3.5.）

プラーゲ問題の一応の決着は昭和15年７月15日の著作権仲介業法違反事件判決（600円の罰金）なのだが著者は関心を示さず、この書の記述は昭和９年、10年で筆をとめている。そして著者は喜多村に文章の添削を乞うている。「原稿は出来次第にタイプして」送るといい（喜多村宛1号書簡）、このような作業は著者自身がおこなったとは考えにくい。序に謝意を表している、国際文化振興会の高野武郎の手助けは著者が同会の副会長に就任（昭和9年4月18日発会）してほどなく始まったのであろう。高野については泉健によってその経歴が明らかにされたばかりであるが、高野と著者との協力関係の起点について、泉は、高野が国際文化振興会に勤務するようになる以前の昭和4、5年頃に両者が既知であった可能性に触れているが、あくまでも慎重である(6)。前述の筆者の推測の根拠たる喜多村宛１号書簡にも、高野の名はでていないが、出来次第にタイプして、とあるのが示唆的である（喜多村進に高野の名を報知するのは市販版出版後の昭和18年8月15日付け、９号書簡)。昭和15年７月22日(7)以後にもまだ原稿に手入れをしており、「ひまひまにするので、長くかゝる事と思ふ」という予想どおり（１号書簡）だったが､序文あつめに着手するまで、なお時日はある。

小泉信三・小松耕輔・牛山充・黒田清および著者の序文が出揃っていながら、私家版の出版が昭和17年１月の下旬、もしくは２月早々だったことも喜多村宛8号書簡で判明する。２月７日の夜に認められたこの手紙で｢其限定版を一部進呈します」として喜多村にも送られた(8)。

市販版の刊行はそれから１年以上経ってからである。私家版印刷後、削除部分の撤去、ノンブルの整序などにかかる時間を差し引いても長すぎる空白である。

2. 奥付の記載

奥付に記載されている情報は当時としては一般的であるが、今日からみるとやや詳細といえるかもしれない。発行部数を明示しているのは、この時期の出版物に限られることで、法的な規制があったと思われる。1,500

(6) 高野武郎については泉健「高野武郎――徳川頼貞『薔庭楽話』の口述筆記者」『南葵音楽文庫紀要』4 号 (2021. 3.31), p.25-34 を参照。

(7)『薔庭樂話』私家版のなかで著者は松岡洋右を「松岡氏は、現在の外務大臣である」（p. 37; 復刻版 , p. 61）と記す。松岡の外務大臣就任は昭和 15 年 7 月 22 日で、退任は 16 年 7 月 16 日。この文言は追記されたのであろう。序文の日付でいえば「前の」とあるべきである。市販版ではこの文を含む 5 行が削除され、さらにその次の行の冒頭「松岡氏は、早速一行を案内して下さって、」を「ペテルブルグでは」と直し、「見せて下さった」を「見物し」と修正している（市販版 , p. 27-28）。

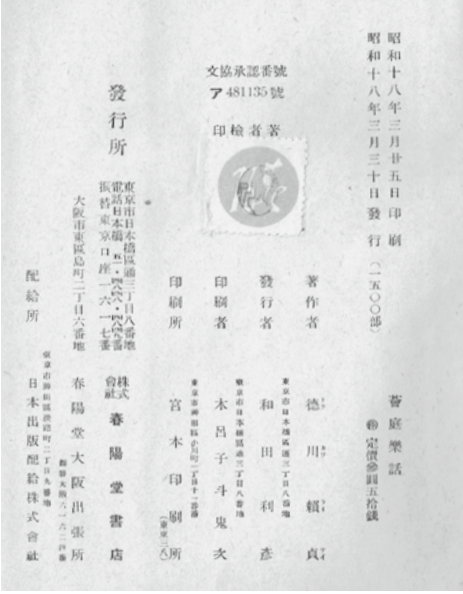
(8) この本は喜多村進の遺品にはみあたらない。

部というのは印刷部数としては少ないとはいえないが、多いほうではない。最近はみられなくなったが、印刷日と発行日を別に表示している。この慣行は長くおこなわれていた。ただし作業日程を正確に表示しようという意味はなく、慣例的なものである。著者名にフリガナが振られている。注目されるのは名前の読みで、通称のライテイを用いていることである。発行者は出版社の代表者の個人名が表示される。和田利彦は喜多村進への書簡（8号書簡）に「春陽堂主人の厚意により」と記されていて、旧知であったようである。

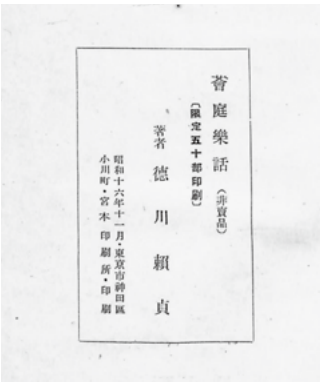
和田利彦は明治 18（1885）年 7 月 28 日、広島の今村義夫の二男として生まれた。明治 45 年早稲田大学商科を卒業、春陽堂書店の和田静子に入夫、出版業に参入した。妻の静子は明治 24（1891）年東京生まれ、父小林直造の長女で、跡見女学校卒業という。春陽堂の創業は明治 11 年（1878）2 月 4 日、美濃国不破郡荒川村（岐阜県大垣市）出身の和田篤太郎（1857.8.23 ～ 1899.2.24）が神田和泉町で始めた書籍小売兼行商から身を起こし（出版は明治 15 年ごろから)、雑誌『新小説』『文學世界』を発行して文芸作品の普及に力をそそぎ、さらに明治文壇の主要な作家の著書や全集の出版で隆盛を誇った。篤太郎は明治 32 年 2 月 24 日に 43 歳で世を去った。書店の経営は妻のうめが引き継ぎ、養女静子に今村利彦を迎えて業を継がせた。3 代目当主の利彦は改造社の円本『現代日本文學全集』に対峙して『明治大正文學全集』を発刊して覇を競った。著者が『薔庭樂話』の執筆に取り掛かっていた頃、株式会社日本放送出版協会の代表を兼ねており、岩波茂雄・山本実彦・嶋中雄作らと並ぶ出版界の重鎮だった。徳川頼貞より 7 歳年上で年齢的に隔たっておらず、個人的にも親しかったと思われるが両者の関係は詳かではない。

印刷所は宮本印刷所で、神田小川町 1 丁目11番地に所在した。印刷者は木呂子斗鬼次となっているが[9]木呂子は宮本印刷所の代表ではなく、春陽堂書店の社員である。奥付に記された木呂子斗鬼次の住所は和田利彦と同じ日本橋区通3丁目8番地で、和田氏の縁者であったろうか。宮本印刷所での印刷が私家版・市販版ともに共通しているのは、組版を削除修正するという技術上、同じであるのはむしろ当然である。

春陽堂書店は昭和 8 年に和田利彦によって株式会社に改組され、近代的経営に脱皮した。ここでの奥付の社



市販版奥付
市販版の奥付は重要事項を書き漏らすことはない。



私家版奥付
私家版の原稿には奥付を失念している場合があり、印刷所の担当者はこのような簡略な奥付をつけて校正を届けることがある。これもその例か？

(9) 木呂子（キロコ）という珍しい姓は、吉見百穴で知られる埼玉県吉見町にあった武州松山城主上田氏に属した木呂子氏（埼玉県比企郡小川町木呂子村を本貫としたとされる）を出自とするのであろう。

名も「株式会社　春陽堂書店」となっている。その後別会社春陽堂文庫出版株式会社、大日本文庫刊行会を設立していたが、戦後合併して一本化している。

市販版の『薈庭樂話』の判型（サイズ）はB6判である。今回出版された『薈庭樂話』（復刻版）は四六判で、大きさがほぼひと廻り違う。

この点から、市販版の刊行された時代について考えてみたい。このサイズが選択されたのは著者序に「附記」が書き足されたことと無関係ではない。日本の出版物は昭和15年11月7日付けで、当時の商工省が公布した「用紙規格規則」（昭和16年4月1日施行）により、規則判以外の製紙が禁止され、従来からの一般的な書籍サイズの菊判・四六判はA5判・B6判に変えられたからである。菊判・四六判の本で用紙入手済みのものは許可を得て同型の継続（規格外許可）ができたが、その紙が尽きるとシリーズ本でもサイズの不揃いを余儀なくされ、昭和19年8月31日の改正によってA列・B列とも5号・6号の4種類に限定された。戦後この規制はなくなったが、菊判についてはA5判への移行が定着し菊判はほぼなくなり、四六判は復活してB6判と両立する形になる。B6判にはやや手軽なイメージがあるようである。ちなみに著者のもうひとつの著書『頼貞隨想』はまだB6判が優勢だった「戦後」の出版界の状況が映しだされ、B6判になっている。

それとともに出版界の時代状況が映しだされていることがある。この奥付には、今は見られないこの時期特有の記載項目が加えられているのである。ひとつは、

「文協承認番號／ア481135號」

と中央部の上に印刷されていることと、末尾に、

「配給所　（住所略）日本出版配給株式会社」

とあることである。

文協とは(10)、溯ること3年前、昭和15年5月17日の閣議において、企画院・商工省を中心としていた新聞雑誌用紙の統制を内閣に移し、内閣情報部の中に「新聞雑誌用紙統制委員会の設置を決定して、出版新体制確立のため、既存の出版各団体を解消して一元的な総合機関の設立に乗り出したことにはじまる。東京以外にも出版業者の団体は大阪・京都にあったが、東京の日本雑誌協会、東京出版組合と同じく解散を決定、これで国内の出版事業者は一本化し、出版統制の中核団体「社団法人日本出版文化協会」が誕生した。

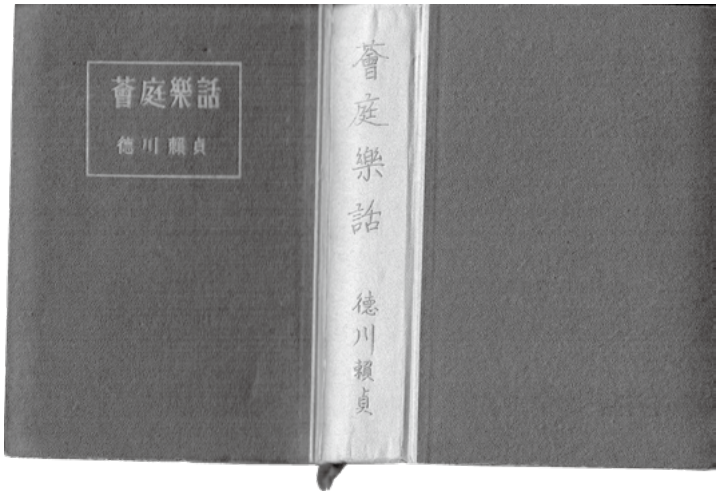
(10) 日本出版文化協会の略称。文協の興廃の顛末については『日本出版百年史年表』（社団法人日本書籍出版協会，1968.10.1）に詳細に日次を追って記録されている。本稿もそれに拠った。

任意団体を装っているが、本質は統制団体であって、出版の承認、用紙の割り当てに強い権限をもっていた。ここに付された番号は 48 万をこえており（昭和 16 年の年間出版図書数は普通出版物 28,009 点、昭和 17 年は 24,211 点、昭和 18 年 17,818 点）、再版本を含めた点数なのだろう。用紙の割り当ては各出版社の実績による通常割当と特別割当（良書助成という）があった。当初は通常割当に事前審査はなかったが、昭和 17 年 4 月からは査定割当となって、発行承認制に改められ、9 月 21 日以後は企画届に原稿または資料を添付し、奥付にかならず発行承認番号を記載しなければならなくなった。承認番号を受けていない書籍の発行は禁止とされたのであった。したがって『薈庭樂話』私家版が完成配布された時点では許可番号の記載はまだ不要であった。

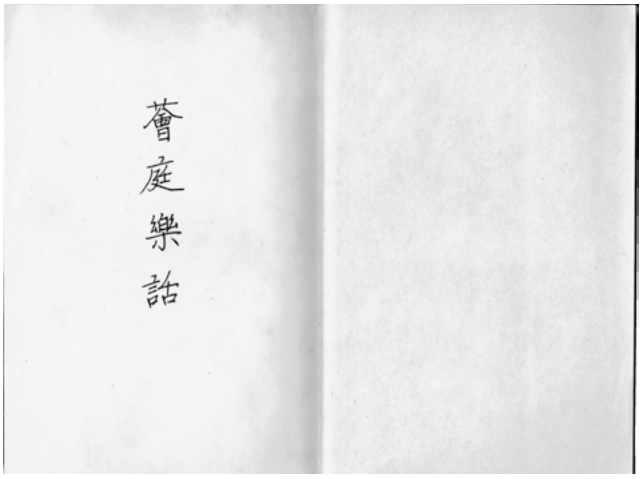
このように規制は厳しくなっていたが、それでもなおこの時期に『薈庭樂話』の市販版が出版されたことはかなり幸運だったといえるかもしれない（昭和 19 年に年間の普通出版物は 5,438 点に激減し、20 年にはわずか 878 点だった）。昭和 18 年に入り国家総動員法に基づく出版事業令・施行規則（閣令・内務省令・文部省令第 1 号）が 2 月 18 日公布され、翌 19 日に日本出版文化協会はより統制力を強めた「特殊法人日本出版会」に改編を命じられた。その後 8 月には日本出版会は審査会議を設けて審査制を強化、企画届と原稿またはゲラ刷の事前提出を求め、用紙の重点特別配給・不急書の発行不承認・緊急企画の処理に即応する方針を決定した。間一髪のところで『薈庭樂話』は不急書として発行不承認となったかも知れないのである。

日本出版配給株式会社というのは、出版物を発行所から取次いで小売書店に卸す「取次」と呼ばれた企業をひとつにまとめて、日本出版文化協会・日本出版会傘下で業務を一本化したものである。すべての出版物はこの会社をつうじて各小売書店に届けられた。

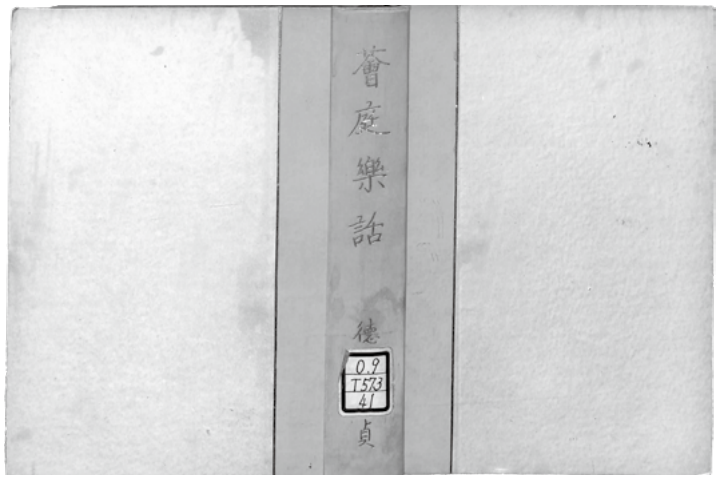
もうひとつ、市販版『薈庭樂話』の奥付でみられる今日のそれとの違いは、検印と検印紙の貼付である。切手型の小さな紙片に著者などの印鑑を押したものを部数分だけ用意し、出来上がった本の奥付に 1 枚ずつ貼って、印税（税金ではなく著者に支払われる分配金）が正しく著者に支払われていることを示す証紙で、明治初期に著者に無断で（つまり印税を払わずに）出版・販売されることを防ぐ著者側の対抗策として導入され、ずっと慣例となってほとんどの本に貼られてきた。日本独特の慣行である。



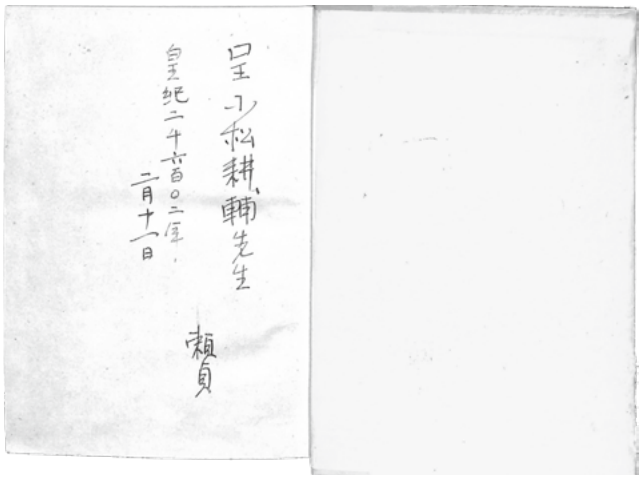
市販版装幀
私家版との素材の違いがわかる。材質はすべて紙を加工した特殊紙。



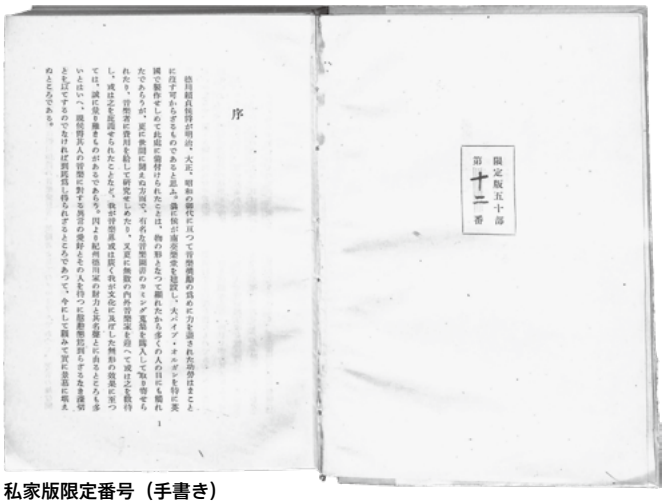
市販版扉
私家版ではこの次に妻為子への献辞 (片面刷り、裏白) が入るが、市販版には省略されている。



私家版装幀
背の部分は黄土色の布クロス、平(ひら)は白い和紙。



私家版の献辞
小松耕輔は序を寄せた４人の２番目に載る人。喜多村進には４日早い日付で私家版（「其限定版」）を送っている。



私家版限定番号（手書き）
喜多村進宛の献呈本はこの番号より若かった？もしそうなら献呈本に署名する頼貞の心境が見て取れそうである。

3. 造本について

市販版『薈庭樂話』の生まれた時代背景は、その後さらに苛酷なものとなる。くわしく触れる余裕はないが、製本用資材も逼迫し、上製本でも表紙のボール紙は薄くなり、外函は昭和 18 年 5 月中に廃止を強制され、ついには表紙も雑誌のように紙 1 枚だけになった。

わずかに先んじた市販版『薈庭樂話』の造本（ブック・デザイン）は、まだ造本に心を配る余裕が残っていた時期であり、またけっして安易な手法に逃げた訳ではなかった。乏しい資材環境の中では、装丁に意を用いた本だと評価されるのでなかろうか。丸背・紙装上製本（函ナシか）・カバー掛けという造本は最低限の装いであって、まずカバーは著者自慢のコレクションであるベートーヴェンの自筆楽譜を地模様に鼠色で刷り、表紙側平（ひら）の上部にやや太い罫囲みで「薈庭樂話／徳川頼貞」と臙脂色がかった濃い茶色でタイトルを乗せる。囲みの線は精密でなく態とラフに引いてある。文字は活字ではなくレタリングである（このデザインは復刻版にも使用されているが今回は囲みの罫は精確に引かれ、レタリングのラインも美しく整えられている）。背の部分に楽譜は回さず白場出しし、ペン字書き（為子筆？）の「薈庭樂話　徳川頼貞」の凸版で題名を記し（地模様とおなじ鼠色）、裏表紙部分に楽譜の残りが刷られている。書店名やマーク等はなく、版元（春陽堂）を示す文字はみられない。表紙は裏表紙とも極く濃い茶色の革風のシボ（皺）の入った特殊紙で背の部分は同紙質の銀色のものである。茶と銀のインクで刷ったのではなく、装丁用の特殊紙を使用する。つまり一枚の紙ではなく継表紙（ひら）である。継ぎ合わせはミゾぎりぎりで（ふつうはもっと平（ひら）のほうに延ばされる）、平（ひら）にはカバーと同じタイトル、背文字も同じペン字書きの書名著者名で金箔押する。箔用凸版で押されている。ここも書店名の表示がない。扉は書名のみで著者名はなく、また書店名もない（春陽堂の名は唯一奥付のみに表示される）。これも異例とすべきであろう。カバーも見返しも表紙同様、特殊紙を吟味して使っており、材質はともかく材料は選び抜かれたものといえる。扉は見返し（アソビ）の次にくる。上質紙だが、やや質はよくない。次に著者近影（アート紙、片面刷り）がくる。私家版にあった妻への献辞はない。以下本文のところどころに写真図版（アート紙、両面刷り）が 13 カ所挿入される。いずれも単丁貼り込みである [11]。

---

(11) 復刻版と市販版のカバー（おそらく私家版も）はよく似た印象だが、復刻版ではペン書きの書名と著者名、書名のみ記された本扉がないこと、および表紙平 (ひら) に新たなデザインが施されていること、著者の写真（著者近影）の位置が目次の後に移されていること等に違いがある。本扉がないことや表紙平 (ひら) にタイトルを印刷することなど（市販版も同様だが）は余り例を見ない手法で、この繊細なデザインを本扉にしたらよかったのに、と感じる。あくまでも筆者の個人的な感想だが。

本文紙質は中質紙である。図版貼り込みが多い所為か、台割りの都合で中扉と奥付は単丁貼り込みで処理している。本文は序・目次・写真（目録）まで前付 12 頁、中扉以下本文ノンブルを起こし、奥付の前 338 頁、加えて奥付 1 丁（ウラ白）ですべてである。

今日の眼でみると簡素な、物資不足な時代の産物のようにみられるが、よく考えられた造本であるといえる。ただ全体に粗末な感じがいなめないのは残念である。

私家版の奥付には文協の承認番号がないのは前述のとおりである。この承認番号はあくまで市販を前提としたものであるが、文協への申請がもうすこし後にずれ込んでいたら、この書物の内容から、許可されなかったかも知れない。私家版が発行された段階では思いもよらなかった事態である。『薈庭樂話』が市販されるに至ったことも間一髪の危うい僥倖だったのではなかろうか。市販版に春陽堂の名が入れられなかった理由はあきらかではない。

東京大空襲によって春陽堂書店は壊滅した。宮本印刷所も同様であったろう。もし刷らずに次の機会を待っていたら『薈庭樂話』のすべての活字は炎熱に溶けて跡形もない。あるいは陽の眼を見る機会は訪れなかったかもしれない。市販版の奥付に記された「文協」はこの本が店頭にならんだ時にはすでに「日本出版会」に衣替えしてより統制力を強めていた。著作が出版できるか否かはこの組織がすべてを握っていたのである。そして物資の不足が輪をかけて新規の出版を困難にしていた。「文化といふ広野に咲く一茎の小さな花」として世に出そうという著者のささやかな願いもかなわなかったかもしれない、瀬戸際であったのである。もしかすると、『頼貞隨想』同様に著者の没後にひっそりと刊行されたかもしれない。その時なら完全版で刊行されたであろうが、いずれにしても今日のわれわれにとっては過去の出来事である。どちらが望ましい状態かはひとくちではいえないだろう。『薈庭樂話』も南葵音楽文庫と同様に数奇な運命に翻弄された存在であった。

市販版の『薈庭樂話』は現物を見ることも少なくなった。稀購本というわけではないが、書店で買い求められない本は図書館で探すのだが、和歌山県立図書館でも郷土資料（禁帯出）の 1 冊しかない。ここにおいて『薈庭樂話』が再版された意義は大きい。しかも完全版の私家版の再現である。以後市販版の位置付けはやや下がることになろうが、すべての版にはそれぞれ歴史的価値が付随する。その価値は復刻版が登場しても不変のものであって、出版が行われた時代を物語る重要資料である。それを読み解くことは後世のわれわれに課せられた役目である。そうすることによって著者が生きた時代を知るよすがとなる。筆者がつたない言説を試みた所以である。

（付記）

その後私家版が新たに出現し、筆者も一見に及んだ。予想と違って私家版と市販版の装丁にまったく共通点がないのに驚いた。継表紙という造本技術は共通しているが、使用している資材はまるで別物である。サイズも四六判でひとまわり大きい。これは私家版が印刷された時点では B6 判という規格はなく、そもそもこの大きさの本が存在しなかったのである。その本にカバーは無く、おそらくあの楽譜の意匠のカバーがかかっていたはずと想像するのみである。今後所蔵者の許しが得られればより詳細な観察をリポートしたい。

貴重資料の修復その心と技
──南葵音楽文庫を例にして──

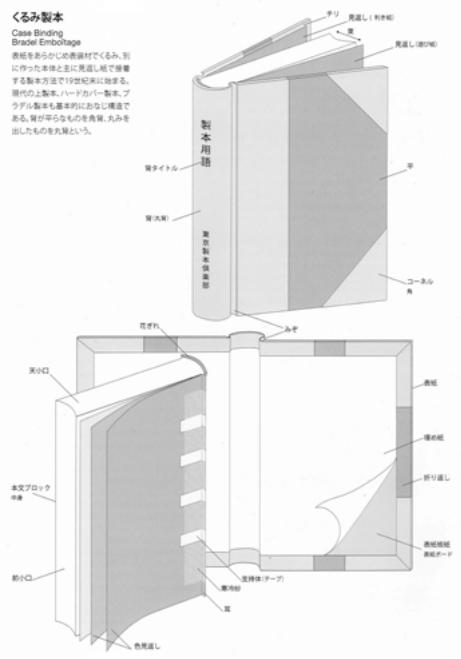
株式会社 Conservation for Identity　飯島正行

書籍（洋装本）の修復について、その構造や損傷/劣化要因、作業時の決まり事等の基本的な事柄を踏まえつつ、南葵音楽文庫資料の修復作業を行うにあたり何を考えてどのような理由で技術・材料を適用したのかについて報告する。

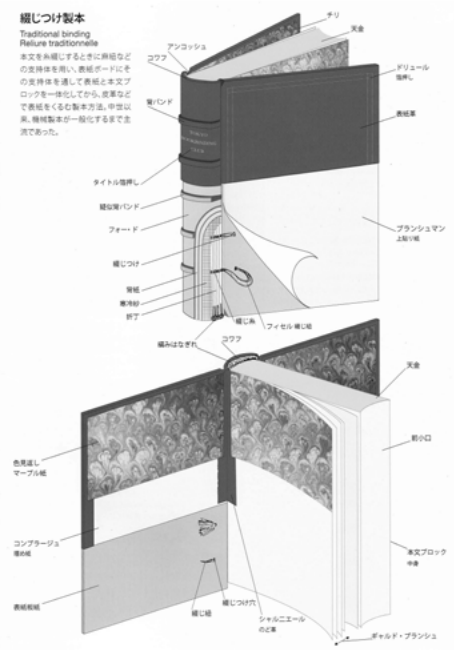
1. 洋装本の製本構造

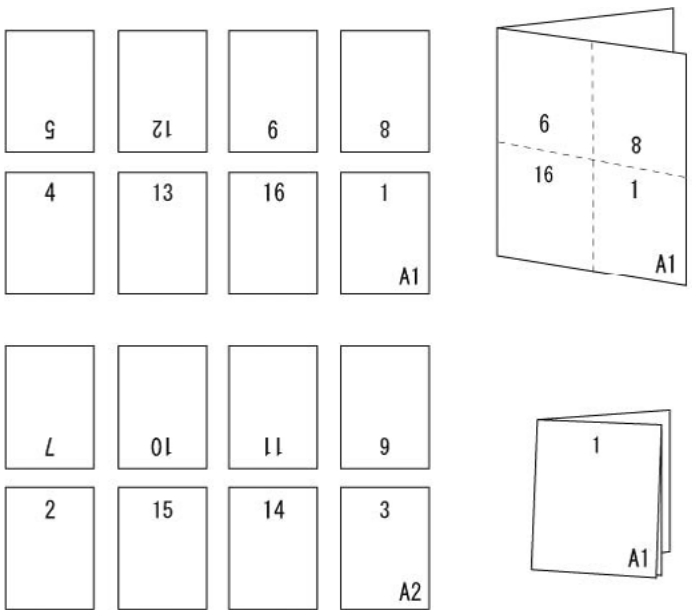
伝統的な西洋の印刷本は、一枚の紙を折り畳んだ「折丁」で構成されている。八折判の場合には長方形の紙に1 ～ 16までのページを割り付けて表裏に内容を印刷し、3回折り畳むと16ページの折丁になる。八折判以外にも二折判、四折判、十二折判等がある。この折丁の折山側を糸で支持体の紐に絡めながら綴じていくことで書籍の中身が完成する。

中身と表紙の接続には主に2種類ある。その一つ「くるみ製本」は文字通り中身を表紙で包んだ製本で、中身と表紙を別々に作っておいて合体させると一冊の書籍が出来上がる。一方、伝統的な洋装本の製本方法「綴じつけ製本」は中身と表紙を支持体等で繋ぎ、表装材となる革等を貼り込んでいく方法で、中身から段階的に組み立てていって一冊の書籍に仕上げるというものである。分業体制で同時並行作業が可能な「くるみ製本」と比べると「綴じつけ製本」は時間がかかる。



くるみ製本（上）と綴じつけ製本（下）
© 2019 東京製本倶楽部





折丁（八折判 /16 ページ）

2. 書籍の損傷/劣化要因

書籍を構成する素材（紙、革、布等）に生じる損傷や劣化について1）化学的要因、2）生物的要因、3）物理的要因の三つに分けて考える。これらの要因によって生じる損傷/劣化が構成素材に耐久性の限界をもたらすことにより、書籍という「形態」の維持を困難にさせる。

1）化学的要因

（1）熱

・火災による資料の焼失。化学的には急激な酸化（炭化反応）で酸化反応の際に発生するエネルギーが膨大なため、発光と発熱を伴う。

・あらゆる化学反応は温度が高いほど進行速度が速く、資料保管場所の温度、太陽光や照明に含まれる赤外線による熱線は資料表面の加熱とともに乾燥をもたらす。

（2）光

・紫外線の影響は大きく、紙のみならずインクや色材等の変褪色も起こる。

・紙への影響は、セルロースが可視領域（380nm ～780nm）の光には比較的安定しているが、機械パルプ等に含まれるリグニンは光に対して敏感な（特に340nm近辺）物質のため、紫外線によって変色し、耐折強度の低下が加速される。

（3）酸化

・セルロースは酸素と化合して変質、分解する。酸化が進行すると、最終的にはセルロース分子内に多くのカルボキシル基を生じて酸性化する。酸化したセルロースは主鎖の切断によって重合度が低下し、紙の物性が低下する。

・酸化反応は鉄や銅等の金属イオンによっても促進される。

（4）酸性化

いわゆる酸性紙で、紙の酸性化は次のような要因によって発生する。

①滲み止め剤（サイズ剤）

12世紀に製紙技術が欧州に伝来して以来、タブサイズ（紙を膠液に浸す）が行われていた。17世紀半ば以降に膠の腐敗防止と粘度調整のために添加した明礬（硫酸アルミニウム・カリウム）により、17世紀後半の紙は17世前半の紙の16倍の酸性度となった。その後、19世紀には機械製紙が始まり、ドイツで発明されたロジン（松脂）サイズの定着剤として使用した硫酸アルミニウムの紙中への残留が酸性化の大きな要因。硫酸アルミニウムによって紙に酸加水分解が起こり、セルロース分子

の主鎖が切断される。
②大気汚染物質
　硫黄分を含む石油や石炭の燃焼によって生じる二酸化硫黄や主に化石燃料の燃焼に伴って発生する窒素酸化物が紙に悪影響を与える。二酸化硫黄は紙中の水分と反応して硫酸を生じ、窒素酸化物も同様に亜硝酸を生じ、最終的に酸素と化合して硝酸となる。
③資料が接しているものからの移行（マイグレーション）
　額装に使われた素材やページ間に栞として挟み込んだ紙が酸性紙であった場合、酸性紙から酸の移行が徐々に起こり、健全な紙に変色や劣化をもたらす。

2）生物的要因

（1）カビ・細菌類

　カビは胞子を空気中に飛ばして付着した場所で水分や栄養条件が整うと、菌糸を伸ばして菌糸体を形成する。細菌は細胞分裂によって増加する。カビや細菌が原因とされて紙に発生する劣化現象として、フォクシング（foxing）やフケと呼ばれる現象がある。フォクシングは茶褐色の変色や斑点で、原因菌が生成したアミノ酸とグルコースの褐変反応による原因（黴起因説）の他、製紙段階で混入した金属イオンの存在によるもの（金属起因説）等の有力説がある。フケはカビや細菌が持つセルロース分解酵素によって紙力が低下し、吸湿性が増すことによって紙がフカフカの状態となる。

（2）虫・動物

　紙資料に害を及ぼすものには、シバンムシ類、シミ類、ゴキブリ類、ヒラタキクイムシ類、カツオブシムシ類、イガ類、チャタテムシ類やネズミ等がある。シバンムシ類はトンネル状に貫通した穴を掘り、ネズミは資料を齧ったり、尿による染みを残したりする。

3）物理的要因

（1）自然災害

・地震…揺れにより書棚に配架した書籍が落下し、その構造（ジョイントが切断し、表紙が外れる等）及び形態（表紙角が歪む等）に対する甚大な被害が引き起こされる。
・風水害…河川の氾濫、上下水道からの溢水、鉄砲水、泥水や生活廃水等によって引き起こされる。主な損害として、カビの増殖、変形・ページ同士の固着、染みの発生、インクや染料等の滲み等がある。

（2）人的災害

・閲覧者が栞代わりに裏紙を挟んだままにして、文字が移行してしまった事例がある。コピートナーは顔料と定

着剤の熱可塑性樹脂からできており、この樹脂が再軟化したことでインクが移行した。
・無理な複写やデジタル化による資料の損傷。スピード重視の慎重さを欠いた作業により綴じ糸の切断、ページの外れや破損等が発生している。護るべきは何なのかをいま一度考えていただきたい。
・木綿の白手袋は指先の感覚がなくなるため、特に劣化気味の資料の扱いには危険が伴う。書籍や紙資料の利用時には、よく洗浄した清潔な手で取り扱う。また、資料表面を傷つけたりしないように、指輪、腕時計、首にかけたIDカードホルダー等は事前に取り外す。

3.書籍の保存と修復

書籍は閲覧するものであると同時に研究対象や展示品としての価値も持つ。閲覧者に対する利用保証のため、損傷/劣化が進行している場合には何らかの手当てを必要とすることがある。書籍をどう残すのか？との問いに「残さない」だったり「代替化（デジタル化、マイクロ化）」という選択肢がある。そして、オリジナルを残す決断をした時に「修復」という選択肢が現れる。ここで重要になるのは「書籍の何をどう残すのか？」ということになる。具体的には表装材、装飾、表紙芯材、見返し、本文紙、印刷、綴じ方、表紙と中身の接続方法、花布等があり、これらには制作された時代や地域による異なるバリエーションが書物史を研究するための重要な情報となる。また、蔵書票、利用の痕跡（手垢、書入れ、付箋、修復痕等）には旧蔵者の情報を知る手がかりが豊富に存在する。

書籍を修復するにあたり守るべき決まり事として、国際図書館連盟（IFLA）が示した「図書館におけるコンサベーションと修復の原則」があり、ここで示された4項目が資料保存の現場において幅広く受容されている。
・可逆性の原則…処置を行う以前の状態に戻す必要があった場合、損傷を与えることなく原状回復可能な処置や材料を使用すること。
・安全性の原則…処置の失敗による損傷はもちろん、使用した材料等の経年劣化による損傷を引き起こさないこと。
・原形保存の原則…個々の製本構造、装飾、使用材料等の高いオリジナリティを護るため、その価値を失わせる処置（改装）、過度な介入は行わないこと。
※修復対象となる書籍が持つ歴史に深入りしすぎないということだが、書籍を不安なく利用できるようにするためには、オリジナル構造を維持しないという選択を所蔵者、研究者、修復技術者による協議で行うことがある。

·記録の原則…処置前の状態、処置した部分、使用材料、適用技術を記録すること。

4. 南葵音楽文庫資料の保存修復事例

修復作業を行うにあたり常日頃から意識していることとして、「正確な診断」、「的確な技術」、「安全な材料の選択」、「過不足なく実施」を基本的な事柄と考え、伝わってきた姿かたちや風合い等を可能な限り損なうことなく手当てすることを目指している。また、書籍としての利用（読むこと）にも展示（見られること）にも耐えられるように、最表層面に至るまでに、どれだけ丁寧な仕事の積み重ねがなされたのかがとても重要になると考えている。

修復作業の完了という山頂までに何通りものルートがある中で、どういう考えでルート、材料を選び山頂を目指したのかを6年間で修復した約60冊の中からいくつかの事例を通して具体的に見ていく。

1）K-13『Missale Romanum, ex Decreto Sacrosancti Concilli Tridentini Restitutum...』Antuerpianam, 1651年

【現状】 1651年にアントワープで出版されたローマ・ミサ典書。背革がおもて表紙ジョイントで切断され、ぶらぶらした状態。背革には経年による硬化が生じ、無数の亀裂や大規模な欠損も見られる。その他、花布は背から外れ、糸のほつれもある。支持体や綴じ糸に脆弱化部分はあるが、無理して解体·綴じ直しを行う必要はない。

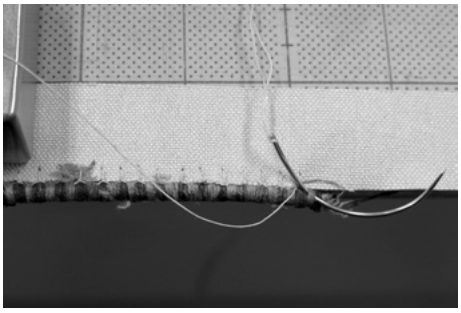
背革が外れている

背革の亀裂、欠損と外れた花布

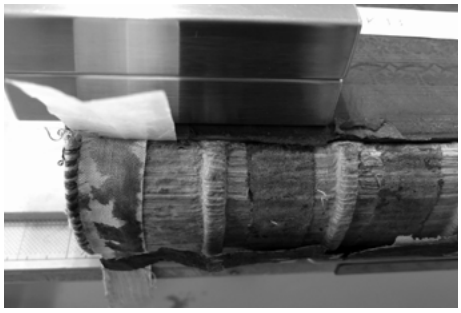
【処置方針】 多くの部分が原装と推測され、本件と同様の損傷/劣化状態の場合に用いられる保存修復方法である「新規背革を貼り込み、元背を貼り戻す」を採用することは、革の状態から難しく、欠落や破損という被害拡大の可能性すら考えられる。そのため、原装を活かすために背革はこのままの状態として外観を維持しつつ、必要最低限の修復処置によって構造的な補強を目指すことにした。

【主な処置内容】

・ドライクリーニング
・ヒンジ（麻布製）を取り外して、背貼りによる締め直し
・花布の補強/修復
・花布、ヒンジの再取り付け
・表装革の手当て



花布の補強 / 修復



花布とヒンジの再取り付け

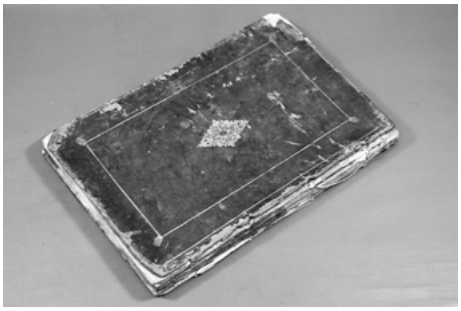
【処置前後比較】 見た目に大きな変化はないが、注意は必要なものの不安なく取り扱えるようになった。

処置前

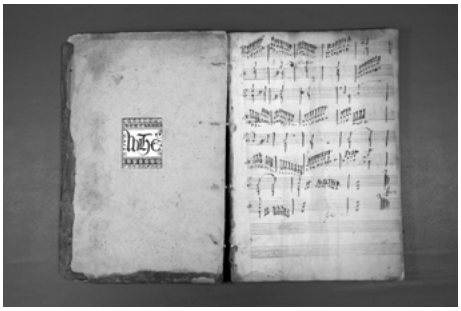
処置後

2）N-3/35《イギリス鍵盤音楽集》（筆写楽譜）

【現状】 総革装綴じつけ製本。背革は欠失し、表紙も分離している。綴じ糸の切断やノド割れが生じており、多くの利用機会があったものと想像できる。楽譜は没食子インクによって書かれ、「インク焼け」が生じている。



背革の欠失、綴じ糸の切断

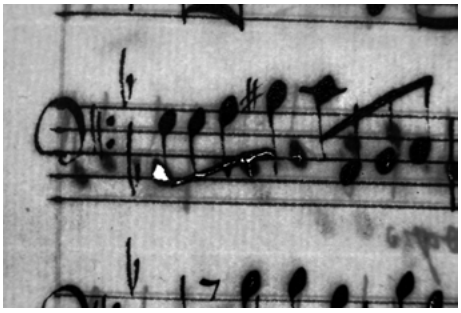


表紙の分離

【没食子インクとインク焼け】

没食子インクはブナ科の植物に出来る虫瘤に含まれるタンニンで作ったインク。16世紀の製法では、白ワイン、タンニン、アラビアゴム、硫酸鉄を熱しながら混ぜ合わせて作った。

インク焼けは、①インクに含まれる硫酸がセルロース（紙繊維）を酸加水分解させる、②鉄（II）イオンがセルロースの酸化を促進させる、これらの要因によってセルロースの物理的劣化が生じる。



インク部分の脱落

【処置方針】 インク焼けの対処の他、本文紙の損傷/劣化への手当てをし、綴じ直し・再製本を行う。

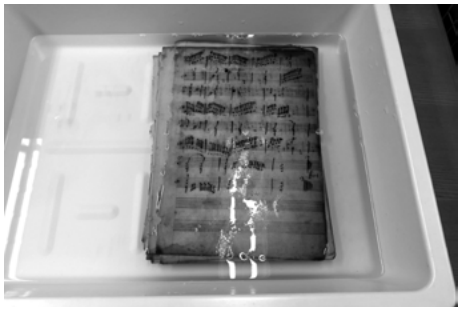
【主な処置内容】

・ドライクリーニング

・洗浄、抗酸化処置（フィチン酸カルシウム溶液に浸漬し、鉄イオンをキレート化して非活性化）、脱酸性化処置（炭酸水素カルシウム溶液に浸漬）

・綴じ直し

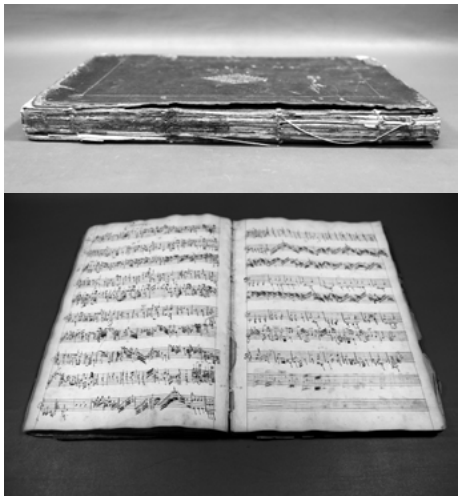
・新規背革（染色した仔牛革）の貼り込み



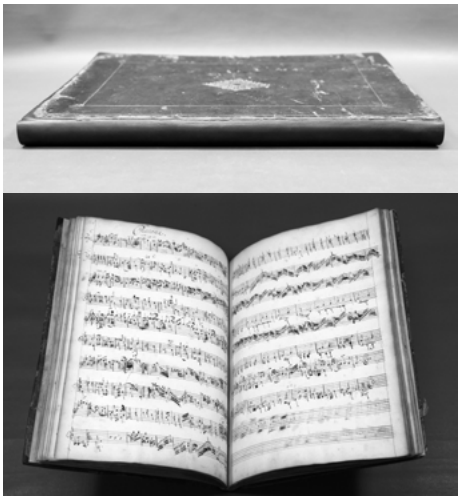
抗酸化処置

新規背革の貼り込み

【処置前後比較】



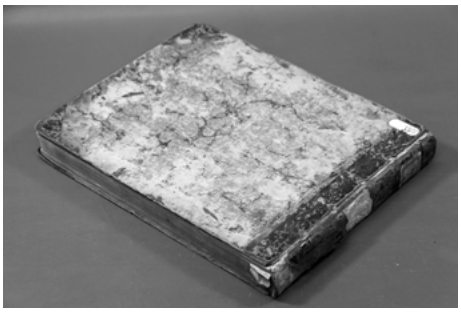
処置前



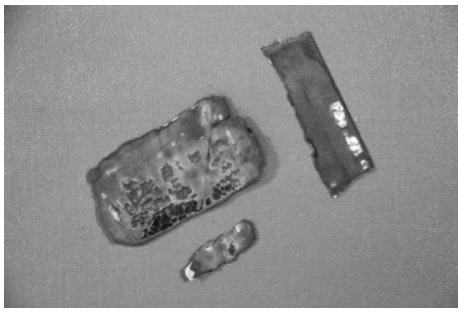
処置後

3）N-3/20《調べあふれる仲間たち、あるいは詩編愛唱者たちの宝箱》（筆写楽譜）1814年

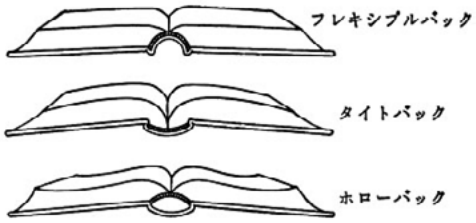
【現状】 角革装綴じつけ製本。タイトバックという背の動きが制限（固定）される構造のため、繰り返しの利用によって背革が外れ、素材の経年劣化も加わって銀面剥離や欠損、亀裂等の損傷が生じている。



表装材の摩耗や欠損が見られる



剥離した背革



背の形状（牧経雄『製本ダイジェスト』より）

綴じ直し

花布の編み直し

・フレキシブルバック…背表紙と中身の背が接着しており、開閉時には背表紙と中身の背が連動して動く。背表紙（箔押しタイトル、装飾）が傷みやすい。
・タイトバック…背に厚紙を貼り重ね背の形状が固定されているため、開きが悪い。
・ホローバック…背表紙と中身の背は接着されておらず、開閉時には両者間に空間が生じる。この空間維持のためにクータと呼ばれる筒状の紙を入れる。

【処置方針】 タイトバックのままでは利用時の背の動きに表装材も含めて対応できず、同様の損傷を繰り返すことが予想されるため、背の構造をホローバックへと構造変換することで背や綴じにかかる負荷を減らす。外観に変化はない。

【主な処置内容】
・背革を丁寧に取り外し、背固めを除去
・綴じを解体し、没食子インクへの抗酸化処置等を行う
・オリジナルと同様に綴じ直し、花布も復元
・クータを用いホローバック構造にする
・新規背革（染色した仔牛革）を貼り込み、元背を貼り戻す

【処置前後比較】

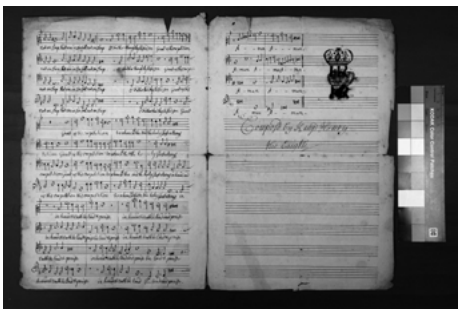
処置前

処置後

4）N-4/40『Anthems early manuscripts. Score (various pieces)』

【現状】 9種類の様々な筆写楽譜が挟まれたフォルダー。そのうちの一つの本文紙は酸性劣化による茶変色の他、周縁部や天地・左右に走る折り目付近を中心に破損や欠損が見られる。

フォルダーに収まる楽譜



周縁部や折り目付近に破損や欠損がある

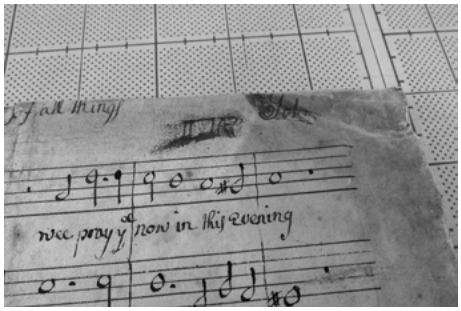
【処置方針】 伝世資料である本資料のオリジナリティの尊重を第一とし、今日に至るまでに重ねられた利用の痕跡を消さないようにする。ただし、将来的な損傷の拡大や劣化の進行につながるような事象に対しては過不足のない手当てを確実に行う。

【主な処置内容】

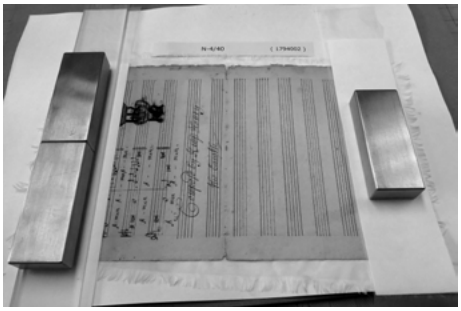
・ドライクリーニング

・洗浄、抗酸化処置（フィチン酸カルシウム溶液に浸漬し、鉄イオンをキレート化して非活性化）、脱酸性化処置（炭酸水素カルシウム溶液に浸漬）

・本紙の破損等を和紙で補強、修復

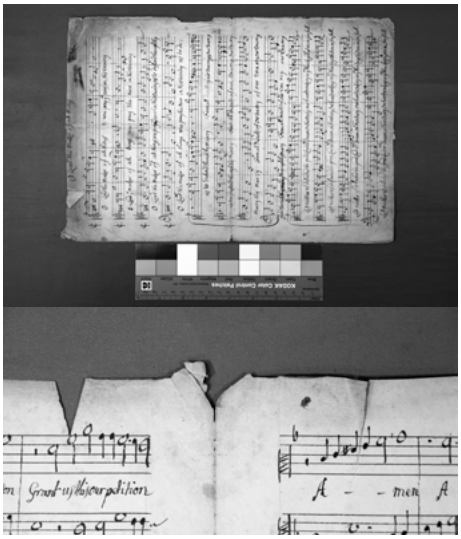


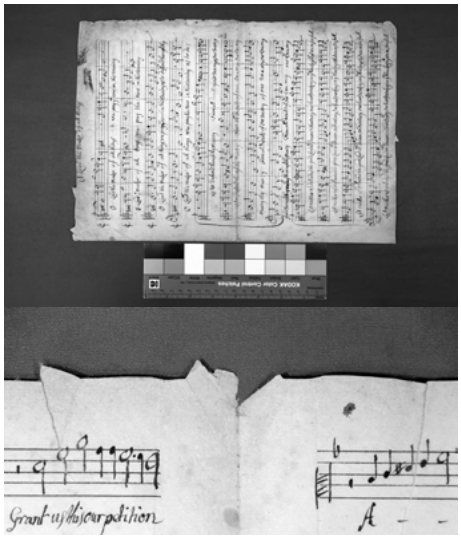
ドライクリーニング前後比較



本紙の繕い

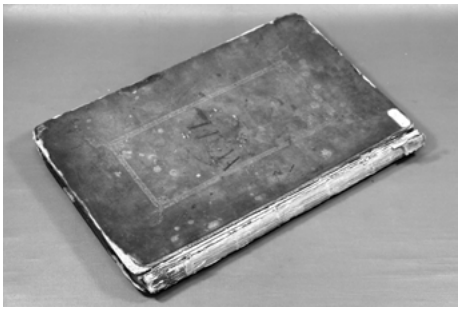
【処置前後比較】 修復処置後でも周囲に凹凸が残っていると思われるかもしれないが、直線、直角、まっ平らに直してきれいな長方形の資料に一律に仕上げるのは我々の仕事ではない。見た目を良くするため美的価値のみを重視する修復もあるが、我々が行う資料保存の考え方はそのようなものではない。「資料」としての寿命を可能な限り延ばす手伝いをする作業であり、資料が個別に持っている多くの痕跡（＝情報）を消し去ってまで見た目の良さだけを第一とする作業は行わない。

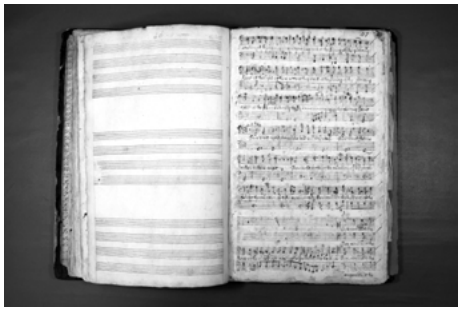

処置前


処置後

5）N-4/39《イギリスのパートソング集》（筆写楽譜）18世紀

【現状】 総革装綴じつけ製本。起毛革で装丁されている。表裏の表紙は外れていて背革は欠失している。綴じには緩みが生じ、インク焼けによる筆写部分の脱落も見られる。


総革装綴じつけ製本、革は起毛革


綴じの緩み、インク焼け

【処置方針】 手で触れた時の感触も資料に接したときのとても大切な要素であり、その貴重な体験を奪うようなことがないように欠失した背革はオリジナルと同じ起毛革で修復する。

【主な処置内容】

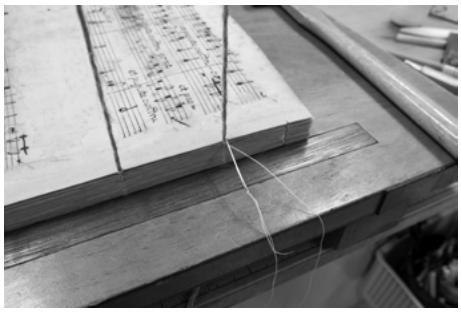
・背貼り、背固めを除去して、綴じを解体

・洗浄、抗酸化処置（フィチン酸カルシウム溶液に浸漬し、鉄イオンをキレート化して非活性化）、脱酸性化処置（炭酸水素カルシウム溶液に浸漬）

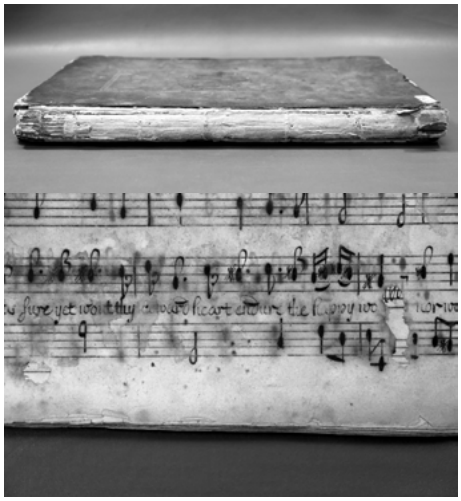
・オリジナルと同様に綴じ直し

・新規背革は起毛革（ヌバック）を使用

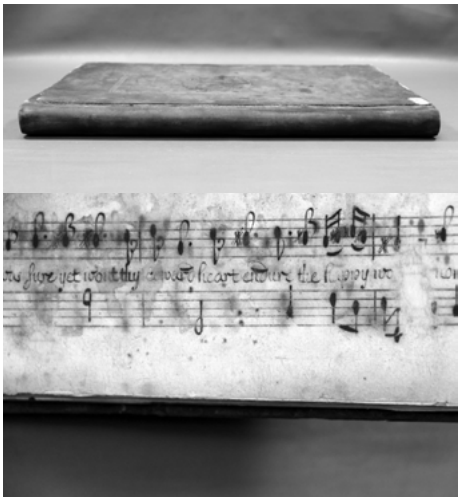
背固め除去


綴じ直し

【処置前後比較】



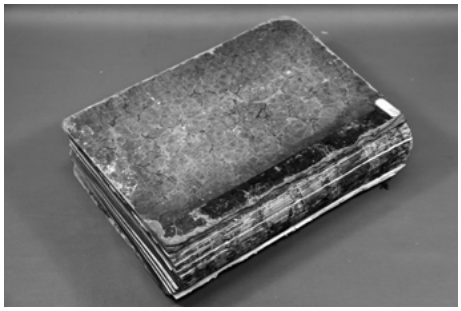
処置前



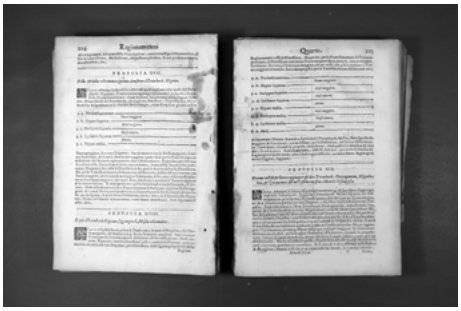
処置後

6）**M-3/3**『Du tutte l'opere del R.M.Gioseffo Zarlino da Chioggia』Venetia, 1589**年**

【現状】 半革装綴じつけ製本。平にはマーブル。革製の支持体が欠失し、表裏の表紙は外れて綴じもバラバラな状態となっている。



平のマーブル紙は伝統的な模様



綴じはバラバラ

【処置方針】 必要な補強材を入れた上で、伝世してきた姿を最大限尊重する仕上りを目指した。

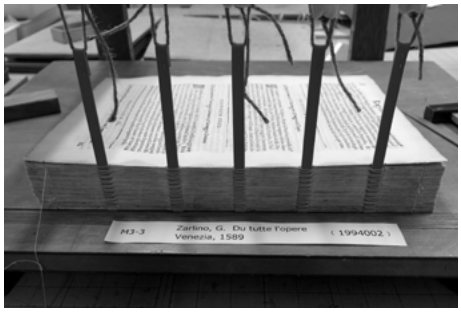
【主な処置内容】

・綴じの解体、背固めの除去

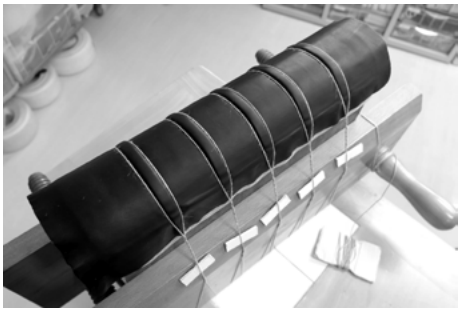
・洗浄、抗酸化処置（フィチン酸カルシウム溶液に浸漬し、鉄イオンをキレート化して非活性化）、脱酸性化処置（炭酸水素カルシウム溶液に浸漬）

・革背の支持体を作成し、オリジナルと同様に綴じ直し

・新規背革（染色した仔牛革）の貼り込み



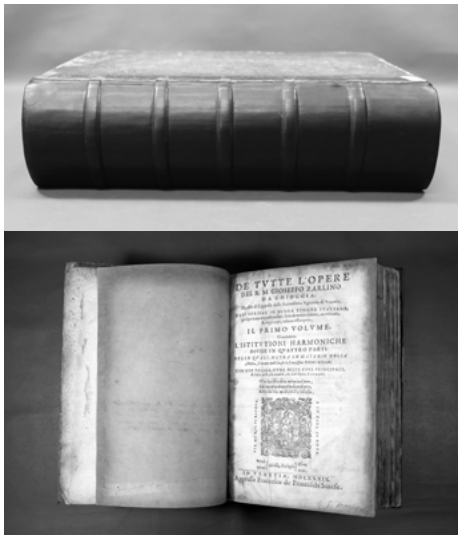
綴じ直し



支持体をきれいに浮き上がらせる

【処置前後比較】

処置前



処置後

5.最後に

繰り返しにはなるが、「南葵音楽文庫」の貴重な資料群の保存修復作業は、現用文書のような「資料」としての利用のみを考えるものとは基本的に異なる。「貴重書」として利活用（閲覧、展示、研究）に耐えうる基本的な/最低限の強度を製本構造に持たせることはもちろん、外観や手に触れた時の感触の他、製本の工芸的な側面に至るまで注意深く検討した上で実施し、可能な限りの痕跡（情報）を残し伝えていく責務があると考える。

【参考文献】

・鈴木英治『紙の劣化と資料保存』日本図書館協会, 1993.
・飯島正行他「書籍保存におけるオリジナリティを考える～東北大学附属図書館所蔵貴重書に対する保存修復処置事例から～」第35回文化財保存修復学会ポスター発表, 2013.
・『東京製本倶楽部20年、ルリユールのあゆみ』東京製本倶楽部, 2019.
・国立公文書館「アーカイブズ資料の展示に関するガイドライン」http://www.archives.go.jp/about/report/pdf/tenji.pdf
・Edith Diehl. *Bookbinding its background and technique*. Dover Publications, 1980.
・牧経雄『製本ダイジェスト』印刷学会出版部, 1978, ８刷.

修復資料リスト

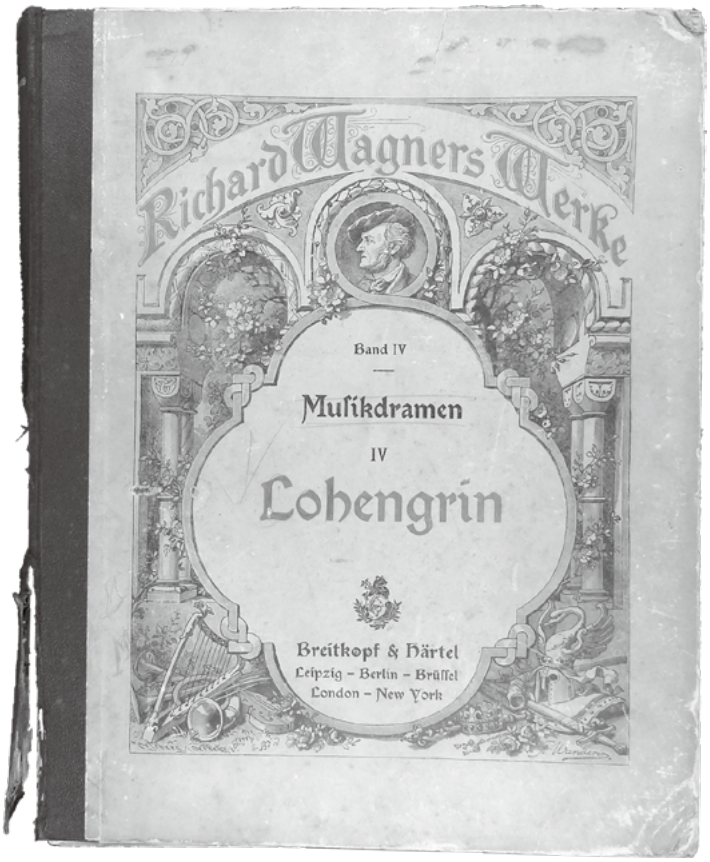
No.	実施年度	請求記号	タイトル	出版地	刊年	製本形態	綴じ	備考
1	2016	M-1/55	Verzeichnis fur Musikalische Bibliothek（ドイツ音楽大学目録？）			紙くるみ	中綴じ（仮綴じ風）	
2	2016	N-4/40	Anthems early manuscripts. Score			フォルダー（ボール紙）、背クロス	なし	9種類の楽譜を収納
3	2016	N-7/21	The king shall rejoice（宗教的混声合唱楽譜）			オリジナルは総羊皮紙装本か？	かがり綴じ	現状は鞣し革の上に赤色クロスで背表紙を修復か？
4	2016	N-3/19	I Pellegrini al sepolcro di N.s.			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ（目引きなし）	
5	2016	N-4/41	Dido and Aeneas（歌劇ディドとエネアス）			角革装とじつけ製本（平はクロス）	かがり綴じ（疑似背バンド5本）※最終丁あたりはからげ綴じとなっている。	
6	2016	K-13	Missale Romanum（ローマ教会ミサ典書）	Antuerpianam（アントワープ）	1651	総革装とじつけ製本	背バンド綴じ（2丁抜き綴じ）	
7	2016	N-1/17	5 Arias score			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	
8	2016	N-2/1	Arie del' opera di Siface nel Carnevale 1730 Roma			セミリンプ製本	かがり綴じ（目引きなし）	
9	2016	N-2/2	Arie del' opera di Siface nel Carnevale 1730 Roma			セミリンプ製本	かがり綴じ（目引きなし）	
10	2016	N-3/3	Haendel' s song from his oratorios			総革装とじつけ製本	かがり綴じ（最初と最終丁はからげ綴じ）	
11	2016	N-3/4	Samson act. I			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ（部分的にからげ綴じあり）	
12	2016	N-3/4	Samson act. III			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ（部分的にからげ綴じあり）	
13	2017	N-6/99	Overture to Euryanthe by C.M. von Weber Score		1786~1826	紙くるみ製本（表裏の表紙部分には厚紙あり）	四ツ目平綴じ（2本取り）	
14	2017	N-3/22	Ode for New Year' s Day			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ（疑似背バンドx2）	
15	2017	M-7/25	Storia della Musica, tomo primo	Bologna	1757	半革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	再製本か？
16	2017	N-5/19	Autograph sketch book of James Hook		1811	総革装とじつけ製本	背バンド綴じ（2本取り）	
17	2017	N-6/72	An Ode performed upon the Duke of Gloucester' s Birthday composed by Henry Purcell		1831?	総クロス装くるみ製本	かがり綴じ（2丁抜き綴じ）	
18	2017	N-4/11	W.A.Mozart,Sinfonia No.34（W.A.モーツァルト交響曲第34番）		1800頃	フォルダー	中綴じ（簡易）、うら見返しと最終丁は帯状の布4枚で接続されている。	フォルダーと中身は別個と思われる。
19	2017	N-7/52	Athalia an oratorio			半クロス装くるみ製本	皮テープ綴じ（部分的にからげ綴じあり）	オリジナルは総羊皮紙装と思われ、背表紙部分の布は後補
20	2017	N-3/5	Samson act II			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ	
21	2017	N-3/24	Smith John Christopher 1712-1795 Works vocal selections			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ	
22	2017	N-6/91	Louis Spohr 2nd concertante duett for two violins. . .			総クロス装くるみ製本	かがり綴じ	
23	2017	N-3/14	Gless Catches etc. by various composers original autograph compositions		1873	半クロス装くるみ製本（平はマーブル紙）	無線綴じ（膠）	
24	2017	N-3/18	Muzio Scevola			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ	
25	2018	N-4/23	Beethoven, L. v. Symphony no.9	Mainz	1825	角革装とじつけ製本	かがり綴じ	
26	2018	M-3/3	De tutte l' opere del R.M. Gioseffo Zarlino da Chioggia	Venetia	1589	半革装とじつけ製本	背バンド綴じ（支持体は革）	
27	2018	N-4/28	Grand Symphonies Luigi Boccherini			紙くるみ製本	未綴じ	
28	2018	N-3/13	A guide through the Royal Academy, by Joseph Baretti	London	1781	半革装とじつけ製本	背バンド綴じ	
29	2018	N-6/103	Deliciae Musicae	London	1695	総革装とじつけ製本（起毛革）	背バンド綴じ	
30	2018	N-3/29	教会音楽集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ	

No.	実施年度	請求記号	タイトル	出版地	刊年	製本形態	綴じ	備考
31	2018	N-4/38	J. フック：キャッチ、グリーとカノン集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本（起毛革）	背バンド綴じ	
32	2018	N-3/35	イギリス鍵盤音楽集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本	かがり綴じ（支持体はトーイング革）	
33	2018	N-2/14	D. チマローザ：行進曲《ラ・サンニテ》ほか（筆写楽譜）			半革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	テープ（皮）綴じ	
34	2018	N-6/61	イタリアの声楽曲集（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	中綴じ、平綴じが混在。最終的にパーチメント製の糸による平綴じでまとめている。
35	2019	N-4/39	イギリスのパートソング集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本（起毛革）	かがり綴じ	
36	2019	N-6/21	4 巻からなるイタリアの声楽曲集（筆写楽譜）			角革装（表紙と中身の接続はなく、表紙はフォルダとしての役割）	中綴じ、平綴じで各巻が綴じられている。	
37	2019	N-7/49	M. コスタ：オペラ《マレク・アデル》vol.1（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	
38	2019	N-7/50	M. コスタ：オペラ《マレク・アデル》vol.2（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	
39	2019	N-4/42	リュート曲集（筆写タブラチェア譜）			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ	
40	2019	N-3/36	サーヴィス、アンセム集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本 ※表紙ボードはフカフカして柔らかい印象	背バンド綴じ（支持体はトーイング革）	
41	2019	N-7/29	E.J. ローダー：オペラ《夜の踊り子たち》序曲（自筆楽譜？）			半革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ（部分的にからげ綴じ）	
42	2019	N-3/17	J.P. ザロモン：オペラ《ウィンザー城》（自筆楽譜）			角革装とじつけ製本	かがり綴じ（後半部分にからげ綴じ）	
43	2019	N-3/38	C.M.v. ウェーバー：オペラ《魔弾の射手》J.277（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	
44	2019	N-6/70	H. パーセル：3 声のソナタ集 Z.790 〜 801（筆写楽譜）			紙くるみ製本	中綴じ	2 冊
45	2020	N-6/106	作曲者不詳［ハーベルマン？］：ミサ曲 ハ長調（筆写楽譜）			半革装くるみ製本（平はマーブル紙）	平綴じ（からげ綴じ風）	
46	2020	N-2/3	L.ヴィンチ：1730 年ローマの謝肉祭で上演されたオペラ《アルタセルセ》のアリア集（筆写楽譜）			セミリンプ装	背バンド綴じ	
47	2020	N-3/23	M. グリーン：オード《ミューズの 9 人の女神たちよ、降り下り、歌え》（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ	
48	2020	N-7/30	G. ムッファット：2 つのヴァイオリン、2 つのヴィオラと通奏低音のための 5 つのソナタ（筆写楽譜）			表紙はフォルダとして存在し、角革装様式（平はクロス）	2 か所を紐で平綴じ（リングファイル風）	
49	2020	N-6/63	J.C. ペープシュ：8 つのヴァイオリンとバス、ヴィオール、あるいはハープシコードのためのソロ曲集、あるいはソナタ集（自筆楽譜）			角革装とじつけ製本（平は装飾紙）	背バンド綴じ	
50	2020	N-6/68	H. パーセル：4 声のソナタ 第 2 番 変ホ長調 Z.803（筆写楽譜）			なし	なし	
51	2020	N-4/31	J. レディング：オルガン曲集（自筆楽譜）			半革装とじつけ製本（平は洋紙）	からげ綴じで折丁をまとめつつ、背バンドに引っ掛けて綴じている。	
52	2020	N-6/77	P. サン＝ダロ：《英雄交響曲断章》（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はクロス）	テープ（皮）綴じ	
53	2021	N-7/51	サーヴィス集（筆写楽譜）			半革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ	
54	2021	N-2/4	パイジェッロ、チマローザらの作品からのシェーナ集（筆写楽譜）			半紙装とじつけ製本（平はマーブル紙）	テープ（皮）綴じ	
55	2021	N-3/27	アンセム、歌曲、器楽曲集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ	
56	2021	N-2/15	H. パーセルほか：3 声のソナタ集（筆写楽譜）			総革装とじつけ製本	背バンド綴じ	2 冊
57	2021	N-3/26	二重唱、三重唱、マドリガル、カンツォネット集（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ	
58	2021	N-3/28	5 曲のお気に入りイタリア歌劇の歌（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	背バンド綴じ（部分的にからげ綴じ）	かがり綴じがオリジナルで、からげ綴じで綴じ直したか？
59	2021	N-3/20	《調べあふれる仲間たち、あるいは詩編愛唱者たちの宝箱》（筆写楽譜）		1814?1815?	角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	かがり綴じ	
60	2021	N-3/22	W. ラッセル《イスラエルの贖い》（筆写楽譜）			角革装とじつけ製本（平はマーブル紙）	打ち抜き綴じ	綴じの痕跡（打ち抜き綴じ）と表紙に残る皮テープの関係が不明

資料紹介

ワーグナー《ローエングリン》　日本初演使用楽譜 (1)

Wagner, Richard. *Lohengrin*. Leipzig: Breitkopf & Härtel, [n.d.].
（収蔵番号 3K4.1/18 Ⅰ～Ⅳ）



「東京に着くと、留守中起工した上大崎の家が大体出来上がっていたので其処に落着いた。この家は、私の友人で、明治時代には2人の外国人建築家として名声嘖々たるものがあったうちの一人、米国人ガーデナー氏の設計したものである。私は妻と諮らってこの家をヴィラ・エリザと命名した。エリザは私たちの大好きなワグナーの楽劇《ローエングリン》のヒロイン、エルザを伊太利風に呼んだのである。」(2)

1921年11月、2度目の訪欧から戻った徳川頼貞は、ほぼ完成していた新邸を《ローエングリン》に因んでヴィラ・エリザと命名した。その時点までに、国内でワーグナー歌劇の舞台上演は一度もなかった。因みに、自著『薔庭樂話』には、頼貞が欧米で《ローエングリン》上演に接したという記述は見当たらない。

南葵音楽文庫所蔵の《ローエングリン》楽譜

《ローエングリン》全曲の楽譜は、南葵音楽図書館が蒐集活動を停止する1932年までに、少なくとも以下の３点を収蔵しており、いずれも現在和歌山県立図書館に収蔵されている。

①ミニチュア・スコア
配架：南葵音楽文庫閲覧室
Leipzig: Breitkopf & Härtel, 出版年記載なし。
歌詞およびト書き：独英仏語
蔵書印：南葵文庫　　統一装幀　署名なし

②ヴォーカル・スコア
配架：南葵音楽文庫閲覧室
Leipzig: Breitkopf & Härtel, 出版年記載なし
蔵書印：南葵文庫　　統一装幀　署名なし

③スコアとパート譜のセット
配架：書庫
収蔵番号 3K4.1/18 として、それぞれⅠ～Ⅳのローマ数字を付された保存用紙袋に納められている。本稿で紹介するのはこのセットである。

（1）本稿は「南葵音楽文庫重要資料報告会」（2021 年 11 月 20 日）における筆者の報告をもとに、大幅に加筆したものである。この報告については、12 月 5 日付け毎日新聞和歌山版に記事が掲載された。
（2）徳川頼貞『薔庭樂話』私家版 (徳川頼貞刊 , 1941), p. 233-234; 復刻版 (中央公論新社 , 2021), p. 235

◎保存袋Ⅰ　スコア
Richard Wagners Werke / Band Ⅳ / Musikdramen / Ⅳ / Lohengrin / Breitkopf & Härtel / Leipzig – Berlin – Brüssel – London – New York
出版年記載なし [1887]
印：南葵樂堂圖書部

◎保存袋Ⅱ～Ⅳ　パート譜
Breitkopf & Härtels Orchesterbibiliothek. / No.1265 / Wagner/ Lohengrin / Romantische Oper in 3 Akten / [Violine Ⅰ] / Verlag von / Breitkopf & Härtel / in / LEIPZIG
出版年記載なし [1883]
印：南葵音樂圖書館

■所蔵パート譜の内訳 (部数) : Flute Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Oboe Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Clarinet Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Bass Clarinet (1)、Bassoon Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Horn Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Trumpet Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Trombone Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Tuba (1)、Timpani (1)、Percussion (1)、Organ (1)、Violin Ⅰ (3)、Violin Ⅱ (5)、Viola (4)、Violoncello (3)、Double-Bass (3)　舞台上用 : Flute Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Oboe Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Clarinet Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Bassoon Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ (各1)、Horn Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ (各1)、Trumpet Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ (各1)、Trombone Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ (各1)、Timpani (1)、Harp (1)　ほかに 3 Trumpets (Söller links) (1)、3 Trumpets (Thurm rechts) (1)

収蔵時期

南葵文庫の蔵書を、音楽資料など一部を除き東京帝国大学に寄贈したのは1924年7月であり、以後収蔵した資料は同年10月開設した「南葵樂堂圖書部」の印が押印された。その期間は短く、翌1925年10月、南葵音楽事業部設立、その附属機関として南葵音楽図書館が開設されるとともに、蔵書印も「南葵音樂圖書館」に改められた。

蔵書印の比較から、「南葵文庫」印のある①および②が③に先行して収蔵されていた点が明らかになる。1917年10月に刊行した楽譜所蔵目録には、ライプツィヒを出版地とする2点の《ローエングリン》が記されている(3)。記載事項が曲名、出版地、所蔵番号に限られているが、①と②にあたるであろう。留学から帰国、南葵楽堂着工に先立ち、南葵文庫音楽部として蒐集を開始して間もない時期には、すでにこの2点の《ローエングリン》楽譜が頼貞のもとにもたらされていた。なお、頼貞はオペラ鑑賞に際しその楽譜を購入した際には、英語で購入日、場所を扉ページ等に記し、署名する例がある。この2冊にはそれが見当たらないため、南葵文庫音楽部として発注購入したものであろう。

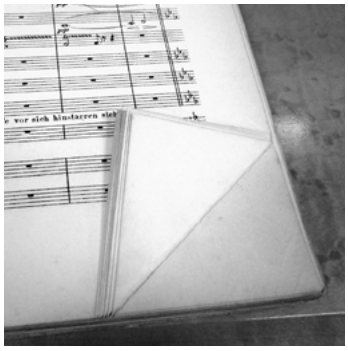
本稿の対象である③は、発注時期は不明ながら押印された蔵書印により、スコアは1924年から翌年に、パート譜は1925年以降に収蔵されたことが明らかである。

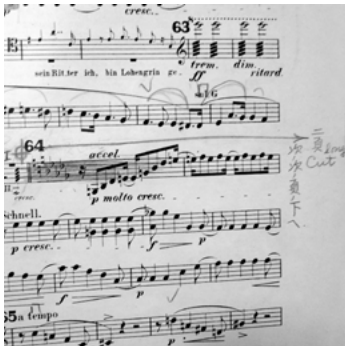
資料の状態

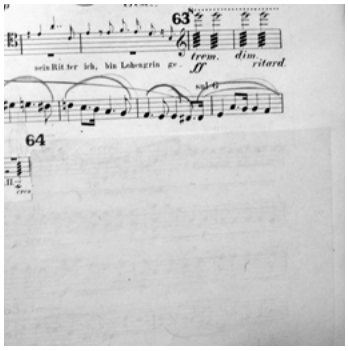
スコアとパート譜一式は、現在4つの紙製保存袋に分け、一括して保管されている。保存袋は、1970年前後に日本近代文学館においておこなわれた整理作業の際に用意され、袋には各パート譜の数が記載されている。それ以前の保管方法については不詳。

スコアおよび大半のパート譜は、演奏のために使用された痕跡を強くとどめている。スコアは、鉛筆等による書き込みはほとんど見られないものの、10ページ前後をまとめて繰るための折が残されている。また、装幀のうち特に背の部分の損傷が大きい。裏表紙見返しには、慶應義塾図書館の返却日指定票が貼付され、そこには返却期限として「JAN 7 1943」の押印が見られる。

(3) *Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Score), I* [Nanki Bunko, 1917], p. 35. 1920 年に刊行された第 2 版でも同様の記載が維持されている。*Catalogue of the Nanki Musical Library (Musical Scores), II* [Nanki Bunko, 1920], p. 96.







パート譜では、表紙にプルト番号を鉛筆で書きとめている例が見られ、また譜面にはアーティキュレーションほか演奏上の留意点を青鉛筆で記入している例が多数認められる。しかし、最も特徴的なのは、途中演奏をカットする部分の指示である。その指示は、記号、欧文、日本語による青鉛筆等での書き込みとともに、譜面上に紙を貼る方法が採られている。ときには、楽譜見開きの大半に紙が貼られている例も見られる。またその箇所は全ての幕にわたる。一方、幕のなかのある場をそのままカットする指示は見られない。オペラ全体の構成を保持しながら、思い切った短縮版による演奏が目指されていたことが明らかである。それではこの楽譜は、どの演奏ないし上演に用いられたのであろうか。

日本における《ローエングリン》演奏

演奏ないし上演に約3時間30分を要し、3管編成のオーケストラに加え舞台上での演奏も必要とするこの作品は、1954年に徳川頼貞が没するまで、3回演奏機会があった。以下その一覧を示す(4)。

①1932年12月18日
クラウス・プリングスハイム指揮　東京音楽学校　会場：東京音楽学校奏楽堂　演奏会形式　前奏曲、第1幕のみの部分演奏。

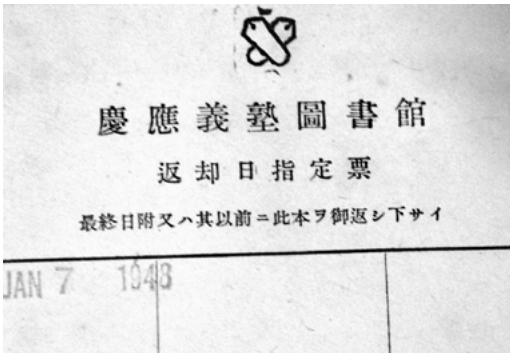
②1942年11月23 ～ 25日、26日（2回）、28日、29日（2回）（計8回上演）
マンフレート・グルリット指揮　藤原歌劇団第16回公演　会場：歌舞伎座　ローエングリン：藤原義江、エルザ：長門美保、笹田和子、ほか。日本初のワーグナー・オペラ全幕上演。

③1949年6月15日～ 7月3日（計25回上演）
マンフレート・グルリット指揮　藤原歌劇団第30回公演　会場：帝国劇場　ローエングリン:藤原義江、木下保ほか　エルザ:砂原美智子、ほか。

南葵音楽図書館と所蔵資料の環境

1932年11月30日	南葵音楽図書館閉館
1933年1月20日	南葵音楽事業部理事会 慶應義塾との寄託契約討議
同年3月	寄託　4月より公開
1941年11月	徳川頼貞『薈庭樂話』刊行 （私家版　限定50部）。 《ローエングリン》楽譜 使用に関する記述はない。
1945年6月2日	慶應義塾図書館より搬出。 以後1967年まで非公開。

東京音楽学校における演奏は、南葵音楽図書館閉館直後にあたる。1945年以後20年余りは非公開のまま私蔵されていたため、全曲にわたり楽譜を使用する機会は上記の②のみとなる。スコアに貼付された慶應義塾図書館の返却日指定票により返却期限が1943年1月7日とされ、その日かそれ以前に借出者から返却された。借出者と借



（4）増井敬二『日本のオペラ史 ～1952』昭和音楽大学オペラ研究所編 (水曜社, 2003) ほかによる。

出日は不詳。パート譜には借出、返却に関係する情報は見いだせない。

1942年の《ローエングリン》上演

それでは南葵音楽図書館所蔵、慶應義塾図書館寄託中のスコアとパート譜は、たしかに歌舞伎座における上演やその準備のために用いられたのであろうか。

増井敬二はその上演について以下のように記している。「同年秋にはさらに重要な公演があった。《ローエングリン》である。日本のオペラは、オルフェウス以来ワーグナーを目標として始まったのだし、藤原は指揮者にグルリットを得たときから、ワーグナー上演を窺っていたに違いない。

最初は4回だけの積もりだったのが、2日間で切符が売り切れてしまったので、3回追加したとのこと。藤原は「全く意外な好評で、歌舞伎座は連日補助席を出しつくし……」と述べている。グルリット自身が連日コレペティートアを務めた（彼は常にそうして日本人にオペラを教えた）練習のほかに、舞台稽古も深夜まで大変な騒ぎだったらしい。

なおこの公演は、戦時下で3時間以上の公演が許可されないので、若干部分をカットしたことが記録されている [公演プロ]。」(5)

引用中、「3時間以上の公演が許可されない」という記述は、精確さを欠く。十五年戦争下の興業時間等の統制強化のうち、1940年2月1日の興行取締規則（警視庁令）改正と即日施行、また同規則改正により3月15日以降午後10時以降の興行が禁止とされた。12月には内務省の情報局管制が公布され、その第五部が文化活動の統制にあたるようになった。1942年2月12日に情報局は英米系音楽の演奏を禁止するとともに興行時間4時間半等を通牒した(6)。興行時間は劇場が開場している時間で、上演前後や幕間も含まれる。《ローエングリン》は演奏に3時間30分程度を要するため、2つの幕間も含めれば、作品そのものの相当部分をカットする必要があった(7)。

結論：本資料の意義

南葵音楽図書館が1920年代半ばに購入した楽譜は、1942年に、寄託されていた慶應義塾図書館から借り出され、記念すべきワーグナー・オペラ日本初上演に寄与した。

返却された楽譜に残された書き込みや、貼られたままの紙は、戦時下の統制のもとでのオペラ上演の実際を今日まで伝えている。そこからは、幕や場をカットするのではなく、作品の骨格、物語の展開を維持しつつ上演時間を短縮するために、こまかなカットを重ねた努力が読み取れよう。

太平洋戦争開戦から約1年、すでに東京空襲が始まり、ガダルカナル島における戦局が困難な状況に至ったなかでの上演であった。戦後、藤原歌劇団は《ローエングリン》を再演したが、1945年に戦火を避けて慶應義塾図書館から搬出、私蔵されていた本資料は用いられていない。

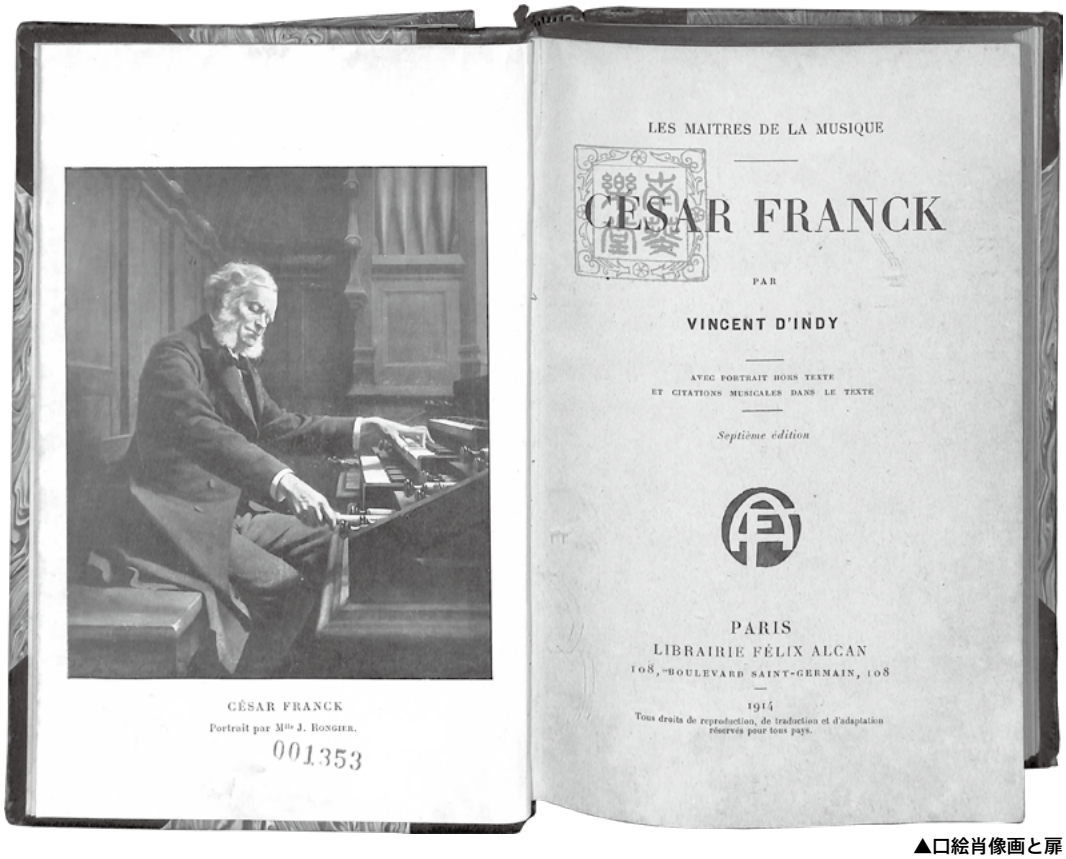
《ローエングリン》を愛好した徳川頼貞の著述中には、戦中戦後の藤原歌劇団による上演への言及は、今日までの調査では見当たらない。ちなみに1942年3月末からフィリピンに派遣されていた徳川頼貞は、同年12月10日に帰国。《ローエングリン》上演が終了してから11日後であった。日本で上演される日が来ることを望み、購入した楽譜が、わが国におけるワーグナー・オペラ初上演に寄与していることを、任務地で知っていたかは詳らかでない。

（美山良夫）

（5）増井 , 前掲書 , p. 280-281 (抜粋). 昭和音楽大学はこのプログラムおよび小原敬二撮影の舞台写真を所蔵している。

（6）馬場辰己編「戦中演劇年表」『日本演劇学会紀要』10 号 (1981), p. 39-50.

（7）1938 年 2 月、内務省令で興行時間 3 時間制限令が発令されていた。映画興行に対する制限令で、同時に映画フィルムの長さも規制された。



▲口絵肖像画と扉

ダンディ『セザール・フランク』

Indy, Vincent d'. *César Franck*, Pairs: F. Alcan, 1914
19.8 × 13.8cm. (収蔵番号 1.47/F-4)

ダンディと『フランク伝』

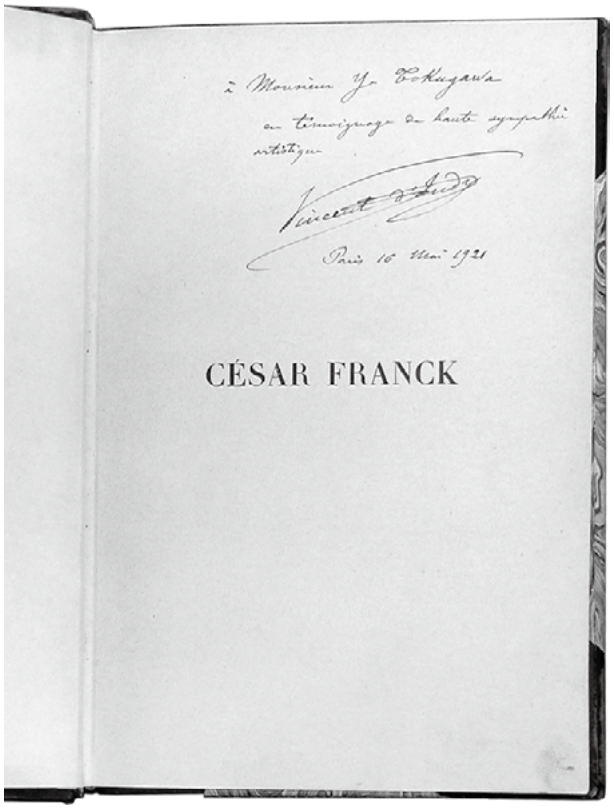
ダンディによるセザール・フランクの伝記。徳川頼貞への献辞がある。

ヴァンサン・ダンディ Vincent d'Indy (1851 ～ 1931年) は フランスの作曲家、理論家、教育者。ベルギー出身の大作曲家セザール・フランクに学び、デュパルク、ショーソンらとともに「フランキスト」と呼ばれる。ワーグナーの影響を受ける一方、「アルス・ガリカ」(フランスの芸術)をモットーに掲げた国民音楽協会に参画、のちに同会会長となる。また、古楽の復興にも熱心で、1894年にはパレストリーナをはじめとする古い時代の宗教音楽の教育・演奏を目的とした「スコラ・カントルム」を設立。「スコラ」はダンディの指導下に発展を遂げ、パリ音楽院と並ぶ高等音楽教育機関となった。

作曲家としては、歌劇、交響曲(4曲)、多数の管弦楽曲(交響詩)、室内楽曲、ピアノ・ソナタなど100曲あまりの作品を残した。また、『ベートーヴェン』『セザール・フランク』『作曲法講義』(全3巻)などの著作は邦訳もされて広く読まれた。

理想主義者で妥協を知らない性格のため、しばしば他者と衝突したが、教育者としては弟子の個性を尊重することもできたようで、多くの有能な音楽家を育てた。

頼貞宛ての献辞が書かれた『セザール・フランク伝』(1921年5月16日の日付あり) は、1914年、第7版。初版は1906年にFélix Alcan社から叢書「音楽の巨匠たち Les maîtres de la musique」の一環として刊行されており、1953年には同書の佐藤浩訳が「音楽文庫」の一環として音楽之友社から刊行されている。この本は、



Y.徳川氏に
芸術的共感の証として
ヴァンサン・ダンディ
1921年5月16日、パリにて

à Monsieur Y. Tokugawa
en témoignage de haute sympathie
artistique
Vincent d'Indy
Paris 16 Mai 1921

◀本文最初のページに記された献辞

ダンディにとっては、敬愛する師フランクについて書きながら、自分自身の音楽の理想を語った重要な本である。しかし、師をあまりにも偶像化しており、ダンディ自身の活動の「後ろ盾」にしている、との批判的な意見もあり、この点でダンディの「理想主義的だが頑固な面」を表していると見ることもできる(1)。

徳川頼貞、ダンディに会う

頼貞がダンディから『フランク伝』を献呈されたのは、第二次外遊におけるパリ滞在中のことであった。『薔庭樂話』によれば、頼貞がダンディに合ったのはホルマンを介してのことであった。「巴里の春も盛を過ぎ、次のロンシャンの競馬でこの春のセーゾンも終ろうという頃、一夕私はシャンゼリゼーのホテル・クラリッヂにダンディー[ママ] 翁夫妻とホルマン翁を晩餐に招待した。尤もこれは甚だ奇妙な取り合わせと云えば云えるので、ダンディー翁とホルマン翁とは全く正反対な肌合の楽人である。けれども私達にとって、この時を失っては再びダンディー翁に会う機会もないのではないかと思われたので、ホルマン翁の仲立ちでこの会食をすることにしたのであった。」(2)

「それから数日経って、ダンディー翁は私達夫妻を翁の経営する有名なスコラ・カントルーム [ママ] に招待して呉れた。学校は静かな落着いた処であつた。ダンディー翁は私達を案内して校内を一巡して呉れた。翁の受け持つ作曲の教室も見せてくれた。翁は其処で学生に話をされた。学生は皆ダンディー翁を心から尊敬しているように見えた。次に翁は私達を導いて講堂に行き、備付けのパイプ・オルガンで翁が敬愛するセザール・フランクの曲を奏してくれた。別れる時、私は厚く翁の好意を謝した。翁は自著「セザール・フランク伝」

(1) ロベール・ピトルー『フランス音楽の 11 人』藤原裕訳 (音楽之友社 , 1973), p.102 および p.196 参照。
(2) 徳川頼貞『薔庭樂話』美山良夫校註 (中央公論新社 , 2021), p.224.

と、翁自身の写真に署名して私達に呉れた。私達は良い記念品として今もそれを座右に持っている。」(3)

ダンディが頼貞に弾いて聞かせたフランクの作品の題名が『樂話』に記されていないのが惜しまれるが、「備付けのパイプオルガン」はシャルル・ミュタン製で、1902年に設置されている。ミュタン Charles Mutin（1861 ～ 1931年）は高名なオルガン製作者カヴァイエ=コル Aristide Cavaillé-Coll（1811 ～ 99年）の後継者。カヴァイエ=コルは、フランクとその弟子たちの音楽を語るときに落とせない名前である。

もうひとつの記念品　献辞の書かれた楽譜

頼貞は文中では触れていないが、『樂話』には夫人宛ての献辞が書かれたダンディ自筆の楽譜が掲載されており、これには1921年5月15日の日付がある(4)。これと『フランク伝』に記された日付に間違いがなければ、ホテル・クラリッジでの会食は5月15日で、頼貞がスコラ・カントルムを訪ねたのは、「数日経って」ではなく翌16日であったのかもしれない。

この自筆の楽譜は、ダンディの歌劇《聖クリストフォルスの伝説 *La légende de Saint Christophe*》の一部である。幼児イエスを担いで川を渡った聖者クリストフォルスの物語が題材で、台本は作曲者自身による。1908 ～ 15年作曲、1920年6月初演。ダンディが頼貞夫人に贈った楽譜は、この歌劇の主要主題、すなわち歌劇全体の核となるテーマである（次ページの写真と譜例を参照）。

▲ スコラ・カントルムの講堂
奥にオルガンが見える。頼貞がダンディの演奏を聴いたのはここであろうと思われる。
https://picclick.fr/CPA-Paris-5e-Schola-Cantorum-269-221851055689.html

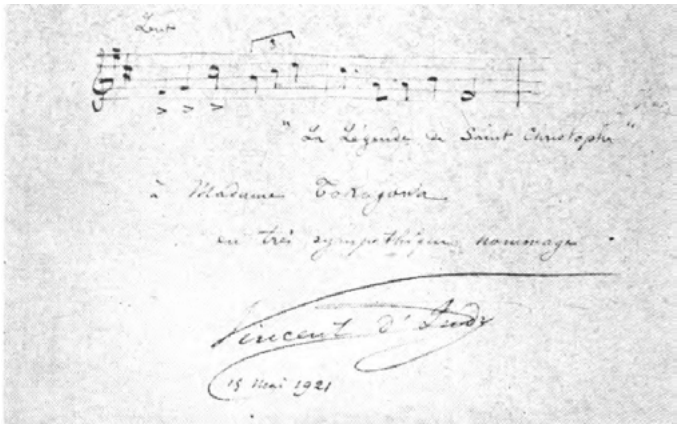
この歌劇は、当時のダンディにとっては最新作のひとつであり、全力を傾けた大作であった。献辞を添えて楽譜を贈るのにふさわしい作品であったろう。もっとも、この歌劇に対する後世の評価は必ずしも高くない。中世の神秘劇とワーグナーの影響とが混在していて、様式が折衷的であること、台本に難のあることがその理由であるが、さらに次のような指摘もある。「第一次世界大戦直前にはダンディの政治、宗教、芸術における保守的な信念はかたくななまでに強固となり、彼の誇り高い愛国心は攻撃的狂信性を帯びるようになった。《聖クリストフォルスの伝説》で第三共和政の政治を攻撃したほか、ラヴェルの音楽を含めた当時のいわゆる現代音楽に対して独自の宣戦布告をしている」(5)。

ダンディ夫人と《海辺の詩》

ダンディに関して頼貞が『樂話』で語らなかったことがある。それはダンディ夫人のカロリーヌ (愛称リーヌ Line またはリヌー Linou) がたいへん若く、当時34歳であったということである。ダンディ自身は70歳であった。

1905年12月に前妻イザベルに先立たれたダンディは非常に大きな精神的打撃を受けたが、1916年頃からカロリーヌ・ジャンソン Caroline Janson（1887 ～没年不明) と交際するようになり、歌劇《聖クリストフォルスの伝説》が初演されたあと、1920年10月に家族の猛反対を押し切って再婚。これがきっかけでダンディの生活は変化し、夫人の要望もあって夏の別荘を山

(3) 前掲書 p.226.「翁自身の写真」は、同 p.225 を参照。
(4) 同 p.225.
(5) ロバート・オーリッジ「ヴァンサン・ダンディ」『ニューグローヴ世界音楽大事典』10 巻（講談社 ,1994), p.369.
以下も参照。ピトルー , 前掲書 , p.171-175.



《聖クリストフォルスの伝説》

徳川夫人に
心からなる敬愛の念をこめて

ヴァンサン・ダンディ

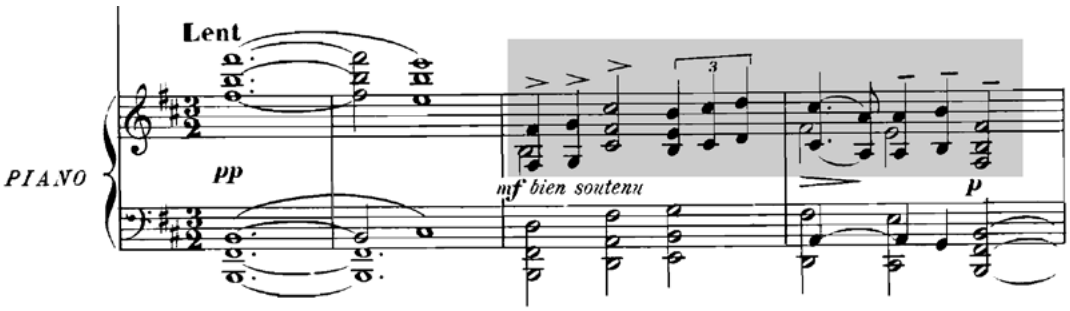
1921年5月15日

"La Légende de Saint Christophe"

à Madame Tokugawa
un très sympathique hommage

Vincent d'Indy

15 mai 1921



▲ ダンディ《聖クリストフォルスの伝説》〈プロローグ〉より、第1-4小節。
ヴォーカルスコア (Louart, Rerolle & Cie, 1918) より引用。

(アルデーシュ) から海 (コート・ダジュールのアゲ) に移すことになる(6)。頼貞がダンディ夫妻に会ったのは、ちょうどこの時期であった。

そして、ちょうどこの時期にダンディが作曲していたのが、管弦楽曲《海辺の詩 *Poème des rivages*》作品77 であった。この作品は1919-1921年に作曲され、ほかならぬ妻のカロリーヌに献呈された。ダンディは1920年の夏には、それまでと同様アルデーシュの別荘で筆を進めたが、翌1921年の夏にはアルデーシュへは行かず、アゲのホテルでこの曲を完成している(7)。つまり、ダンディは頼貞に会ったあとアゲに赴いて、書きかけだったこの曲を仕上げたわけである。

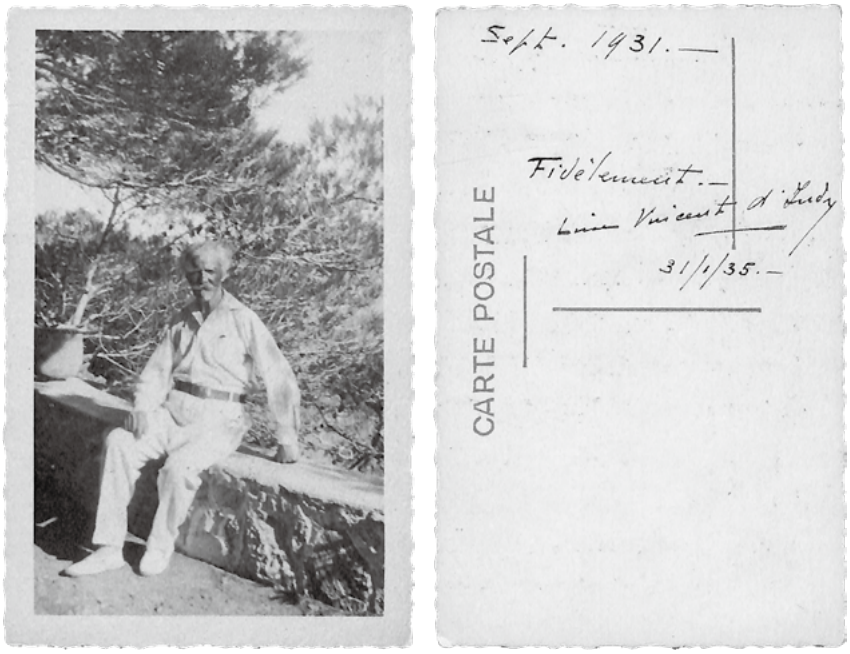
この山から海への移動は象徴的である。すなわち、アルデーシュの別荘で書かれた曲に《山の詩》《フランスの山人の歌による交響曲》《山の夏の日》《思い出》など、山に関するもの、前妻イザベルと関連したものが多いことを考えると(8)、《海辺の詩》がアゲで完成され、新妻カロリーヌに捧げられたことは、単なる偶然とは思われない。さらには、前妻イザベルが亡くなったのは1905年の暮れ、ダンディがアメリカへの演奏旅行から帰国した直後であったが、1921年の秋、ダンディは新作《海辺の詩》をひっさげて二度目のアメリカ演奏旅行に出発。12月1日、ニューヨークで自らの指

(6) ピトルー , 前掲書 , p.178-179.
(7) 新妻の要望もあって、こののちダンディはアゲに別荘を建てることになる。1925 年に完成した別荘は「船首 Étrave」と名付けられ、ここで管弦楽曲《地中海の二部作 *Diptyque méditerranéen*》作品 87（1925 ～ 26 年）が完成された。
(8) ピアノ曲《山の詩 *Poème des montagnes*》作品 15 (1881 年) ではセヴェンヌの山岳地帯を舞台に、イザベルとの出会いから結婚までが描かれている。交響詩《思い出 *Souvenirs*》作品 62 (1906 年) はイザベルが亡くなった翌年に作曲され、《山の詩》の「恋人」の主題が用いられている。

揮によりこれを初演している。頼貞が会ったころのダンディは、齢七十にして新たな人生の一歩を踏み出そうと決意していたのではなかったか。

おわりに　リーヌからの絵葉書

南葵音楽文庫関連資料のひとつに、ダンディの写真の絵葉書がある。送り主はダンディ夫人のリーヌであろう。署名には1935年1月31日の日付があるが、その上に“Sept. 1931”と記されていることから、写真そのものは1931年9月に撮影されたものと思われる。ダンディが他界したのは1931年12月2日であるから、最晩年の写真の一枚ということになるが、ダンディがこのように寛いだ格好でいる写真も珍しい。リーヌが頼貞に宛てた絵葉書は、「頑固で戦闘的な理想主義者」ダンディの知られざる一面を伝えてくれているように思われる。（近藤秀樹）



収蔵資料　目録と紹介

フリートレンダー文庫　目録と解説

林淑姫

フリートレンダー文庫の設置とその背景

フリートレンダー文庫は 1927（昭和 2）年南葵音楽図書館に設置された。ドイツの音楽学者マックス・フリートレンダー Max Friedlaender（1852 ～ 1934 年）よりその蔵書の一部を譲り受けたもので、ドイツで刊行された音楽書、音楽雑誌計 240 冊余からなるコレクションである。1918（大正 7）年の「カミングス文庫」に次いで設けられた。当時の文庫名は「マックス・フリードレンデル文庫」である[1]。

マックス・フリートレンダー（1914）　photo:Alamy

フリートレンダー文庫（以下「文庫」）受入れの経緯は次の通りである。

1926（大正 15）年、陸軍教授（ドイツ語担当）田村寛貞（1883 ～ 1934 年。東京音楽学校教授兼務）は、陸軍省より語学教育視察のためドイツ出張を命じられ、同年 9 月よりおよそ 1 年間ベルリンに滞在した（翌 27 年 7 月帰国）。田村はその前年に徳川頼貞によって創設された「南葵音楽事業部」に評議員として加わっており、ドイツ出張にあたって、事業部附属「南葵音楽図書館」のための資料調査と蒐集を依頼された。

東京帝国大学で音楽美学を専攻し、訳著『ハンスリックの音楽美論』（1924 年）を上梓していた田村にとってドイツ出張は待望の機会であったに違いないが、同時に南葵音楽図書館の蔵書計画を考えていた徳川頼貞にとってもまたとない絶好の機会となった。

頼貞は南葵楽堂竣工後の 1921（大正 10）年訪欧時に、音楽部図書室のための資料を買入れているが、その折の主たる蒐集資料は楽譜であった。1925 年 10 月、「南葵文庫」閉鎖後に独立して新たに出発した南葵音楽図書館にとって、文献の蒐集は次の大きな課題とされていた。

田村はベルリン到着早々に書籍蒐集の仕事に着手したようである。フリートレンダーを訪れて助言を得、おそらくは彼の紹介によって古書店との接触を開始した。古書店からは南葵音楽図書館蔵書の重要な柱ともなった稀覯書 50 点を含む音楽書を大量に購入している。詳細は分からないが、その調査蒐集作業の過程でフリートレンダーから蔵書の一部を譲る旨の申し入れを受けたものと推測される。司書喜多村進とともに資料整理にあたった評議員遠藤宏（1894 ～ 1963 年）が残した文書「1926 年から 27 年にかけてドイツで購入された貴重書目録」および「貴重書研究」稿[2]に「文庫」蔵書と相互補完する書物が含まれていることからも、このときの資料蒐集計画はフリートレンダーの協力のもとで展開された可能性が高い。

田村がどのようにしてフリートレンダーの助言を仰ぐに至ったか、そのいきさつは不明だが、同じく音楽事業部の評議員であり、附属研究室のメンバーでもあった兼常清佐（1885 ～ 1957 年）が

(1)『南葵音樂事業部摘要 第一』南葵音楽図書館 , 1929.4.

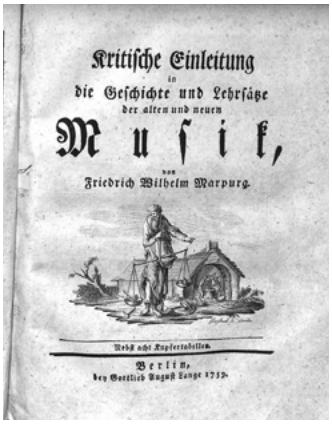
(2) 文書 *Catalogue of the rare books in the Nanki Music Library bought in Germany 1926-27* (南葵音楽図書館あるいは遠藤宏作成タイプ稿　B5 判用紙 10 枚) および遠藤宏自筆原稿「南葵音樂圖書館所蔵の貴重書を主題とせる書誌學的、音樂理論的、傳記的研究」（日付なし。400 字詰め原稿用紙本文 131 枚、前付 6 枚、ペン書）に拠る。ともに日本近代音楽館「遠藤宏文庫」蔵。

Allgemeine
Geschichte der Musik
von
Johann Nicolaus Forkel,
Erster Band.
Leipzig, im Schwickertschen Verlage, 1788.

フォルケル著書 （1788）

Der
Vollkommene
Capellmeister,
Das ist
Gründliche Anzeige
aller derjenigen Sachen,
der einer Capelle
MATTHESON.
Hamburg,

マッテゾン著書（1739）


Kritische Einleitung
in
die Geschichte und Lehrsätze
der alten und neuen
Musik,
von
Friedrich Wilhelm Marpurg.
Berlin,

マールプルグ著書（1759）

ベルリン留学中にフリートレンダーの知遇を得ていたという事情[3]を勘案すれば、あるいは兼常を介してのことであったかもしれない。

マックス・フリートレンダーについて

マックス・フリートレンダーはバリトン歌手としてデビュー、楽壇で活躍していたが、その後学問に転じ、ベルリンで音楽学をシュピッタ Philipp Spitta（1841 ～ 96 年）に、ドイツ文学をシェーラー Wilhelm Scherer（1841 ～ 86 年）に師事した。19 世紀ドイツ・アカデミズムの権威としてそれぞれの分野を牽引していた 2 人の教授のもとで研鑽を摘んだ彼は、その後長くベルリン大学教授を務め、ドイツ歌曲およびドイツ民謡研究の第一人者として知られた。主著に、ともに 2 巻本からなる *Das deutsche Lied im 18. Jahrhundert*（『18 世紀のドイツリート』）（1902 年）、*Gedichte von Goethe in Compositionen seiner Zeitgenossen*（『同時代の作曲家によって付曲されたゲーテの詩』）（1896, 1916 年）などがある。いずれもその分野の研究にあたって今日でも参照される名著である。

フリートレンダーは学問的な研究とともに原典資料に基づいた実践的な楽譜編集や各種の学術委員会にも精力的に参加し、資（史）料の蒐集の重要性を広く訴えた人物でもある。

南葵音楽図書館は資料の受入れ直後に整理を開始、およそ 1 年をかけて作業を完了し、資料は一般蔵書に組み入れられて排架された。その間に「文庫」資料のために特別な蔵書票を考案し、すべての書冊の見返しに貼付して感謝と敬意を表している（後述）。

文庫概要

フリートレンダーは極東の音楽専門図書館のために、自身の蔵書から参考図書類（書誌、カタログ）および音楽理論、音楽史の初版を含む古典的な文献とともに音楽雑誌を選んだ。書籍およそ 70 タイトルおよび 19 世紀から 20 世紀初頭にかけて刊行された音楽雑誌 21 タイトルである。

細目は別掲目録の通りだが、音楽書中主なものを挙げると、フォルケル J. N. Forkel の音楽史 *Allgemeine Geschichte der Musik*（1788 ～ 1801 年）や音楽文献目録（1790 年）、ヘンデルと親しい作曲家でもあったマッテゾン J. Mattheson の *Der vollkommene Capellmeister*（『完全なる楽長』）（1739 年）をはじめと

(3) 兼常清佐は 1922（大正 11）年から 24 年にかけてドイツに留学。留学最初の年の 10 月にフリートレンダーを訪問している（1922 年 10 月 31 日付 妻篤子宛絵葉書。蒲生美津子『音楽格闘家 兼常清佐の生涯』（大空社 , 2013.11）所収）。

BERLINER
ALLGEMEINE MUSIKALISCHE ZEITUNG.

Vierter Jahrgang.

Den 11. April. Nro. 15. 1827.

Beethoven ist gestorben.

Trauert dem Scheidenden nicht,
Haltet im Geiste ihn nah.
**Erste.

Nachruf an Beethoven.

Wär's mir verlieh'n, gleich Dir, Du hoher Meister,
Mit allgewalt'gen Klängen
Des Menschen Herz zu fassen, zu ergründen,
Dann rief' ich es in feiernden Gesängen
Dir nach in's Land der Geister,
Und jede eit'le Klage ließ ich schwinden;
Ich wollt' es freudig künden,
Daß Deines Kerkers Riegel
Geöffnet, daß gelöset sind die Bande,
Die Dich gefesselt an dem trüben Strande;
Daß nun der Aar entfaltet seine Flügel,
In ungekannter Wonne
Emporschaut in das Licht der ew'gen Sonne.

Denn Eigennutz nur ist es, wenn wir trauern,
Wir haben nur verloren,
Nicht der Vollendete, der nun geschieden.
Er ist zu neuem Leben neu geboren,
Er sieht in Wonneschauern
Erfüllet, was ihm Ahnung war hinieden.
Und ist er denn geschieden?

訃報「ベートーヴェン死す」
***Berliner allgemeine musikalische Zeitung*, vol.4, no.15**(1827.4.11)

する音楽論書、音楽批評家マールプルク F. W. Marpurg の音楽史論 *Kritische Einleitung in die Geschichte und Lehrsätze der alten und neuen Musik*（1759 年）や、ドイツ楽界に大きな影響を与えたバロック時代の思想家ダランベール Jean Le Rond d'Alembert の和声論のドイツ語訳書（1757）、レンツ W. von Lenz のベートーヴェン論（1855 ～ 60 年）などがある。

しかしこれらの書籍は前述のように、同時期に別途購入された書物と関連乃至補完するものであり、分析のためには双方一括して論じられるべきであろう。

一方『音楽事業部摘要』の筆者が「該文庫の特徴は 1790 年以降現代に至る音楽雑誌」と述べている通り、逐次刊行物は貴重で瞠目すべきものがある。1791 年ベルリンでライヒャルト J. F. Reichardt によって創刊された *Musikalisches Wochenblatt*（『週刊音楽雑誌』、のち *Berlinische musikalische Zeitung*）から、1824 年創刊の *Beliner allgemeine musikalische Zeitung*（『ベルリン音楽週報』）、ロベルト・シューマンによってライプツィヒで創刊された *Neue Zeitschrift für Musik*（『新音楽時報』1834 年創刊）を経て、*Bach-Jahrbuch*（『バッハ年報』1904 年創刊）、*Deutsches Musikjahrbuch*（『ドイツ音楽年鑑』1923 年創刊）に至るドイツ音楽雑誌 21 タイトルである。いずれもバックナンバーがほぼ揃っている。刊行継続中の *Bach-Jahrbuch*、*Neue Zeitschrift für Musik* などのタイトルは、その後南葵音楽図書館として直接購読の手続きをとり継承している。

以上の蔵書は前述の同時期に別途購入された資料群とともに、南葵音楽図書館の学術的な研究図書館としての性格を整

Neue Leipziger
Zeitschrift für Musik.

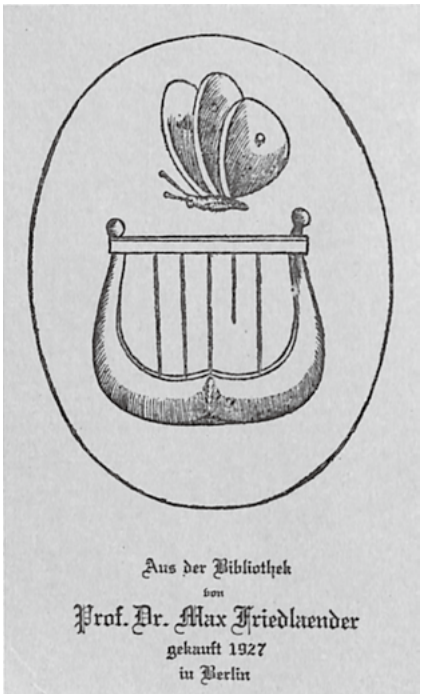
Herausgegeben
durch einen Verein von Künstlern und Kunstfreunden.

Erster Jahrgang. № 1. Den 3. April 1834.

Die alten.
Die nur ein lahlig Erbteil, Geschenk der Zeiten
Zu hören kommen, oder einen Mann
Im bunten Rock, mit Geld verkehrt, zu sehen.
Die treten hin. Shakspeare.

Diese Zeitschrift liefert:
Theoretische und historische Aufsätze, kunstästhetische, grammatische, pädagogische, biographische, akustische u. a. Nekrologe, Beiträge zur Bildungsgeschichte berühmter Künstler, Berichte über neue Erfindungen oder Verbesserungen, Beurtheilungen ausgezeichneter Virtuosenleistungen, Opernvorstellungen; unter der Aufschrift: Zeitgenossen, Stimmen mehr oder weniger berühmter Künstler, unter der Rubrik: Journalschau, Nachrichten über das Wirken anderer kritischen Blätter, Bemerkungen über Recensionen in ihnen, Zusammenstellung verschiedener Beurtheilungen über dieselbe Sache, eigne Resultate darüber, auch Auszüge der Künstler selbst, sodann Auszüge aus ausländischen, Interessantes aus älteren musikalischen Zeitungen.
Belletristisches, kürzere musikalische Erzählungen, Phantasiestücke, Scenen aus dem Leben, Humoristisches, Gedichte, die sich vorzugsweise zur Composition eignen.
Kritiken über Geistesergüsse der Gegenwart mit vorzüglicher Berücksichtigung der Compositionen für das Pianoforte. Auf frühere schätzbare, übergangene oder vergessene Werke wird aufmerksam gemacht, wie auch auf eingesandte Manuscripte talentvoller unbekannter Componisten, die Aufmunterung verdienen. Zu derselben Gattung gehörige Compositionen werden öfter zusammengestellt, gegen einander verglichen, besonders interessante doppelt beurtheilt. Zur Beurtheilung eingesandte Werke werden durch eine verläufige Anzeige bekannt gemacht; doch bestimmt nicht das Alter der Einsendung die frühere Besprechung, sondern die Vorzüglichkeit der Leistung.
Miscellen, kurzes Musikbezügliches, Anekdotisches, Kunstbemerkungen, literarische Notizen, Musikalisches aus Goethe, Jean Paul, Heinse, Hoffmann, Novalis, Rochlitz u. A. m.
Correspondenzartikel nur dann, wenn sie eigentlichstes Musikleben abschildern. Wir stehen in Verbindung mit Paris, London, Wien, Berlin, Petersburg, Neapel, Frankfurt, Hamburg, Riga, München, Dresden, Stuttgart, Cassel u. a. — Referirende Artikel fallen in die folgende Abtheilung.
Chronik, Musikaufführungen, Concertanzeigen, Reisen, Aufenthalt der Künstler, Beförderungen, Vorfälle im Leben. Es wird keine Mühe gescheut, diese Chronik vollständig zu machen, um die Namen der Künstler so oft, wie möglich, in Erinnerung zu bringen.
Noch machen wir vorläufig bekannt, daß, wenn sich die Zeitschrift bald einer allgemeinen Theilnahme erfreuen sollte, der Verleger sich erboten hat, einen Preis auf die beste eingesandte Composition, für's erste auf die vorzüglichste Pianofortesonate, zu setzen, worüber das Nähere seiner Zeit berichtet wird.
Ueber die Stellung, die diese neue Zeitschrift unter den schon erscheinenden einzunehmen gedenkt, werden sich diese ersten Blätter thatsächlich am deutlichsten aussprechen.
Wer den Künstler erforschen will, besuche ihn in seiner Werkstatt. Es schien nothwendig, auch ihm ein Organ zu verschaffen, das ihn anregte, außer durch seinen directen Einfluß, noch durch Wort und Schrift zu wirken, einen öffentlichen Ort, in dem er das Beste von dem, was er selbst gesehen im eigenen Auge, selbst erfahren im eigenen Geist, niederlegen, eben eine Zeitschrift, in der er sich gegen einseitige oder unwahre Kritik vertheidigen könne, so weit sich das mit Gerechtigkeit und Unpartheilichkeit überhaupt verträgt.

Neue Zeitschrift für Musik 創刊号（1834.4.3）



フリートレンダー文庫蔵書票

キルヒャー『ムスルギア・ウニヴェルサリス』第 1 巻
標題紙（ラテン語版初版 , 1650）

備し、欧米の水準に近づけたといってよい。それはまだ揺籃期にあった日本における音楽研究を推進するための基盤づくりである。徳川頼貞の将来を見据えた構想が見えてくる。

蔵書票について

既述の通り、南葵音楽図書館はフリートレンダー文庫を受け入れた際に蔵書票を作成した。「1927 年フリートレンダー博士の蔵書より譲り受けた」と記されたこの蔵書票の図は、佐々木勉氏が夙に指摘されているように [4]、17 世紀ドイツの異能の学者アタナシウス・キルヒャー Athanasius Kircher（1602 ～ 80 年）の音楽理論書 *Musurgia universalis*（『普遍音楽』）初版第 1 巻（1650 年）[5] の標題紙の挿図から採られた。遠藤宏は 1926~27 年に受入れた貴重書の解題稿（注 1 参照）で特に「文庫」蔵書票について触れ、上述書に基づいて作成されたことを記すとともに、図についてもジョン・ホーキンスの著書 [6] の一節を紹介して解説を試みている。図案は古代ギリシャの逸話――著名な二人の音楽家による競演の最中、一方の奏者のリラの弦が一本切れてしまったが、跳んできた蟋蟀（バッタ）の啼く音に補われて勝利を収めた――に由来する。音楽を宇宙論的にとらえるキルヒャーの意匠に南葵音楽図書館スタッフも感じ入ったようだった。彼らの表情が目に浮かぶ。

(4) 佐々木勉講演「『夢の多い子供』が創った音楽の聖地」（和歌山県立図書館「南葵音楽文庫定期講座」2019 年 9 月 29 日於・橋本市教育文化会館）
(5) 1926~27 年の蒐集計画の一環としてベルリンで購入（請求記号 M7/20.）。邦訳に、アタナシウス・キルヒャー『普遍音楽　調和と不調和の大いなる術』菊池賞一訳（工作舎 , 2013）。
(6) Hawkins, John. *A General History of the Science and Practice of Music* . London : Novello,1875.　遠藤宏が「蟋蟀」と充てた原文の語は "grasshopper".（請求記号 762/HA）

フリートレンダー文庫目録

（旧南葵音楽図書館所蔵「マックス・フリードレンデル文庫」）

【凡例】 目録は「書籍」と「逐次刊行物」の 2 部よりなる。当該資料は南葵音楽図書館編『南葵音楽図書館蔵書目録 第 1 部 音楽書 *Catalogue of the Nanki Music Library. Part 1 Musicology*』（1929 年）より抽出し、資料と照合した。

書籍は、旧南葵音楽図書館の分類ごとに区分し、細目は著者のアルファベット順に排列した。記述項目は、旧資料番号、著者（標目）、書名と著者表示および叢書、出版地＋出版者、刊年、形態、注記、現請求記号。

逐次刊行物の排列は創刊年順。記述項目は、旧資料番号、誌名、書誌事項（巻次、出版地、出版者、刊年）、所蔵事項（所蔵巻号および形態、注記、現請求記号）よりなる。刊行物の歴史性に着目して記述した。

書籍 M

M01 Bibliography & Catalogue

	旧資料記号 M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
1	01/97	Becker, Carl Ferdinand, 1804-1877.	Die Tonwerke des XVI. und XVII. Jahrhunderts, oder, Systematisch-chronologische Zusammenstellung der in diesen zwei Jahrhunderten gedruckten Musikalien. 2. Aufl.	Leipzig : E. Fleischer	1855	xiii, 358 columns. 28 cm.		760.31/BE/
2	01/101	Forkel, Johann Nikolaus, 1749-1818.	Allgemeine Litteratur der Musik, oder, Anleitung zur Kenntniss musikalischer Bücher, welche von den ältesten bis auf die neusten Zeiten bey den Griechen, Römern und den meisten neuern europäischen Nationen sind geschrieben worden / systematisch geordnet, und nach Veranlassung mit Anmerkungen und Urtheilen begleitet von Johann Nicolaus Forkel.	Leipzig : Schwickert	1792	xxiv, 540 p. ; 24 cm.	Page 441 numbered 144. "Verzeichniss musikalischer manuscripte, welche in verschiedenen europäische, theils öffentlichen, theils privatbibliotheken aufbewahrt werden": p. 485-504.	M-1/10/
3	01/59d	Haberl, Frz. Xav. (Franz Xaver), 1840-1910.	Bibliographischer und thematischer Musikkatalog des Päpstlichen Kapellarchives im Vatikan zu Rom / nach den Originalcodices bearbeitet von Fr. X. Haberl.	Leipzig : Breitkopf & Härtel	1888	xi, 183 p. illus. (music) 25 cm.	"Einzelabdruck aus den Rob. Eitner'schen Monatsheften für Musik-Geschichte. 2. Heft der "Bausteine für Musik-Geschichte".	760.3/HA/
4	01/100	Leipzig (Germany). Musikbibliothek Peters.	Katalog der Musikbibliothek Peters.	Leipzig : C.F. Peters	1894	2 vols. in 1 ; 28 cm.	Contents: Abt. 1. Theoretische Werke -- Abt. 2. Praktische Werke.	760.31/KA/1
5	01/98	Ruthardt, Adolf, 1849-1934.	Wegweiser durch die literatur des Männer-gesanges / von Adolf Ruthardt.	Leipzig : Verlag van Gebrüder Hug	1892	xv, 95 p. ; 18 cm.		760.31/RU/

M11 General Theory of Music

6	11/56	Alembert, Jean le Rond d', 1717-1783	Systematische Einleitung in die Musicalische Setzkunst, nach den Lehrsätzen des Herrn Rameau / Hrn. d'Alembert ; aus dem Französischen übersetzt und mit Anmerkungen vermehret von Friedr. Wilh. Marpurg.	Leipzig : bey Joh. Gottlob Immanuel Breitkopf	1757	136 p. ; 22 cm.		M-1/24

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
7	11/57	Marpurg, Friedrich Wilhelm, 1718-1795.	Anfangsgründe de theoretischen Musik / von Friedrich Wilhelm Marpurg.	Leipzig : Johann Gottlob Immanuel Breitkopf	1757	[6],176 p. ; 23 cm.		M-1/44
8	11/58	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Das neu-eröffnete Orchestre, oder univeselle und gründliche Anleitung / durch J. Mattheson.	Hamburg : auf Unkosten des Autoris, und zu finden in Benjamin Schillers Wittwe Buchladen	1713	338, [9] p. ; 13 cm.		M-5/27
9	11/59	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Das beschützte Orchestre, oder desselben zweyte Eröffnung / von Mattheson.	Hamburg : Zu finden im Schillers Wittwe	1717	561 p. ; 16 cm.		M-5/25
10	11/60	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Das forschende Orchestre, oder desselben Dritte Eröffnung / von Johann Mattheson.	Hamburg : bey Benjamin Schillers Wittwe	1721	[44], 789, [77] p. ; 16 cm		M-5/26
11	11/61	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Der vollkommene Capellmeister : das ist gründliche Anzeige aller derjenigen Sachen, die einer wissen, können, und vollkommen inne haben muß, der einer Capelle mit Ehren und Nutzen vorstehen will . . . / zum Versuch entworffen von Mattheson.	Hamburg : Verlegts Christian Herold	1739	28, [4], 484, [20] p. ; 33 cm.		M-3/10
	M13 Harmony, Thorough-Bass							
12	13/82	Klatte, Wilhelm, 1870-1930.	Grundlagen des mehrstimmigen Satzes (Harmonielehre) / von Wilhelm Klatte.	Berlin : Musikverlag "Eos" G.m.b.h.	1922	338 p. illus. (music) 24 cm.		761.5/KL/
13	13/84	Mattheson, Johann, 1681-1764.	Exemplarische Organisten-Probe im Artikel vom General-Bass ... / versehen von Mattheson.	Hamburg : Schiller- und Kissnerischen Buch-Laden	[1719]	[12], 128, 276 p. ; 21 cm.		M-1/29
14	13/83	Riedt, Friedrich Wilhelm, 1710-1783.	Versuch über die musikalische Intervallen : in Ansehung ihrer wahren Anzahl, ihres eigentlichen Sitzes, und natürlichen Vorzugs in der Composition / von Friedrich Wilhelm Riedt.	Berlin : A. Haude und J. C. Spener	1753	[6]. 32 p. : diagr. ; 22 x 18 cm.		M-6/71/
	M16 Form and Composition							
15(a)	16/40	Marpurg, Friedrich Wilhelm, 1718-1795.	Anleitung zur Singcomposition / von Friedrich Wilhelm Marpurg.	Berlin : Verlegts Gottlieb August Lange	1758	5 p. l., 206 p. : front. (port.) ; 22 x 18 cm.	Bound with: Kritische Einleitung in die Geschichte und Lehrsätze der alten und neuen Musik / von Friedrich Wilhelm Marpurg. Berlin, 1759.	M-1/11/
15(b)	16/40	Marpurg, Friedrich Wilhelm, 1718-1795.	Kritische Einleitung in die Geschichte und Lehrsätze der alten und neuen Musik / von Friedrich Wilhelm Marpurg.	Berlin : bey Gottlieb August Lange	1759	5 p. l., 246, [10] p. : front. (port.) VIII pl. ; 23 x 20 cm.	Bound with: Anleitung zur Singcomposition / von Friedrich Wilhelm Marpurg. Berlin. 1759.	M-1/11/

M22 Instrumental Music

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
16	22/22e	Bach, Carl Philipp Emanuel, 1714-1788.	Carl Philipp Emanuel Bach's Versuch über die wahre Art das Clavier zu spielen : im Gewande und nach den Bedürfnissen unserer Zeit / neu herausgegeben von Gustav Schilling. Vierte Auflage des Originals.	Herzberg : Verlag von Franz Mohr	1852	436 p. : 3 fold. tables, music, 23 cm.		M-1/36

M23 Conducting & Score-Reading

17	23/15	Widmann, Benedikt, 1820-1910.	Theoretisch-praktische Anleitung zur Partiturkenntnis für Lehrer und Lernende / von Benedikt Widmann.	Leipzig : Merseburger	1880	vi, 82 p. ; 24 cm.		761.2/WI

M41 General History of Music

18	41/54a	Brendel, Franz, 1811-1868.	Geschichte der Musik in Italien, Deutschland und Frankreich : von den ersten christlichen Zeiten bis auf die Gegenwart / fünfundzwanzig Vorlesungen von Franz Brendel. 7. neu durchgesehene u.vermehrte Aufl.	Leipzig : H. Matthes	1889	xii, 636 p. ; 23 cm.		762.3/BR/
19	41/37	Einstein, Alfred, 1880-1952.	Beispielsammlung zur älteren Musikgeschichte / von Alfred Einstein. (Aus Natur und Geisteswelt : Sammlung wissenschaftlich-gemeinverständlicher Darstellungen, Bd.439)	Leipzig ; Berlin : B.G. Teubner	1917	iv, 87, 15 p. ; 19 cm.		762/EI/
20	41/37	Einstein, Alfred, 1880-1952.	Geschichte der Musik / von Alfred Einstein. (Aus Natur und Geisteswelt : Sammlung wissenschaftlich-gemeinverständlicher Darstellungen, Bd.438)	Leipzig ; Berlin : B.G. Teubner	1918	126 p. ; 19 cm.		762/EI/
21	41/68b	Forkel, Johann Nicolaus, 1749-1818.	Allgemeine Geschichte der Musik / von Johann Nicolaus Forkel.	Leipzig : im Schwickerts-chen Verlage	1788-1801	2 vols. ; 25 cm.		M-6/21 M-6/22
22	41/66a	Kiesewetter, Raphael Georg, 1773-1850.	Geschichte der europäisch-abendländischen oder unsrer heutigen Musik / von R.G. Kiesewetter.	Leipzig : Druck und Verlag von Breitkopf und Härtel	1834	viii, 116 p., xx p. of plates ; 28 cm.		M-6/40-2/
23	41/89	Langhans, Wilhelm, 1832-1892.	Die Geschichte der Musik des 17., 18. und 19. Jahrhunderts in chronologischem Anschlusse an die Musikgeschichte von A.W. Ambros / von Wilhelm Langhans.	Leipzig : F.E.C. Leuckart	1882-87	2 vols ; 23 cm.		762/LA/1
24	41/91	Rau, Carl August, 1890-1921.	Geschichte der Musik vom Beginne der christlichen Zeitrechnung bis zum Ausgange des XIX. Jahrhunderts / von Carl August Rau. (Sammlung Kösel)	Kempten ; München : Jos. Köselschen Buchhandlung	1918	xiv, 272 p., [1] leaf of plates ; 18 cm.		762/RA/
25	41/90	Reissmann, August, 1825-1903.	Allgemeine Geschichte der Musik / von August Reissmann.	München : F. Bruckmann	1863-64	3 vols.; 24 cm.		762/RE/
26	41/92	Simon, Alicja, 1879-1957.	Polnische Elemente in der deutschen Musik bis zur Zeit der Wiener Klassiker / von Alicja Simon.	Zürich : Gebr. Leemann & Co.	1916	198 p. ; 23 cm.	Author's dedication signed.	762.3/SI/

M43 History-Ancient & Mediaeval

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
27	43/52	Emmanuel, Maurice, 1862-1938.	La danse grecque antique d'après les monuments figurés / par Maurice Emmanuel.	Paris : Librairie Hachette et Cie	1896	xv, 348 p., [10] leaves of plates (1 fold.) ; 25 cm.	Author's dedication signed.	769.3/EM/
28	43/50	Hagen, Friedrich Heinrich von der, 1780-1856.	Minnesinger : deutsche Liederdichter des zwölften, dreizehnten und vierzehnten Jahrhunderts, aus allen bekannten Handschriften und früheren Drucken gesammelt und berichtigt, mit den Lesarten derselben, Geschichte des Lebens der Dichter und ihrer Werke, Sangeweisen der Lieder, Reimverzeichnis der Anfänge, und Abbildungen sämmtlicher Handschriften / von Friedrich Heinrich von der Hagen.	Leipzig : Jof. Ambr. Barth	1838	4 vols. in 3 ; 19 cm.		762.3/HA/1
29	43/29b	Westphal, Rudolf, 1826 1892.	Geschichte der alten und mittelalterlichen Musik / von Rudolf Westphal. 1. Abt.	Breslau : F.E.C. Leuckart	1865	xii, 248 p. ; 23 cm.		762.0/WE/

M46 History of Various Forms of Music

30	46/6b	Botstiber, Hugo, 1875-1942.	Geschichte der Ouvertüre und der freien Orchesterform / von Hugo Botstiber. (Kleine Handbücher der Musikgeschichte nach Gattungen / herausgegeben von Hermann Kretzschmar, Bd. 9)	Leipzig : Breitkopf & Härtel	1913	274 p. ; 23 cm.		762/KL/9
31	46/95	Burkhardt, Max, 1871-1934.	Beiträge zum Studium des deutschen Liedes und seiner Anfänge im 16. und 17. Jahrhundert / eingereicht von Max Burkhardt.	Leipzig : Oscar Brandstetter	1897	71, 18 p. ; 23 cm.	Thesis (doctoral)--Universität Leipzig.	767.5/BU/
32	46/93	Goldschmidt, Hugo, 1859-1920.	Studien zur Geschichte der italienischen Oper im 17. Jahrhundert / von Hugo Goldschmidt.	Leipzig : Breitkopf & Härtel	1901-1904	2 vols. ; 24 cm.	Author's dedication signed.	766.1/GO/1&2
33	46/39b	Hanslick, Eduard, 1825-1904.	Musikalisches und litterarisches Kritiken und Schilderungen / von Eduard Hanslick. (Der moderne Oper, Bd. 5)	Berlin : Allgemeiner Verein für Deutsche Litteratur	1889	iv, 359 p. ; 22 cm.		761.1/HA/
34	46/29b	Hazay, Oe. von (Oedoen von).	Entwicklung und Poesie des Gesanges und die wertvollen Lieder der Gesamt-Musikliteratur / Oe.v. Hazay. 2. Aufl.	Leipzig: Max Hesse	1915	2 vols ; 22 cm.		767.0/HA1&2
35	46/94	Kiesewetter, Raphael Georg, 1773-1850.	Schicksale und Beschaffenheit des weltlichen Gesanges, vom frühen Mittelalter bis zu der Erfindung des dramatischen Styles und den Anfängen der Oper / von R.G. Kiesewetter, mit musikalischen Beilagen.	Leipzig : Druck und Verlag von Breitkopf & Härtel	1841	xii, 66 p., 105 p. of plates, 28 cm.	105 p of musikalische Beilagen.	M-6/41/
36	46/91	Schuré, Edouard, 1841-1929.	Edouard Schuré's Geschichte des deutschen Liedes / eingeleitet von Adolf Stahr. 3. Aufl. / herausgegeben von Oskar Schwebel.	Minden : J.C.C. Brun	1884	xvi, 408 p. ; 21 cm.		767.5/SH/
37	46/92	Sokolowsky, Rudolf.	Der altdeutsche Minnesang im Zeitalter der deutschen Klassiker und Romantiker / von Rudolf Sokolowsky.	Dortmund : F.R.W. Ruhfus	1906	iv, 169 p. ; 24 cm.	Author's dedication signed.	762.3/SO/
38	46/83b	Heydt, Johann Daniel von der, 1857-1935.	Geschichte der evangelischen Kirchenmusik in Deutschland / von Johann Daniel von der Heydt.	Berlin : Trowitzsch & Sohn	1926	238 p., [2] leaves of plates (1 fold.) ; 24 cm.		765.0/HE/

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
39	46/93	Weinmann, Karl, 1873-1929.	Geschichte der Kirchenmusik mit besonderer Berücksichtigung der kirchenmusikalischen Restauration im 19. Jahrhunderts / von Karl Weinmann. (Sammlung Kösel, Bd. 6)	Kempten ; München : Jos. Kösel	1906	vi, 186 p. ; 18 cm.		765.0/WE/

M47 History of Musical Notes & Their Printing

40	47/11b	Wolf, Johannes, 1869-1947.	Geschichte der Mensural-Notation von 1250-1460 : nach den theoretischen und praktischen Quellen / bearbeitet von Johannes Wolf . . .	Leipzig : Breitkopf & Härtel	1904	3 vols.; 24 cm.	Contents: 1. Geschichtliche Darstellung -- 2, Musikalische Schriftproben des 13. bis 15. Jahrhunderts -- 3. 78 Kompositionen des 13. bis 15. Jahrhunderts aus den Handschriften übertragen.	761.2/WO/3

M48 History of Conservatories, Societies, Musical Festivals, etc.

41	48/27	Florimo, Francesco, 1800-1888.	La scuola musicale di Napoli e i suoi conservatorii, con uno sguardo sulla storia della musica in Italia.	Napoli : Stabilimento tip. V. Morano	1880-81	4 vols. in 3; 24 cm.	Contents: v. 1. Come venne la musica in Italia, ed origine delle scuole italiane -- v. 2. Cenno storico sulla scuola musicale di Napoli, e suoi conservatorii, con le biografie dei maestri usciti dai medesimi -- v. 3. Cenno storico sulla scuola musicale di Napoli, e suoi conservatorii, con le biografie dei maestri usciti dai medesimi -- v. 4. Elenco di tutte le opere in musica rappresentate nei teatri di Napoli dal 1651 al 1881 con cenni sui teatri e sui poeti melodrammatici.	762.3/FL/1, 2, 3

M51 Biography

42	51/112b	Chevalley, Heinrich, 1870-1933.	Arthur Nikisch : Leben und Wirken / redaktionelle herausgabe Heinrich Chevalley.	Berlin : E. Bote & G. Bock	1922	220 p., [23] leaves of plates ; 25 cm.	". . . in Beiträgen von prof. Ferdinand Pfohl, Heinrich Chevalley, St. Stražnicky, Frau Louise Wolff, Helmuth Freiherrn Lucius von Stoedten, Prof. Heinrich Zöllner, Albert van Raalte, Alexander Moszkowski."	762.3/NI/
43	51/167b	Ernest, Gustav, 1858-1941.	Richard Wagner : sein Leben und Schaffen : mit vier Bildnissen und den Leitmotiven samtlicher Werke als Beilage / von Gustav Ernest.	Berlin : Georg Bondi	1915	viii, 537 p., [4] leaves of plates ; 23 cm.		762.3/WA/
44	51/403	Leitzmann, Albert, 1867-1950.	Beethovens Persönlichkeit ; Urteile der Zeitgenossen / gesammelt und erläutert von Albert Leitzmann.	Leipzig : Insel-Verlag	1914	2 vols. (445 p.), plates ; 21 cm.	Contents: Bd.1. 1770-1816 -- Bd. 2. 1817-1827.	762.3/BE/1 & 2
45	51/253a	Lenz, Wilhelm von, 1808-1883.	Beethoven : eine Kunststudie / von Wilhelm von Lenz.	Cassel : Balde	1855	2 vols ; 19 cm.	Contents: T.1. Das Leben des Meisters -- T. 2. Der Styl in Beethoven, die mit- und Nachwelt Beethoven, der Beethoven-status quo in Russland.	762.3/BE/1 & 2

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
46	51/253a	Lenz, Wilhelm von, 1808-1883.	Beethoven : eine Kunststudie / von Wilhelm von Lenz.	Cassel : Balde	1855-1860	3 vols. in 1 ; 19 cm.	Contents: T.1. Das Leben des Meisters -- T. 2. Der Styl in Beethoven, Die mit- und Nachwelt Beethoven, Der Beethoven-status quo in Russland -- T. 3. Kritischer Katalog sämmtlicher Werke Ludwig van Beethovens mit Analysen derselben.	M-5/22/
47	51/253a	Lenz, Wilhelm von, 1808-1883.	Beethoven : eine Kunststudie. Kritischer Katalog sämmtlicher Werke Ludwig van Beethovens mit Analysen derselben / von Wilhelm von Lenz. 2. verb. Aufl.	Hamburg : Hoffmann & Campe	1860	3 vols. ; 19 cm.	Theil 3-1, 4-1, 5-1 Contents: T.3. 1. Periode op. 1 bis op. 20 - 2. Periode op. 21 bis op. 100, erste hälfte op. 21 bis op. 55 -- T. 4. 2. Periode op. 21 bis op. 100, zweite hälfte op. 56 bis op. 100 -- T. 5. 3. Periode op. 101 bis op. 138.	762.3/BE/3, 4, 5
48	51/405	Levy, Gustav. 1824-1903.	Richard Wagner's Lebensgang in tabellarischer Darstellung / herausgegeben von Gustav Levy.	Berlin : Harmonie	1904	64 p., [1] leaf of plates ; 24 cm.	"Mit einem Portrait R. Wagner's und Anhang: Tabelle der hauptsächlichsten zeitgenössischen Opernwerke, nach den Jahren ihrer Erstaufführung geordnet."	762.3/WA/
49	51/404	Mühlbrecht, Otto, 1838-1906.	Beethoven und seine werke : eine biographisch-bibliographische Skizze / von Otto Mühlbrecht.	Leipzig : C. Merseburger	1866	vi, 119 p. ; 22 cm.		762.3/BE/
50	51/401	Reinecke, Carl, 1824-1910.	Meister der Tonkunst : Mozart, Beethoven, Haydn, Weber, Schumann, Mendelsohn / von Carl Reinecke.	Berlin ; Stuttgart : W. Spemann	1903	vii, 480 p. ; 24 cm.		762.8/RE
51	51/402	Reissmann, August, 1825-1903.	Johann Sebastian Bach : sein Leben und seine Werke / dargestellt von August Reißmann.	Berlin ; Leipzig : J. Guttentag	1881	viii, 283, 15 p., [1] leaf of plates ; 22 cm.		767.3/BA/

M52 Monographs

52	52/175	Dürenberg, F. L. S.	Die Symphonien Beethovens und anderer burühmter Meister : mit Hinzuziehung der Urtheile geistreicher Männer analysirt und zum Verständnisse erläutert / von F.L.S. von Dürenberg.	Leipzig : Heinrich Matthes	1863	181 p. ; 17 cm.		764.3/DU/
53	52/89a	Frimmel, Theodor von, 1853-1928.	Neue Beethoveniana : Neue Ausg. mit zwei ungedruckten Briefen Beethoven's an Goethe. Drei Heliogravuren und drei Phototypien / von Theodor Frimmel.	Wien : C. Gerold's Sohn	1890	viii, 369, [1] p. : ill., ports. ; 22 cm.		762.3/BE
54	52/179	Graf, Max, 1873-1958.	Wagner-Probleme und andere Studien / Max Graf.	Wien : Wiener Verlag	[Vorw. 1900]	182 p. ; 22 cm.		762.34/GR/
55	52/176	Koch, Ernst, 1839-?	Richard Wagner's Bühnenfestspiel "Der Ring des Nibelungen" in seinem Verhältniß zur alten Sage wie zur modernen Nibelungendichtung / betrachtet von Ernst Koch.	Leipzig : C.F. Kahnt	[1876]	93 p. ; 21 cm.		762.3/WA/

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
56	52/181	Kreitmaier, Josef, 1874-?	Wagners Weltanschauung und seine Tragödie des Goldes / von Josef Kreitmaier.	Freiburg : Herder	[1915]	p. [174]-189 ; p. [174]-189.	"Sonderabdruck aus den "Stimmen der Zeit" 90. Bd., 2. Heft, November 1915".	762.3/WA/
57	52/100b	Nottebohm, Gustav, 1817-1882.	Beethoven's Unterricht bei J. Haydn, Albrechtsberger und Salieri / nach den Original-Manuscripten dargestellt von Gustav Nottebohm. (Beethoven's Studien / Gustav Nottebohm. Bd. 1)	Leipzig ; Winterthur : J. Rieter-Biedermann	1873	vi, 232 p. ; 28 cm.		762.3/BE/
58	52/185	Sievers, G. L. P. (Georg Ludwig Peter), 1775-1830.	Mozart und Süßmayer : ein neues Plagiat, ersterm zur Last gelegt, und eine neue Vermuthung, die Entstehung des Requiems betreffend / von G.L.P. Sievers.	Mainz : Im verlage der Hof-Musikhandlung von B. Schott	1829	xl, 77 p. ; 23 cm.		M-6/92/
59	52/186	Staden, Sigmund Theophil, 1607-1655.	Das älteste bekannte deutsche Singspiel Seelewig / gedichtet von Georg Philip Harsdörffer ; in Musik gesetzt von Sigmundi Cottlieb Staden (Nürnberg, 1644). Neue Ausgabe / mit einem ausgesetzten Generalbass nebst Klavierauszug versehen von Rob. Eitner.	Berlin : T. Trautwein	1881	1 score (p. [53]-147) ; 23 cm.	Offprints: Monatshefte für Musikgeschichte, Jahrg. XIII, no. 4-6, 1881.	N-5/29/
60	52/178	Stefan, Paul, 1879-1943.	Die feindschaft gegen Wagner : eine geschichtliche und psychologische untersuchung / Paul Stefan.	Regensburg : G. Bosse	[1914]	96 p. ; 24 cm.		762.3/WA/
61	52/182	Stemfeld, Richard, 1858-1926.	Zur Entstehung des leitmotivs bei Richard Wagner / vom Richard Sternfeld.	Berlin : H. Paetel	1907	p. [106]-127 : 24 cm.	"Sonderabdruck aus dem " Richard Wagner-Jahrbuch" Bd. 2".	762.3/WA/
62	52/183	Weber, Gottfried, 1779-1839.	Ergebnisse der bisherigen Forschungen über die Echtheit des Mozartschen Requiem / Gottfried Weber.	Mainz : B. Schott's Söhne	1826	xxiv, 96 p. ; 22 cm.	"Sonderabdruck aus "Cäcilia", Heft 11".	M-6/17
63	52/184	Weber, Gottfried, 1779-1839.	Weitere Ergebnisse der weiteren Forschungen über die Echtheit des Mozartschen Requiem / Gottfried Weber.	Mainz : B. Schott's Söhne	1827	lvi p. ; 23 cm.	"Als Fortsetzung des (im Jahre 1826) vorangegangenen Heftes: Ergebnisse der bisherigen Forschungen über die Echtheit des Mozartschen Requiem, Mainz 1826. Besonders abgedruckt aus den Heften 22 und 23 der Zeitschrift Cäcilia".	M-6/102/
64	53/34	Liszt, Franz, 1811-1886.	Gesammelte Schriften / von Franz Liszt ; in das Deutsche übertragen / von La Mara, L. Ramann.	Leipzig : Breitkopf und Härtel	1880-82	6 vols. ; 24 cm.	Contents: Bd. 1. Friedrich Chopin -- Bd. 2. Essays und Reisebriefe eines Baccalaureus der Tonkunst -- Bd. 3. Dramaturgische Blätter : Essays über musikalische Bühnenwerke und Bühnenfragen, Komponisten und Darsteller ; Richard Wagner. -- Bd. 4. Aus den Annalen des Fortschritts : Konzert- und kammermusikalische Essays -- Kritische, polemische und zeithistorische Essays -- Die Zigeuner und ihre Musik in Ungarn.	760.4/LI/1-7

	旧資料記号M	著者標目	書名と著者表示、版表示（叢書）	出版地：出版者	刊年	形態	注記	請求記号
65	53/34	Kapp, Julius, 1883-1962.	Allgemeine Inhaltsübersicht / von Julius Kapp.	Leipzig : Breitkopf und Härtel	1910	48 p. ; 25 cm.	General table overview of the contents of the Gesammelte Schriften / von Franz Liszt.	760.4/LI/8
66	53/32	Reinecke, Carl, 1824-1910.	Aus dem Reich der Töne : Worte der Meister / gesammelt von Carl Reinecke.	Leipzig : E.A. Seemann	1907	vi, 207 p. ; 19 cm.		760.4/RE/
67	53/33	Stemfeld, Richard, 1858-1926	Aus Richard Wagners Pariser Zeit : Aufsätze und Kunst-Berichte des Meisters aus Paris 1841 / zum 1. Male hrsg. und eingel. von R. Sternfeld.	Berlin : K. Neelmeyer	[Vorw. 1906]	xxxii, 58 p. ; 19 cm.		762.3/WA/

M64 Aesthetics (or Philosophy of Music)

68	64/31	Emmanuel, Maurice, 1862-1938.	Histoire de la langue musicale / par Maurice Emmanuel.	Paris : Librairie Renouard, J.H. Laurens	1911	2 vols.(678 p.) ; 25 cm.	Contents: 1. Antiquité, moyen âge -- 2, Renaissance, époque moderne, époque contemporaine. Author's dedication signed.	762/EM/1 & 2
69	64/50a	Hanslick, Eduard, 1825-1904.	Vom Musikalisch-Schönen : ein Beitrag zur Revision der Ästhetik der Tonkunst / von Eduard Hanslick. 7. vermehrte und verbesserte Aufl.	Leipzig : Johann Ambrosius Barth	1885	xiii, 196 p. ; 19 cm.		761.1/HA/
70	64/89b	Kahl, Alexis 1878-?	Die Philosophie der Musik nach Aristoteles / vorgelegt von Alexis Kahl.	Leipzig : Breitkopf & Härtel	1902	47 p. ; 23 cm.	Thesis (doctoral)--Universität Leipzig.	761.1/KA/
71	64/51b	Köstlin, Heinrich Adolf, 1846-1907.	Die Tonkuns : Einführung in die Aesthetik der Musik / von Heinrich Adolf Köstlin.	Stuttgart : J. Engelhorn	1879	xii, 370 p., [6] leaves of plates ; 21 cm.		761.1/KO/
72	64/111	Nägeli, Hans Georg 1773-1836.	Vorlesungen über Musik mit Berücksichtigung der Dilettanten / von Hans Georg Nägeli.	Stuttgart ; Tübingen : J.G. Cotta	1826	xvi, 285 p. ; 22 cm.		M-1/12/

逐次刊行物
M03 Periodicals（創刊年順）

	書誌事項							所蔵事項			
	旧資料記号M	誌名	巻次	出版地	出版者	刊年	書誌注記	所蔵巻号	形態	所蔵注記	請求記号
1	03/35	Musikalisches Wochenblatt.	Heft 1-2 (Stück 1-24)	Berlin	In der Neuen Berlinischen Musikhandlung	1791-92	Hrsg. von J. F. Reichardt & F. L. Am. Kunzen. Contd. as: Musikalische Monathsschrift.	1-2	1 vol.		760.5/MU/1
2	03/36	Musikalische Monathsschrift.	Stück 1-6	Berlin	Berlinische Musikhandlung	1792	Hrsg. von J. F. Reichardt, Friedrich Ludwig Aemilius Kunzen. Contd. from July 1792: Musikalisches Wochenblatt. Contd. as: Berlinische musikalische Zeitung historischen und kritische Inhalts.	1-6	1 vol.	Signed by Ludwig Erk (1807-1883).	760.5/MU/1
3	03/37	Berlinische musikalische Zeitung historischen und kritische Inhalts.	1-51	Berlin	Im Verlage der neuen Musikhandlung	1793-94	Hrsg.von J. G. K. Spazier. Contd. from: Musikalischers Wochen Blatt (from July 1792: Musikalische Monatsschrift). Followed with an index as a substitute for issue 52 (undated).	1-51 (1793-94)	1 vol.		760.5/BE/
4	03/38	Berlinische musikalische Zeitung.	Jahrg. I (Nr. 1-104) - II (Nr. 1-52)	Berlin	Im Verlage der Frölichschen Buch- und Musikhandlung	1805-06	Hrsg. Von J. F. Reichardt.	I-II (Nr. 1-45, 47-52)	2 vols. in 1.	Signed by Friedlaender.	760.5/BE/1
5	03/45	Allgemeine musikalische Zeitung : mit besonderer Rücksicht auf den Österreichischen Kaiserstaat.	Jahrg. 1-8	Wien	S. A. Steiner	1817-1824	Hrsg.von Friedrich August Kanne. Title from 1824: Wiener allgemeine musikalische Zeitung (1824).	1-7	7 vols.		760.5/AL/1-7
6	03/39	Berliner allgemeine musikalische Zeitung.	Jahrg. I-VII	Berlin	Schlesinger	1824-30	Redigirt von A. B. Marx.	1-7 (1824-30)	7 vols.		760.5/BE/1-7
7	03/40	Cäcilia: eine Zeilschrifl fiir die musikalische Welt.	Bd.I-XXVII (Nr. 1-108)	Mainz ; Brusse1s ; Antwerp	Schott	1824-48	Title from 1826 (Bd. V): Caecilia. "Herausgegeben von einem Vereine von Gelehrten, Kunstverständigen und Künstlem". Hrsg. Von Gottfried Weber. Suppl: Inteligenzblatt.	1(1)-27(108)	108 nos. in 23 vols.		760.5/CA/
8	03/41	Allgemeiner musikalischer Anzeiger.	No. 1-52	Frankfurt a.M	A. Fischer	1826-27	Edited by F. Stöpel. Page numbers 209-268 not used. Supplements: Intelligenz-Blatt zum Allgemeinen Musik, Minerva, and Frankfurter dramaturgisches Wochenblatt.	No. 1-52, supple.	3 vols.		760.5/AL/
9	03/42	Allgemeine Musikzeitung zur Beföderung der theoretischen und praktische Tonkunst.	Heft 1-12 (Nr. 1-50)	Frankfurt a.M	Fischer Musik Verlags Handlung	1827-28	Contd. from: Allgemeiner musikalischer Anzeiger.	Nr. 1-50	2 vols. in 1.		760.5/AL/1

	旧資料記号M	誌名	巻次	出版地	出版者	刊年	書誌注記	所蔵巻号	形態	所蔵注記	請求記号
10	03/43	Iris im Gebiete der Tonkunst.	Jahrg. I-XII	Berlin	Trautwein	1830-41	Redigirt von L. Rellstab.	I-XII	12 vols.		760.5/IR
11	03/44	Neue Zeitschrift für Musik (Neue Leipziger Zeitschrift für Musik)	Jahrg. I-	Leipzig	C.F.H. Hartmann ; R. Friese ; B. Hinze ; C. F. Kahnt	1834-	Title of the first year: Neue Leipziger Zeitschrift für Musik. Founded by Robert Schumann. Hrsg. durch einen Verein von Künstlem und Kunstfreunden. Editors: Robert Schumann, Franz Brendel.	1834, 1840-45, 1850-56	21 vols.		760.5/NE/1
12	03/46	Zeitschrift für Deutschlands Musik-Vereine und Dilettanten.	Bd.I-V (Nr. 1-26)	Carfruhe	Chr. Fr. Müller	1841-45	Unter Mitwirkung von Kunstgelehrten, Künstlern und Dilettanten ; herausgegeben von F.S. Gassner.	I-II, IV-V	4 vols. in 6.		760.5/ZE/1-1
13	03/45	Allgemeine Wiener Musik-Zeitung.	Jahrg. I-VIII	Wien	Gedruckt bei Anton Strauß's sel. Witwwe, [et al.]	1841-48	Hrsg. von August Schmidt. Title from 1845: Wiener allgemeine Musik-Zeitung.		8 vols.	Signed by Carl Ferdinand Pohl (1819-1887).	760.5/WI/1-8
14	03/47	Deutsche Musik-Zeitung.	Jahrg. 1-3	Wien	Wesseln und Büsing	1862	Redigirt von Selmar Bagge. Contd. as: Allgemeine musikalische Zeiltung. Neue Folge.	1-3	1 vol.		760.5/DE/1
15	03/49	Allgemeine musikalische Zeitung. Neue Folge.	Jahrg. I-III	Leipzig	Breitkopf & Härtel	1863-65	Redigirt von Selmar Bagge. Contd. from: Allgemeine musikalische Zeiltung (1798-1848).	Jahrg. I-III	3 vols.		760.5/AL/1, 2, 3
16	03/50	Leipziger allgemeine musikalische Zeitung.	Jahrg. I-III	Leipzig ; Winterthur	J. Rieter Biedermann	1866-68	Hrsg.von Selmar Bagge, Friedrich Chrysander, Joseph Müller. Contd from: Allegemeine musikalische Zeitung. Neue Folge (1863-1865).	I(1866)-III(1868)	3 vols.		760.5/LE/1,2, 3
17	03/48	Musikalisches Wochenblatt : Organ für Tonkünstler und Musikfreunde.	Jahrg. I-XXXXI	Leipzig	E.W. Fritzsch	1870-1910	Hrsg. von Oscar Paul, E.W. Fritzsch, Carl Kipke, Ludwig Frankenstein.	I,V-VI(1870, 1874-75)	3 vols. in 2.		760.5/MU/1
18	03/33	Jahrbuch der Musikbibliothek Peters (Peters-Jahrbuch).	Jahrg. I-	Leipzig	C. F. Peters	1894-	Hrsg. von Emil Vogel (Jg.1-7) , Rudolf Schwartz (Jg.8-35), Kurt Taut(Jg.36-45), Eugen Schmitz(Jg.46-).	I-XXXII (1894-1925)	30 vols. in 10.		018.76/JA/1-10
19	03/19a	Bach-Jahrbuch.	Jahrg. 1-	Leipzig	Breitkopf & Härtel	1904-	Hrsg. von Neuen Bachgesellschaft, Arnold Schering.	1(1904)-22 (1925)	22 vols.		762.34/BA/1-22
20	03/18	Almanach der deutschen Musikbücherei.	1921-1926	Regensburg	G. Bosse	1921-27	Hrsg. von Gustav Bosse.	1921-1926	6 vols. in 5.		760.5/AL/ 1921-1926
21	03/26	Deutsches Musikjahrbuch.	Jahrg. 1, Bd.2-4, 1937	Essen	Rheinischer Musikverlag Otto Schlingoff	1923-26, 1937	Hrsg. von Rolf Cunz.	Jahrg. 1, Bd.2-4	3 vols.		760.59/DE/

南葵音楽文庫　活動の記録【2020年度】

※会場名の「県立」は特記なき場合すべて和歌山県立
◎はカレッジ　◇はセミナー

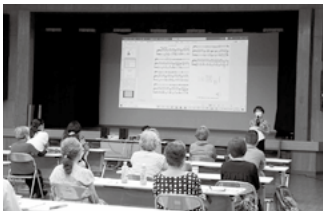
2020（令和2）年

7月31日　**南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』創刊号発行**

南葵音楽文庫アカデミー　2020年度《夏》

8月7日　◎「稀有な収蔵　カミングスとスナール」
講師：佐々木勉、近藤秀樹
会場：県立図書館 講義・研修室

8月8日　◎「南葵音楽文庫に宿る『魂』」
講師：美山良夫
◎「佐藤春夫と音楽」
講師：林淑姫
会場：新宮市役所 庁舎別館 大会議室



8月9日　◎「南葵音楽文庫に宿る『魂』」
講師：美山良夫
◎「徳川頼貞２つの『薈庭楽話』」
講師：泉健
◇ガイダンス「南葵文庫／南葵音楽文庫とその資料、関連する基本情報」
講師：美山良夫
会場：県立図書館 講義・研修室

8月29日～10月4日　**企画展「喜多村進と徳川頼貞──南葵音楽文庫をめぐるひとびと──」**（協力）
会場：県立博物館

8月30日　◇「徳川頼貞と喜多村進　和歌山県立博物館企画展に際し」
講師：竹中康彦、林淑姫
会場：県立図書館 講義・研修室

9月11日　**南葵音楽文庫アカデミー　2020年度《秋》**
◎「J. ホルマン──人、音楽とその魅力──」
講師：美山良夫、林裕
会場：県立図書館 講義・研修室

9月12日　◎「英国／アイルランドの風」
講師：守安功、守安雅子、佐々木勉
会場：橋本市教育文化会館 第１研修室

9月13日　◎「英国／アイルランドの風」
講師：守安功、守安雅子、木戸麻衣子、佐々木勉
会場：県立図書館 講義・研修室
◇「資料の見方、読み方、扱い方──カミングス文庫貴重資料を例に──」
講師：佐々木勉
会場：県立図書館 講義・研修室

10月11日　◇「徳川頼倫と頼貞　図書館とともに──南葵文庫、南葵音楽図書館のあゆみ──」
講師：林淑姫
会場：県立図書館 文化情報センター ふれあいルーム

11月8日　◇「徳川頼貞とオルガン──南葵楽堂オルガン設置100年──」
講師：近藤秀樹
会場：県立図書館 講義・研修室

11月8日～12月2日　**企画展「徳川頼貞の至宝」**（協力）
会場：東京都台東区立旧東京音楽学校奏楽堂

11月20日～11月30日　**第106回全国図書館大会和歌山大会**（オンライン大会）（協力）
◎記念演奏　──歌和するところ、音楽を楽しむ時──
演奏：県立星林高等学校吹奏楽部
◎記念講演「『理想』の図書館をもとめて　紀州徳川家当主たちの夢、明らかに」
講師：美山良夫

11月30日　**南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』第２号発行**

南葵音楽文庫アカデミー　2020年度《冬》

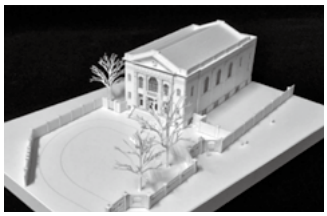
12月4日　◎「文庫の行方──失われた40年、だが…──」
講師：松下鈞
会場：県立図書館 講義・研修室

12月5日　◎「人物論・徳川頼倫──華族の品格──」
講師：林淑姫
◎「《ミカド》《ゲイシャ》《蝶々夫人》──西洋から見た日本像──」
講師：泉健
会場：県立情報交流センター Big·U 研修室１

12月6日　◎「人物論・徳川頼倫──華族の品格──」
講師：林淑姫
◎「徳川頼貞：「私性」と「公共性」の間で」
講師：美山良夫
会場：県立図書館 講義・研修室
◇「大正期の関西音楽界」
講師：塩津洋子
会場：県立図書館 文化情報センター ふれあいルーム

2021（令和3）年

1月10日　◇履修生による報告・発表
会場：県立図書館 文化情報センター ふれあいルーム



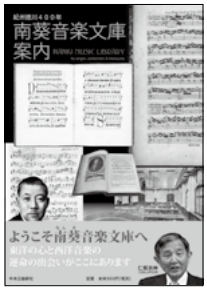
2月7日　◇「設計図面に見る南葵楽堂の建物」
講師：芹野与幸
会場：県立図書館 文化情報センター ふれあいルーム

3月5日　**南葵音楽文庫アカデミー　2020年度《春》**
◎「熟覧と細見　資料が語るヒストリー」
講師：近藤秀樹、佐々木勉
会場：県立図書館 講義・研修室

3月6日　**重要資料説明会**
会場：県立図書館 講義・研修室
南葵音楽文庫書庫見学会

3月7日　◎「紀州徳川ゆかりの建築遺構」
講師：中西重裕
会場：旧和歌山県議会議事堂
◇「紀州徳川ゆかりの建築遺構──湊御殿、名草御殿──」
講師：中西重裕
会場：旧和歌山県議会議事堂

3月23日　**「紀州徳川400年」記念出版**　中央公論新社より刊行
・徳川頼貞『薔庭楽話』（復刊）
・喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』
・『紀州徳川400年　南葵音楽文庫案内』



3月31日　**『南葵音楽文庫紀要』第４号発行**
南葵音楽文庫アカデミー Newsletter『南葵文華』第３号発行

南葵音楽文庫　紀要　第５号

令和4年3月25日発行
令和6年8月21日改訂

発　　行　和歌山県立図書館
〒641-0051　和歌山県和歌山市西高松一丁目7番38号
電話　073-436-9500
https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/

編集協力　有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒531-0071　大阪市北区中津七丁目３番２号１階
https://www.ttdesign.co.jp/

印刷製本　有限会社 隆文社印刷所
〒644-0002　和歌山県御坊市薗512
http://www.ryubunsha.com/

©2024 Wakayama Prefectural Library

本紀要には、地球環境を考慮した
植物油インキを使用しています。